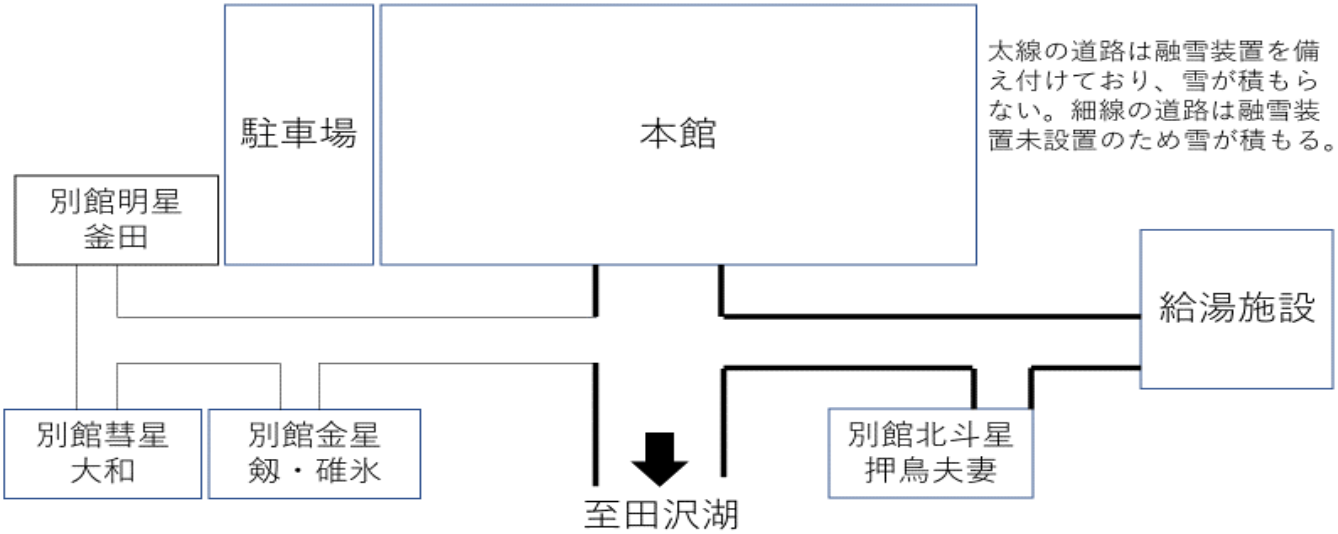
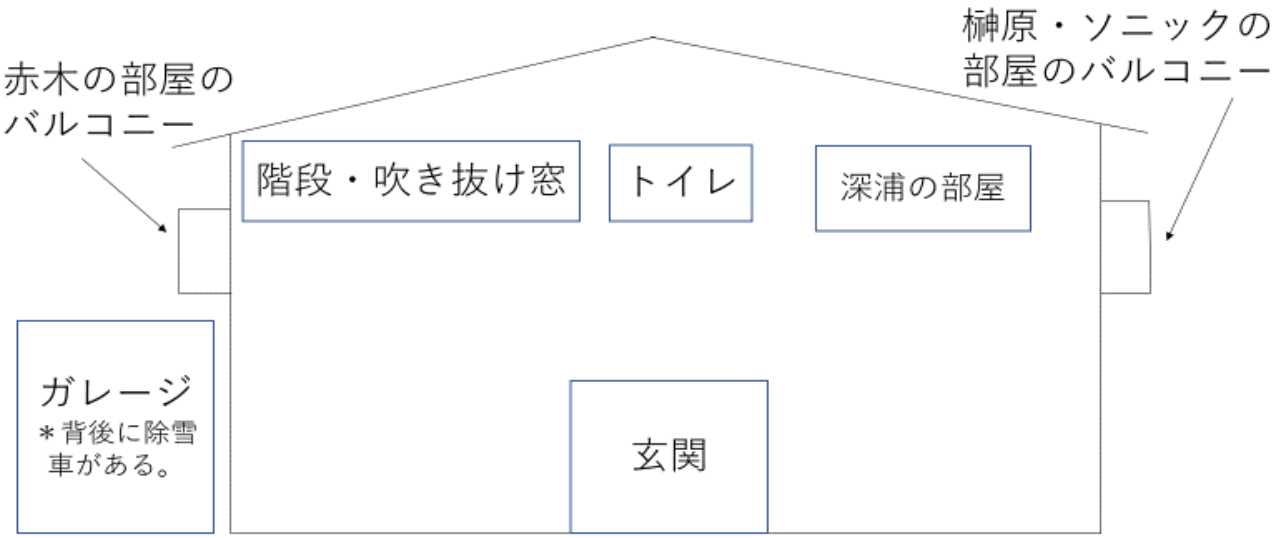
旅する女

南風　こまち

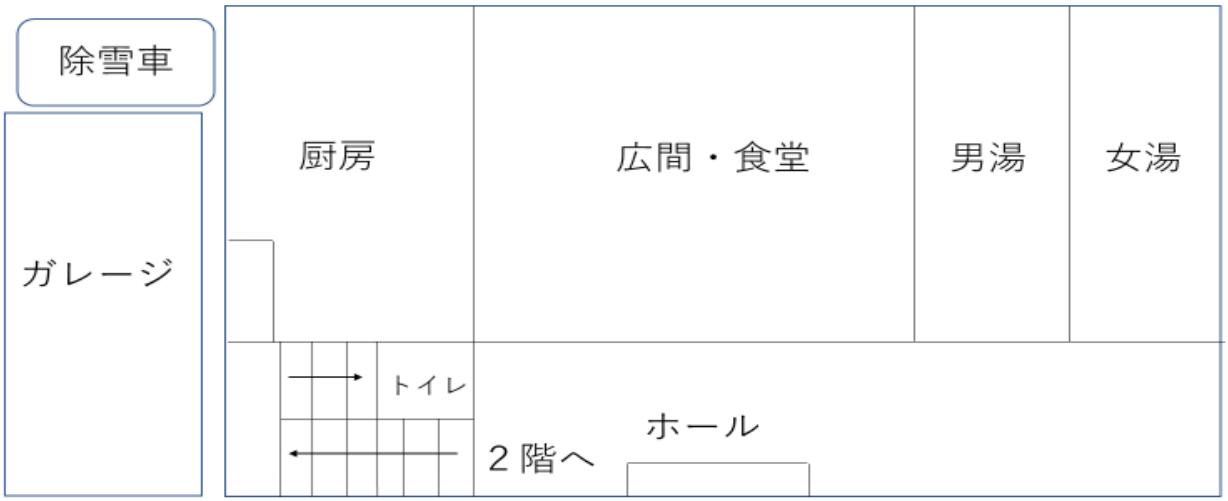
霧降荘　地図



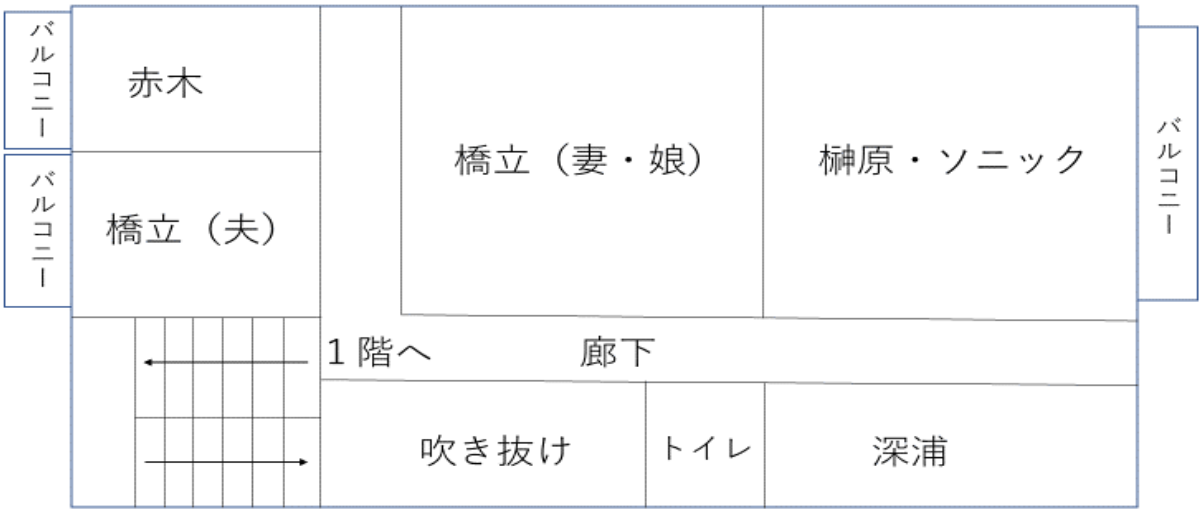
霧降荘　本館　正面図



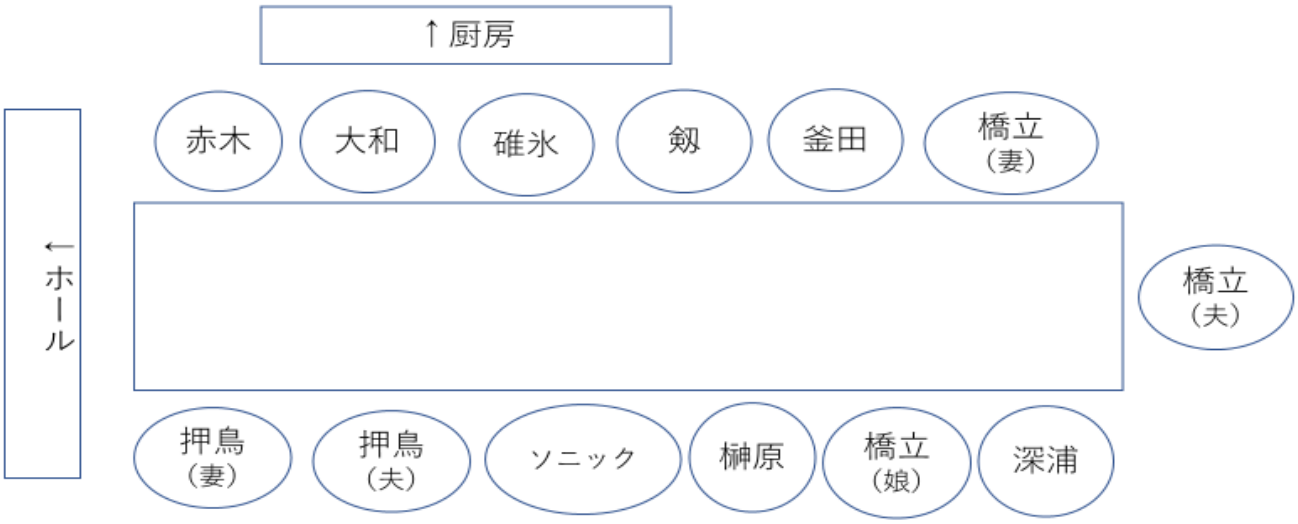
霧降荘　本館１階　内部



霧降荘　本館２階　内部



広間　席順



〈登場人物〉

橋立　漣丈：スペーシア製薬株式会社取締役委員。霧降荘当主。
橋立　星美：橋立漣丈の妻。
橋立　美由：橋立夫妻の娘。
深浦　力輝：橋立美由の婚約者。
赤木　真鈴：橋立夫妻の秘書。
剱　礼士：客人。秋田新幹線運転士。
碓氷　瑞穂：客人。剱礼士の恋人。居酒屋『かま田』従業員。
釜田　神威：客人。居酒屋『かま田』店主。
大和　叶：客人。居酒屋『かま田』従業員。
榊原　黎雅：客人。東京大和大学医学科３年生。
守・ソニック・隼人：客人。東京大和大学薬学科３年生。
押鳥　栄斗：客人。亀井麗音探偵事務所従業員。
押鳥　夏奈：客人。亀井麗音探偵事務所従業員。押鳥栄斗の妻。

〈キャラクター提供・コラボ協力〉

ＰＮ・おいらせ　氏（押鳥栄斗、押鳥夏奈）
ＰＮ・Ａｍｕｚａ　氏（榊原黎雅、守・ソニック・隼人）

以上二名に心からの感謝を申し上げます。（作者）

〈前回までのあらすじ〉

碓氷の父親は弟殺しの犯罪者だった。故郷を離れた彼女は石巻に辿り着き、暗い日々の中で心身に傷を負う。そんな過去もろとも剱は彼女を受け入れようとし、二人は心と体を重ねていく。そんな折、碓氷らは釜田からある誘いを受ける。

第六話　霧降荘の殺人

プロローグ

「情報が入りました」

冬になってからさらに腹回りがたるんだ興信所の担当者はそう報告した。

「見せろ」

俺の求めに応じてタブレットを差し出す。女の住所、彼氏の名前、職業……求めていたものが羅列されている。

「他の探偵事務所から情報提供がありました」

「間違いは無いんだろうな？」

「信頼できる筋のものです」

「よし。追加料金は後日振り込む」

今は手持ちの金が乏しいが、これは時間の問題だ。どうせこの女は俺のものになる。好きに搾り取ればいい。

「しかし、何をするつもりなんですか？　以前、情報を渡した3月には、あの女の部屋は……」

目線で黙らせる。担当者は僅かに肩をすくめ、事務的な口調に戻る。

「調査はまだ継続しますか？」

「いや、十分だ。だが、もしかしたらまた別件で依頼するかもしれない」

俺は写真を見た。大男の垂れ目が眼鏡の中から俺を見返している。

うらぶれた喫茶店を出て、提示された住所を目指して歩く。今年は冬の到来が例年よりもずっと早く、年越しを控えた秋田市内は既に大雪に閉ざされていた。

準備中の札を出した居酒屋の前を過ぎ、少し歩いたところにアパートが建っている。その一室を目指して階段を上る。

目的の部屋の前。２０３号室には「碓氷」という表札がかかっている。人目を確認して、そっと鍵をこじ開けにかかる。秋田で一度、小田原で一度。さすがに三回目ともなれば慣れたものだ。いや、小田原の時は白雪とかいう女に先回りされて、既に鍵が開いていたんだっけか。まあ、どうでもいいことだ。

今になって考えると、３月にあの女をそのまま殺そうとしたのは勿体無いことをした。どうせ5月に赤倉を殺すための実験だったとはいえ。

まあいい。回想にふける時間は山ほどある。石巻での日々、3月の爆破実験、あの女はどこまでもしぶとい。ならばいっそのこと。

鍵が開いた。中に入り、鍵を閉めた。

後は、女の帰宅を待つだけだ。そして、石巻での日々を再び味わえばいい。今度は独り占めできる。井上は死んだ……いや、殺されたのだから。

第一章

黒々としたタイヤが地を鷲掴みにする。勢いよく回り、雪を蹴散らす。

秋田県と岩手県の県境近くに位置する田沢湖。日本一の深さを誇るその湖の近くは県内有数の豪雪地帯だ。人里離れた山道を僕は駆けていた。

１８０度のヘアピンカーブ。ハンドルを強く回し、さ

ばく。タイヤが悲鳴を上げ、雪煙が舞う。タコメーターが跳ねる。
前方に捉えるはマツダ、RX-7。白兎のように軽やかに走る。とても悪路が苦手な後輪駆動とは思えない。……だが、ここは雪道。その走りも僕の愛車であるスバル・インプレッサには及ばない。
アクセルを踏み込む。エンジンの咆哮が雪山に響く。大体２００メートルくらいの直線。
抜ける。そう確信した。

＊　＊

日本で一番深い湖、田沢湖。岩手県との県境近くに位置するが、その近くに広がるのが乳頭温泉郷だ。濃い硫黄の泉質で知られる名湯、らしいのだが実際に行ったことはない。
メインの温泉街からは少し離れた山道を、私達はごろごろと揺られていた。
「そこ、左です。ここからははずーっと一本道ですよ」
我らがナビゲーション、叶ちゃんの指示に沿って釜田さんはハンドルを切る。雪深い森の中へ続く急斜面を釜田さんの愛車はぐいぐいと登っていく。
「今年は雪が深いな。まだ12月半ばだってのによ……」
釜田さんのぼやきに合わせるように、杉の木からの落雪が屋根を叩いた。
「まあまあ、これくらいの寒さの方が温泉も気持ちよく入れますよ」
礼士さんがフォローを入れる。私の隣で少し窮屈そうに巨体を縮めている。
「でも、本当に僕までお邪魔していいんですか？　本来は居酒屋『かま田』の出張みたいなものらしいですけど」
「向こうがいいって言ったんだ、構わねえさ。せっかく来た客を無下に追い返すこともしねえだろ」
釜田さんのもとに霧降荘からの仕事依頼が来たのは先秋のことだったと思う。いや、もっと前だったか？
「料理を作ってほしいって、誰からの頼みなんですか？　普段の釜田さんならまず間違いなく断るじゃないですか」
「俺が最初に店を出すときにいろいろ世話をしてくれた人でな、頭が上がらねえんだよ。橋立っていう人なんだけどな」
「料理を作らせるためだけに私達を泊りがけで呼ぶなんて、ずいぶん豪勢ですね」
最初の店……移転する前の店の話か。私の部屋ごと爆破に巻き込まれて今の店舗に移転したのは前回のゴールデンウイークだ。あの事件は警察の懸命な捜査にもかかわらず迷宮入りの気配が濃厚になってきていた。
「恩人からの依頼ってことですか」
「まあ、そんなとこだ。橋立って言うんだがな」
三人の会話をよそに、私は窓の外を眺める。今はまだ晴れているが、いつ雪が降りだしてもおかしくない。カーステレオからは小田原で白雪の裁判を傍聴した帰りと同じ、水樹奈々『chronicle of sky』がノリノリで流れている。
「本当、叶ちゃんはこの曲好きよね」
「だって元気が出るじゃないですか、これ。それでいて心に刺さるんですよ」
「サビの後半とかいいですよね。『いくつもの日々を乗り越え　そこにある自分が』」
『笑顔で居られるなら間違いじゃない』、ですよ。剱さん、分かってるじゃないですか」
生憎、質の悪い笑顔を向けられることが多かった私にはよく分からない。
「それで、橋立さんって何をやってる人なんですか？」
話題を強引に変える。
「スペーシア製薬ってあるだろ？　あの大手の。あそこの取締役委員をしてる橋立って男の妻だ」
「スペーシア製薬って……玉の輿じゃないですか」
叶ちゃんは丸い目をさらに丸くした。
「まあ、金にはそこまで不自由しちゃいねえだろうな」
対照的に釜田さんの口調は冷めている。でも、嫌っているような刺々しさは感じられない。そこまで興味が無いのだろう。
「俺達以外にも客人が来るって話だ。顔ぶれまではちゃんと知らねえが」
釜田さんはハンドルを回し、ヘアピンカーブをゆっくりと曲がる。奥羽山脈の中腹だ。道は険しい。
「このカーブを曲がって、あと１０分もありゃ着くだろ」
しかし、カーブを曲がり終えた先に何かが見えた。手を振る人影に私達は道を阻まれた。

＊　＊

雪国の陽は短い。まだ3時前だというのに、心なしか暗くなってきたような気がする。
「まっち、どうだ？」
「駄目だ、僕達だけでは埒が明かない」
「参ったな……まさか、カモシカが出るなんて」
「熊じゃなくて良かったよ。それにしても危なかったな、この下は崖だ。落ちたら命は無かったぞ」
ソニックは天パについた雪を振り払い、頑張って彼の愛車を吹き溜まりから掘り起こそうとしていた。カモシカを避けようとして吹き溜まりに突っ込んだのは、僕が彼の車を追い抜く直前だった。
「手掘りじゃどうにもならないな、雪かきとか無いか？」

「そんな荷物になるもの、あるわけないだろ」
僕は肩をすくめた。ソニックも僕の返事に期待はしていなかったようで、そのまま手掘りを再開する。
「だよな。どうする、霧降荘まで歩くか？　ここからそう離れていないはずだろ」
「ちょっと待て」
僕はソニックを押しとどめる。……車の音？　音がする方に目を向けると、森の木々の間をちらちらと横切り、車のヘッドライトがこっちに向かってくるのが見えた。
「助かった、掘り出すのを手伝ってもらおう」
僕は道の真ん中に立って、大きく手を振った。
「おーい、止まってくれー！」
年季の入ったトヨタ・マークⅡはゆっくりと近付き、見るも哀れな雪だるまとなったＲＸ-７の前で停まった。
「どうした？」
運転席のパワーウィンドウから顔を出したのは中年のおじさんだった。糸のように細い目に、つんつんの髪。
「車が吹き溜まりに突っ込んでしまったんです。掘り出すのを手伝ってもらえませんか？」
「災難だったな。いいぜ。怪我はねえか？」
「ええ、大丈夫です」
おじさんはドアを開けた。車内の同乗者に呼びかける。
「大和、ブラシを出せ。剱、お前はショベルを頼む……兄ちゃん、雪かきとか持ってねえのか？」
僕とソニックは揃って首を横に振る。
「ったく、しゃーねえな……雪をナメるな。死ぬぞ」
呆れたようにぶつぶつ言いながらも、おじさんは車の救出作業を手伝ってくれた。眼鏡をかけた大男が雪よせをしてくれたこともあり、ソニックの愛車は２０分くらいで無事に救出された。
「インプレッサにＲＸ-７か、いい車だな」
「それはどうも。おじさんのそれは……」
僕はマークⅡを誉め返そうとして言葉に詰まった。僕やソニックの車のようにあちこち改造をしているわけではない、少し古いだけで何の変哲もない車だ。
「あなたたち、これからどちらへ？」
背の低いお姉さんが話題を変えた。助かった。
「この山の上に用事があるんです」
「もしかして、霧降荘ですか？」
お姉さんの言葉に僕は驚いた。
「ええ……あなたたちもですか？」
行先が同じだとは思わなかった。でも、こんな人里離れた山道……考えてみれば別におかしいことではない。
「少し暗くなってきました。先を急ぎましょう」
大男がショベルの雪を崖下に落としながら山の稜線を見上げた。空は朱く染まり始めていた。

＊　　＊

部屋で荷物をほどいていると、ナナちゃんが窓の外を見て声を上げた。
「ハチくん、残りのお客さんも来たみたい」
俺は身をよじって窓の外を見た。なるほど、車のライトが二つ三つと木々の間から段々と近付いてくる。
「お、本当だ。じゃあそろそろ本館に行こうか」
どっこいしょ、と立ち上がり客間の電気を消した。外に出るとさっきまでは無かったはずの雪雲が茜空に迫ってきていた。

＊　　＊

霧降荘に着いた時には、さっきまで頭上に広がっていたはずの茜空は影を潜めていた。重苦しい雪雲は夜に染まるにはまだ明るく、陽が出ていると辛うじて分かる。
「今夜はかなり降りそうですね。午前中みたいにどかどか降るんですかね？」
今日午前中は秋田県全域で大荒れの天気だった。今は雪雲が北海道の方に抜けて晴れているが、雪国の晴れ間ほど当てにならないものはない。いつ雪に変わってもおかしくない。
「かもな……雪崩なんて起きねえだろうな」
「勝手に死亡フラグを立てないで下さい」
叶ちゃんと軽口を叩き合いながら釜田さんは車を霧降荘の敷地に進める。道路には融雪装置でもあるのか、黒々としたアスファルトがじっとりと触れていた。ガレージには既に何台かの車、あとはガレージの奥に背の高い除雪車が停まっている。
「あーあ、着いた着いた」
釜田さんは大きく背伸びをした。背中の関節をぼきぼきと鳴らし、いの一番に車を降りる。
「運転、お疲れ様でした」
「なーに、これくらいどうってことねえよ。ゆっくり温泉に浸かれば大丈夫さ」
礼士さんの労いの言葉にも陽気に答える。温泉を目の前にして少しハイになっているのかもしれない。
「ほら、お前らも降りた降りた」
急き立てられるように車を降りる。真っ先に硫黄の匂いが鼻を刺した。日本有数の硫黄泉である乳頭温泉と源泉を同じくしているのだろう。ガレージの周りは融雪装置が無いのか、押し固められた雪でアスファルトが覆われている。
「とりあえず荷物を部屋に置いて、仕事はその後に取り掛かろう。まだ時間はある」
礼士さんがトランクからボストンバッグを引っ張り出

し、それぞれの持ち主に手渡す。ただし私のトランクケースは引き受けてくれた。
「良かったですね、先輩？　荷物を持ってくれる優しい彼氏がいて」
「羨ましいならあなたも早く良い人を見つけなさいよ。いつまでも若くないんだから」
叶ちゃんの冷やかしをバッサリと切り捨てていると、先程の美男子二人組の車が駐車場に入ってきた。車のことはよく分からないが、どっちも速そうな車だ。
「あ、先程はありがとうございました」
雪に埋もれていた方の車から降りてきた青年がドアを開けながらいきなり頭を下げた。天パがよく似合った好青年だ。どことなくハーフっぽい雰囲気をしているのは気のせいだろうか？
「車に異常はねえか？」
釜田さんが礼士さんからボストンバッグを受け取りながら尋ねた。
「全然大丈夫です」
「良かったな。これからは気をつけろよ」
もう一台、今度は青い車から男の人が降りてきた。眼鏡をかけているが、礼士さんとは違いクールな印象だ。
「うー、寒い寒い……あ、先程はソニックがお世話になりました」
「ソニック？」
私が怪訝な顔をすると、美男子コンビは少し考えてからしまったという顔をした。
「おい、まっち。まだ自己紹介をしてないぞ」
「あ、そうか……失礼、自己紹介がまだでしたね。僕は榊原黎雅と申します。彼は守・ソニック・隼人。僕の友人です」
「どうも。よろしくお願いします」
眼鏡をかけた方が榊原君、天パのハーフがソニック君か。まっちというのは榊原君のあだ名らしい。こっちも自己紹介を返そうとしたとき、雪をざくざくと踏み分ける誰かの足音が聞こえた。
「あら、釜田さん！」
「よう、橋立。久しぶりだな。いつぞやは世話になった」
若草色のダウンジャケットに身を包んだおばさん……いや、お姉さん？　年齢不詳の女の人が近寄ってきた。
「俺の部下二人とその彼氏、占めて四人だ。案内、頼めるか？　そこのでかいのとのっぽは恋仲だから同じ部屋がいいんだが」
でかいのとのっぽ、とはなかなか雑な言われようだ。
「ええ、いいですよ。あ、ご挨拶が遅れました。橋立星美と申します……あの、お二人は？」
「あー、彼らはあたしの後輩！」
橋立マダムは美男子二人組から声のした方に顔を向けた。サイドテールの若く利発そうな女性が立っていた。
「あらあら、美由。あなたのお友達なのね？　じゃあ案内を頼むわね」
「はいはーい」
駐車場は俄然にぎやかになった。ここでめいめいに自己紹介をするには寒いし時間が足りない。美男子コンビへのちゃんとした挨拶は後回しにして、先に部屋に案内してもらうことになった。
「釜田さんは申し訳ないけどこっち。雪道でごめんなさいね、あっちの別館までは融雪装置が通っていないものだから……」
雪に慣れているとはいえ、それには少しがっかりした。雪道を歩かずに済むのならそれに越したことはない。
「元々森だったところを切り開いて別館を建てたので、最低限の電気や水道しか引いてないんですよね」
橋立マダムはおっとりした口調のまま説明してくれる。……釜田さんとは正反対のキャラなだけに、その馴れ初めが少し気になる。
「まずはここ、別館金星。奥に見えるのが別館彗星、その向かいが別館明星になってます。これ以上の客人は来ませんし、この三棟を好きに使ってくれますか？」
「おう、分かった。サンキューな。とりあえず荷物だけ置いたらすぐに戻る」
「ええ」
少しの立ち話の結果、私と礼士さんは金星、叶ちゃんが彗星、釜田さんが明星をそれぞれの根城とすることになった。
別館はこぢんまりとした平屋建ての建物で、屋根からは氷柱がずらずらと垂れ下がっている。引き戸を開けると寒々とした空気が流れ出した。
「お、結構いい感じだよ、瑞穂さん」
礼士さんは客間につながる襖を開けた。八畳くらいの和室は天井が高くてゆったりとしている。私の荷物は部屋の隅に置いてくれた。
「仕事もあるから私は先に本館に行ってる。礼士さんはゆっくりしてて」
「いや……ここにいても暇だし、僕も本館に行くよ」
「そう？　なら、行こう？」
そろそろ夕食の準備を始めないと間に合わない。私は礼士さんが靴を履き終わるのを待ち、本館に向かった。
＊　＊
本館は二階建ての建物になっている。俺とナナちゃんは他の客が来たのを見て本館に移動したが、だからとい

って何か用事があるわけでもなかった。暇潰しにスマホで同業者の情報共有サイトを覗く。興信所や探偵業者のターゲット、すなわち捜査対象の情報が色々と出ているページだ。
「個人捜査だけでは集められる情報も限られるもんな……小規模な事務所とかは特に」
会員制ページのため、全ての業者が見られるというわけではない。秋田県のページを開くと、捜査対象トップに出てきたのは碓氷という苗字だった。珍しい苗字だ。
階段の方から足音が聞こえてきた。話し声も聞こえる。
「……で、あそこが大浴場。源泉かけ流し、凄いでしょ」
「乳頭温泉のお湯を引いてるんですか？」
「まあね。水源は一緒みたい。温泉地に別荘を建てるのがお父さんの夢だったんだから」
美由さんが下りてきた。後ろに続く美青年コンビは見ない顔だ。さっき着いた客だろう。
「あ、押鳥さん」
「どうも、美由さん。その二人は？」
俺の横に座るナナちゃんも気付いたようだ。
「あたしの大学の後輩です。それぞれ医学科と薬学科で、あたしがいる看護科とは違いますけど」
「どうも、榊原と申します。彼はソニックです」
眼鏡をかけた青年が挨拶をした。ハーフっぽい天パの青年も会釈した。俺も頭を下げる。
「押鳥です。こちらは妻。亀井衛生工業の者で、美由さんのお父さんにはよくお世話になっています」
身分を誤魔化すのは少し気が引けるが、こればかりは仕方ない。美由さんの顔が少し曇った気がしたが、気のせいだろう。医学生コンビを連れてぱっぱと館の案内に戻っていった。
「ハチくん、さっきから何見てるの？」
「え？　ああ、いつものだよ」
そう言い、サイトを見せる。ナナちゃんは少し目を通しただけですぐに興味を失ってしまった。ここには捜査ではなく純粋にお呼ばれの休暇に来たのだから当然といえば当然だ。
「せっかくの休みなんだからそんなもの、いちいち覗かなくてもいいでしょ」
「いやぁ……つい、ね」
口ではそう言いつつも、俺は素直にスマホのページを閉じた。
「でも、こんな山奥でもネットが繋がるんだね」
「基地局が近いのかもね」
こんなの雑談にもならない。いくら互いに一目惚れして結婚した身とはいえ、こうも暇だと持たない。窓の外を見ると、ちらちらと白いものが舞い始めていた。
「押鳥さん」
背後から聞き慣れた声がした。
「ああ、赤木さん」
椅子から立ち上がって振り向くとパンツスーツ姿の女性が立っている。俺達の依頼人であり、ここに招いた張本人だ。
「先日は大変お世話になりました。お礼としてはつまらない温泉ですが、いかがですか？」
「とんでもない。とても良さそうな所ですよ。こちらこそ大したことはしていないのに」
この女性こそ俺達の依頼人だ。
「橋立さんの方もお変わりはないですか？」
「ええ。現在、色々と準備をしているところです」
「下手をすると会社をひっくり返すことになりかねませんからね……」
物騒な内容を事もなげに話す。
「夕食まではもうしばらくかかります。お待ち下さい」
そう言い残し、依頼主は一礼して去っていった。焦茶色のロングヘアが軽くうねった。

第二章

本館の一階に大浴場がある。暇を持て余した俺は館主の了解を得て、先にひと風呂浴びることにした。
大浴場への引き戸を開けると湯気が俺を包み、強い硫黄の匂いが襲い掛かる。いかにも効能豊かな温泉という感じだ。真っ白なお湯が小刻みに波打っている。
「ふぅ……」
シャワーで体の垢脂を洗い流し、湯船へ。ぽかぽかと程良い水温だ。
「赤木さんには感謝しないとな……」
俺とナナちゃんの依頼主である彼女の計らいが無ければ、こうやって温泉で日頃の疲れを落とすこともなかったはずだ。秋田の山奥と聞いた時には思いがけない遠出に尻込みしたが、新幹線があったから比較的楽に来ることができた。
カラカラと引き戸が開いた。
「こちらです。どうです、凄いでしょう」
「壮観ですね」
浴場の自慢をしている声はよく知っている。少し鼻についたどら声はこの館の主人、橋立漣丈だ。ゆさゆさと太鼓腹を揺らしながら入ってくる。もう一つの声は若そ

うだが随分と落ち着いている。知らない声だ。
「ああ、押鳥さん」
「橋立さん。お先に失礼しています」
「湯加減はいかがですかな？」
「ぼちぼちです」
橋立さんは太鼓腹をゆすりながら湯浴みをし、湯船に入ってきた。一緒の男も同じように湯船に浸かる。
「剱さん、温泉はいかがですか？　源泉かけ流しですよ」
「見事ですね……そちらの方は？」
橋立さんと同行してきた男が俺を見た。筋肉質の大男みたいだが、立ち込める湯気で顔はよく見えない。
「こちらの方は押鳥さんと言いまして、わしの企業のお得意様ですよ」
「ああ、そうなんですか。剱と申します。よろしくお願いします」
「押鳥です。亀井衛生工業の者です。よろしく頼みます」
湯気の合間から剱さんの顔が見えた。輪郭は骨ばっているが、垂れ目のためか優しそうな雰囲気だ。
「亀井衛生工業さんとの付き合いは最近始まったばかりですが、秘書の赤木も高く評価しておるんです。それで今回こちらにお招きしまして。リバティ薬科工業との合併で色々とありましたが、最近になってようやく新規に取引先を開拓できるようになりました。」
「リバティ薬科工業……あぁ、リーマンショックによる不景気を発端に合併したあの会社ですか。かなりの大型案件でニュースにもなりましたね。あの時はさぞ大変だったでしょう」
剱さんの労いの言葉に橋立さんは少し胸を張る。湯波から白いものが混じった胸毛が覗いている。
「かなりの荒療治でしたからな。リーマンから4年が経ち、ようやく一息つけそうです。しかし安穏とはしていられません」
俺は少し眉をひそめた。赤の他人に俺やナナちゃんが調べたことをべらべらと口外するのはいかがなものだろうか。知られるのはあまり都合が良くないはずだ。
「近頃、下野薬品が攻勢に出ていましてな。こちらも指を咥えて見ているわけにはいきません。またまた忙しくなりそうです」
俺のあずかり知らぬ話だった。

＊　　＊

夜になり、食堂に一同が介した。
「お待たせしました。食事の用意ができました」
眼鏡をかけた細身の女性が他の人も案内してきた。榊原君やソニック君を筆頭にぞろぞろと入ってくる。
「いやはや、これは楽しみですな」
「あの人たちの腕は僕が保証しますよ」
ご機嫌そうにテーブルに並べられた皿に目をやるのは霧降荘の館主・橋立漣丈だ。横には剱さんもいる。
「熱いのが通るぞ、後ろ気をつけろ！」
細い目の男性によって、厨房から大きな土鍋が運ばれてきた。テーブル上のカセットコンロに置いて蓋を取る。もうもうと湯気が立ち上ると、中には大量の煮魚が入っていた。
「いい匂い、美味しそう」
「そうか？」
横に座るナナちゃんの言葉に俺は首をかしげた。
「硫黄の匂いで鼻が馬鹿になってるんじゃないの？」
「確かに、ここの温泉は硫黄の匂いがなかなか強烈だもんなぁ。さっき入った時も凄かったし」
「効能は凄そうだけどね、その分」
雑談をしていると、さっきの眼鏡の女性が箸や皿の配膳を始めた。
「手伝おうか、瑞穂さん」
さっき風呂で一緒になった剱さんが近寄る。知り合い……いや、それ以上の関係のようだ。
「じゃあ、ビールを頼める？　あれケースだと重くて。勝手口の横の雪に埋めてあるから」
「ケースごと埋めたの！？　了解。ちょっと待っててね」
仲睦まじい夫婦ってところだろうか。
それから少しした後には、テーブルの上には料理や酒が所狭しと並べられた。鍋に刺身にと、大皿料理ばかりだ。厨房をひっきりなしに出入りしていた面子が料理を配膳していく。
「お父さん、グラス。ビール入れるから」
「ああ、美由……」
娘に酒を注がれる父親の図は基本微笑ましいものだと思うが、この娘さんは日暮れ前に見せていた利発そうな雰囲気があまり感じられない。どこかぎこちないとでも言えばいいのか、よそよそしいとでも言えばいいのか。
ナナちゃんは俺の覚えた違和感には微塵も気付かなかったようだ。
「ハチくん、グラス」
「おお、ありがとう」
さっきの美由さんと全く同じ言い方なのに、俺とナナちゃんとではしっくりくる。単に慣れの問題なのだろうか？　……まあいいか。ビール美味いし。雪に埋めてあっただけあってキンキンに冷えている。
皿や料理の配膳が一段落し、霧降荘に集った者たち一同が席についた。
「えー、お集りの皆様。本日はこんな辺鄙なところまで

ようこそお越し下さいました。わしはこの霧隠荘の当主、橋立漣丈という者です。以後、お見知りおきを」
上座に座る古狸が立ち上がり、挨拶をする。
「つまらない所ではありますが、どうぞ皆様、ゆっくりしていって下さい。それでは、皆様の健康に乾杯！」
一同はめいめいにグラスに手をつけ、中身を飲み干す。いきなり見ず知らずの人たちの健康を祝すのも変な話だが、長々とした挨拶が無かったのは幸いだった。
「いただきます」
さて、まずは何から食べようか。

＊　＊

慣れないキッチンでの仕事は、まさしく奮戦と呼ぶにふさわしかった。ハタハタは半分をしょっつる鍋、もう半分を塩焼きにした。金目鯛はお造りにした。塩は1.5キロの大袋しかなく、小分けにするのが面倒だったからそのまま使った。人参といんげんは砕いたナッツと味噌で和え物に、じゃがいもは細切りにしてバター醤油で炒めた。鍋の〆には稲庭うどんにする予定だ。
「お疲れ様、瑞穂さん」
礼士さんが私のグラスにビールを注いでくれた。雪に埋めてあったこともありキンキンに冷えている。
「ええ、ありがとう。どこにいたの？」
「ああ、橋立さんの計らいで先に温泉に案内してもらったんだ。良かったよ、なかなか」
料理を作りに来たわけではないのだから、暇だったのだろう。でも少し羨ましい。
「片付けは僕も手伝うから、瑞穂さんは食事が終わったらゆっくり入ってくるといいよ」
「それはありがたいけれど、私の仕事だから」
お金を貰っているのだからむやみに手伝ってもらうことはできない。気遣いをしてもらえるだけで上等だ。
「美味しいですね、この鍋。誰が作ったんですか？」
「釜田さんですよ。あちらの人です。私のお友達です」
向かいの席では橋立マダムと……誰だろう、佐藤二朗に似た男の人が話をしていた。
「誰か俺を呼んだか？」
礼士さんの隣で釜田さんが反応した。
「あ、あなたが釜田さんですか。俺は押鳥栄斗、亀井衛生工業で働いていまして、橋立さんの仕事仲間です。彼女は嫁の夏奈です」
「はじめまして。押鳥夏奈です」
夏奈さんはビア樽みたいに肥えた体を丸め、会釈した。
「こんな体ですけど、彼女は空手の有段者なんですよ。はっはっはぐえ」
「やだぁ、ハチくん、こんな体ってどーゆー意味？」
「いや、その、わ、悪かった！　だから足踏んでるって痛い痛い痛い！」
なかなかコミカルな夫婦だ。
「俺は釜田、秋田で居酒屋をやってるんだがそこの橋立に呼び出された」
「居酒屋ですか。いいですね、美味しそう」
「縁があったら来てくれ。そっちの眼鏡女とちびっこい女が部下の碓氷と大和だ」
「ちょっと、ちびっこいって何ですか、ちびっこいって」
雑な説明に叶ちゃんが食って掛かる。釜田さんはどこ吹く風で鯛のお造りに手を伸ばす。立派な金目鯛で、真冬らしくこってりと脂が乗っている。裁くのに苦労した。
「大和です。よろしくです」
「碓氷です。どうも」
私も一礼し、そして焼きハタハタに手を伸ばす。旬を迎えて腹がはちきれんばかりのぶりこ、つまり魚卵でパンパンになっている。押鳥さんが私の方をじっと見た。
「……あの、何か？」
「こーら、ハチくん！　私という人がありながら！　この浮気者！」
「ぐ、ぐえ、ち、違うってばナナちゃん」
夏奈さんの首絞めに押鳥さんの顔が紫色になった。やはり傍から見るだけなら楽しそうな夫婦だ。
「すみませんね、うちの旦那が」
「い、いえ……」
「な、ナナちゃん、ギブ、ギブ！」
私は苦笑いするしかない。
「はぁ……はぁ……『うすい』って珍しい苗字ですね。何て書くんですか？」
奥様の腕から解放された押鳥さんは息も絶え絶えに質問する。
「碓氷峠の碓氷です。分かりますか？」
「碓氷峠？　どこですか、それは？」
どうやら伝わらなかったらしい。よくあることだ。
「群馬と長野の県境にある峠ですよ。峠の釜めしやめがね橋で有名ですね」
「走り屋の聖地ですよ」
礼士さんとソニック君がそれぞれ助け船を出す。あまり助けになっていないことには気付いていない。
「えーと……あなたは、さっき大浴場にいた？」
結局理解が追いつかなかった押鳥さんは礼士さんの方を見る。
「まだきちんと挨拶をしていませんでしたね。剱礼士と申します。秋田新幹線で運転士をしています」
「秋田新幹線？　ああ、私達も東京から使いましたよ」

夏奈さんは思い出したように言い、人参といんげんの味噌和えを大皿から取り分ける。
「それはそれは。ご利用ありがとうございます」
礼士さんは慇懃に頭を下げる。私は話題から外れた今をチャンスとばかりにじゃがいものバター醤油炒めを大皿から取り分ける。即席で作ったものだが、酒の肴には案外行けるかもしれない。今度、店のメニューにでも検討してみよう。
「ん……？」
何かを思い出したかのように榊原君が私と礼士さんを見た。嫌な予感がする。
「剱さんに碓氷さん……もしかして、半年前にあった新幹線が爆弾魔に乗っ取られた事件の？」
「まっち、それって東京駅で犯人を張り倒した女の人の事件か？」
「そうそうそれそれ。あの6月の」
「え、嘘ぉ！？」
医学生コンビの会話に橋立夫妻の娘さんが加わる。まずい。ばれちゃった。
「……あー、二人とも道理で聞いたことがある名前だと思いました！」
押鳥さんも気付いたようだ。
「何の話ですか？」
あまり騒がれたくない。とぼけよう。礼士さんは我関せずとばかりに和え物を口に運んでいる。
「先輩……」
助け舟を期待して私は叶ちゃんに目配せした。
「しらを切るなんて人が悪いですよ」
助け舟かと思いきゃ沈められた。あんた、後で覚えてなさいよ。

＊　＊

魚へんに雷で鱈・ハタハタと読むらしい。冬場、雷が鳴る時期になると産卵のために陸地近くの浅瀬に集結するからだという。そんな旬のハタハタを具にも、魚醤のしょっつるにもふんだんに使った鍋がしょっつる鍋だ。
そんなしょっつる鍋を囲みながら、僕達は碓氷さんと、その彼氏の剱さんの話題で持ちきりになっていた。
「でも、あの右ストレートは見事でしたよ。愛する人のために命を懸けるって、カッコいいじゃないですか」
僕の横で先輩が碓氷さんを攻めまくっている。防戦一方の碓氷さんは東京駅での威勢の良さはどこへやら、真っ赤になって俯いている。そんな彼女をよそに僕とソニックはハタハタの卵、ぷりこに悪戦苦闘していた。固い。ぷちぷちを通り越してぶっちぶっちだ。
「もう……お願いですから勘弁して下さい……」
碓氷さんは泣きそうな声を絞り出した。剱さんも少しきまり悪そうにしている。会話を打ち切りにかかった。
「まあまあ、つまらない話ですし、この辺でいいじゃないですか。せっかくの料理が冷めてしまいますよ。釜田さん、そろそろうどんの準備を頼みます」
「へいへい。大和、碓氷をおちょくるのもほどほどにしろよ。あんまりお転婆だと婚期が遅れるぜ」
「お、大きなお世話ですよ！」
釜田さんは厨房に消えた。
「お二人は結婚とかは考えているんですか？」
押鳥さんが剱さんに聞いた。
「まあ、ゆくゆくは……とは考えています。既に親にも紹介していますし」
剱さんは少し考えて言った。碓氷さんの表情は浮かない。頬の赤みが消え、悪く言えば物憂げな表情だ。
「結婚ねえ……大変ですよ。幸せも二人分ですけど、苦労も二人分です。ね、ハチくん？」
夏奈さんが夫の方を向いて言う。
「ああ、そうだね。でも、その苦労を背負い込んでも一緒に居たいと思うなら、それでいいんじゃないかな？」
「はっはっは、若いですなぁ。美由も深浦さんとこれくらい上手くやってほしいものです」
橋立おじさんが赤ら顔で笑う。
「そういや先輩も今度結婚するんですよね？」
僕は先輩に水を向けた。剱・碓氷カップルに結婚の話を続けると洒落にならない事態になりそうだ。
「ん？　ま、ね」
先輩は先輩で言葉少なにお猪口を傾ける。振った話題がまずかっただろうか？　当の先輩は既にビールから熱燗へとシフトしている。
「熱燗のお代わりを持ってきますね。何本いりますか？」
大和さんが挙がった腕を数え、厨房に消えた。入れ替わりで釜田さんが〆の稲庭うどんを持ってきてくれた。
「うどん、できたぞ」
碓氷さんと合わせて取り分け始める。
「そういえば美由、深浦さんは？」
橋立おばさんが先輩の横、空席に目をやる。
「悪天候で高速に速度規制がかかって遅れてるって。もうすぐ着くはずだけど」
「あらあら、大丈夫かしら？」
深浦さん……以前、先輩の口から聞いた名前だ。その深浦って人と結婚する、と。
「赤木さん、深浦さんから何か連絡はないの？」
「いえ、特に何も聞いていませんね」
団らんを一歩引いて見守っていた彼女も何も知らない

ようだ。そのまま熱々のうどんを啜る。この稲庭うどんは通常のうどんよりも細く、しかし素麺よりは太い。
「あ、美味しい。稲庭うどんってこんな食べ方もあるんですね」
「結構いけるだろ？」
先輩の言葉を聞き、釜田さんは満足そうに笑った。
「悪天候って、そんなに天気が悪いんですか？」
僕は少し心配になり、話を戻した。
「今夜から天気が荒れるみたいですね。大型の低気圧が近づいています。ですが、夜明け頃には天気も良くなっているみたいですよ」
剱さんがスマホを取り出して調べてくれた。横で碓氷さんもスマホ画面を覗き込んでいる。
「雪山レースは止めた方が無難かもしれませんね。榊原君もソニック君も、雪道に慣れているとは思えませんし」
う。痛いところを突いてくる。
「雪は怖いですからね。慣れた人でも簡単に命を落とします。山を下りたらスキー場もありますし、ウィンタースポーツを楽しむのも一手ですよ」
とりあえず忠告は大人しく聞いておこう。従うかどうかは明日判断すればいい。
「それにしても、二人の車は自前で改造したんですか？」
「ええ、そりゃもちろん」
ソニックが事もなげに肯定する。
「ほう、榊原君とソニック君は車が好きなのか。この山は人の出入りもほとんどないし、警察の目から隠れて雪山レースをするにはもってこいの道だな」
おじさんも興味をそそられたようだ。
「あんまり煽らないで下さいよ、事故を起こしたらどうするんですか」
赤木さんが心配そうに僕達の方を見る。もう既に事故を起こしてしまったことは黙っておこう。
「まあまあ、そう堅いことは言わずに。二人の好みに合うかどうかは分からんが、除雪車を運転させてやってもいいぞ」
霧降荘の当主がそのまま続ける。意外な申し出だが、正直なところそこまでそそるものはなかった。ソニックも興味無さげにうどんを啜っている。
「……そういえば、ソニック君はハーフなのかな？」
食いつきが悪いことを察したのか、館主は話題を除雪車から切り替えることにしたようだ。
「ええ、父がイギリスの方の生まれでして。母は日本人ですが」
慣れた質問に慣れた口調で返し、ウーロン茶で口を湿らせる。僕も彼も成人はしているが、酒と縁は薄い。
「それにしても剱さん、あれが改造車だってよく分かりましたね。メカニック方面に詳しいんですか？」
僕はさっきから気になっていた疑問を目の前の大男にぶつけた。
「いや、車の後ろにウイングがついていたから察しただけで、そこまで車のメカニックには詳しくありませんよ。僕の専門分野は鉄道ですし」
「カーマニアに鉄道員ですか、似ているような、正反対のような」
夏奈さんが驚いたように僕と剱さんを見比べた。
「プライベートでもマニア活動をしていますよ」
「へぇ……剱さんは俗に言う何鉄なんですか？　乗り鉄とか撮り鉄とか色々あるじゃないですか」
「そういえば私も聞いたことないわね」
押鳥さんの質問に碓氷さんも興味を引かれたようだ。
剱さんは思案顔で首を傾ける。
「うーん……広く浅く、ですかね。車両の形式とか性能とか業務内容とかには仕事柄詳しいですが。写真とかについてはさっぱりです」
「そうですか。せっかく写真仲間ができたと思ったんですが……」
押鳥さんは少し残念そうに言う。
「カメラが趣味なんですか？」
ソニックの質問に押鳥さんは頷き、どこからか愛機と思しきゴツい一眼レフを取り出した。そのまま僕とソニックをパシャリ。
「腕はまだまだアマチュアですが、仕事の合間に楽しみでやっています。結構奥が深いんですよ、これ」
そう言い、今撮ったばかりのスナップショットを見せてくれた。
「意識していないから自然な表情が出てる。いいじゃん、これ」
先輩は横から覗き込みケラケラ笑うが、いきなり撮られた方の心境は複雑だ。
「二人はカメラ映りもいいし、モデルとか目指したら伸びるかもよ。そういう方面は興味ないの？」
「いや、あまり……医学の方が充実しているので」
「え、二人とも医学生なんですか？」
押鳥さんの提案を受け流す。そういえば、まだ正式な自己紹介をしていなかった。
「身分の紹介がまだでしたね。申し遅れました、東京大和大学医学科３年、榊原黎雅です。彼は同じ３年ですが薬学科、守・ソニック・隼人です」
「大大ですか、美由は看護科だったもんねぇ」
橋立おばさんが感慨深げに先輩を見る。当の先輩は押

鳥さんのスナップショットに見入っている。
「削除、と」
「えー、消しちゃうんですか？　せっかくいい写真だったのに！」
「勝手に撮った写真をいつまでも保存するわけにもいかないでしょう」
なるほど、押鳥さんもその辺はわきまえているようだ。先輩はふくれっ面をしている。少しあざとい。
そこからはみんな段々と酒が入っていったせいで、散漫とした雑談になっていった。僕とソニックは剱さんに相手をしてもらい、メカニック関連の話に花を咲かせた。
宴が終わる頃、暗い窓には僕達の姿が映っているだけだった。目を凝らしても、灯りの無い外の世界。雪が降っているかどうかは分からなかった。

＊　＊

食後のデザート代わりに林檎を剥くことにした。星美さんが食後のコーヒーを入れてくれている。
「夫人。橋立様のコーヒーは私がお持ちします」
赤木さんがお盆を小脇に抱えて厨房に入ってきた。
「え？　でも……」
「橋立様なら既に仕事のために自室におられます。業務の打ち合わせもありますので、そのついでに私が」
「そう？　なら、お願いね」
星美さんは慣れた手つきでコーヒーを注いだ。
「はい、これ」
「ありがとうございます」
赤木さんは一礼してコーヒーを受け取り、厨房から出て行った。
「橋立……どうかしたのか？」
釜田さんが声をかけ、星美さんははっと振り返る。
「え……どうかした、って、何がですか？」
「……いや、何でもねえ。大和、コーヒーを運ぶのを手伝ってやれ。その間食器は俺がやっておく」
女二人、コーヒーを載せたお盆を手に広間へと消えた。釜田さんは食器の汚れをざっと落とし始めた。汚れをそのままに食洗器に放り込むわけにはいかない。
「あら、深浦さん」
星美さんの声が聞こえた。深浦さんって……ああ、美由さんの婚約者だ。
「釜田さん、林檎食べます？　ずっとここで食器洗いもしんどいでしょう？」
「おお、碓氷。ありがとよ、休憩がてら貰おうか」
私は大皿に山盛りにした林檎を手に広間に向かう。するとちょうど、玄関に繋がるドアから誰か入ってきた。
「りっくん、お帰り」
「ああ。遅くなってすまない」
少し浅黒い肌をした男だ。美由さんに懐かれているということはこの人が深浦さんだろう。コートに積もった雪を払いのけているところをみると、外はだいぶ雪が降っているようだ。
「高速が雪でやられましてね。ひどい雪だ」
コートを畳んで椅子の背もたれにかけ、簡潔な自己紹介をしてくれた。
「深浦力輝、美由の婚約者です」
なるほど、それでりっくんか。
「ご飯は？　お母さんの友達の人が作ってくれて」
「ああ……もらおうか。そこまで量はいらないが」
今から一人分のうどんをお湯から作るのか……私は少しげんなりしたが、仕事だから文句は言えない。当の本人は灰皿を引き寄せ、煙草を吸い始めた。
「体に悪いからやめなってば、それ」
婚約者の言葉にも聞く耳を持たないようだ。ライターをポケットにしまう。
「うどんは俺が作るから、おかずを頼む。大和、しばらく洗い物を頼む」
「はーい」
叶ちゃんは釜田さんと入れ替わりにシンクに向かい、腕まくりをする。とりあえず私はおかずを盛り合わせ、ビール瓶と一緒に出す。
「ああ、すみませんね。いただきます」
深浦さんはちびちびと辛炒めに手をつける。
「お義父さんと、それに赤木さんは？」
「自室で仕事の打ち合わせをしていますよ」
星美さんがコーヒーを片手におっとりと答えた。私はここにいても仕方ないため、厨房に戻って叶ちゃんの食器洗いを手伝うことにした。
「旦那さんを放っておいていいんですかぁ、先輩？」
叶ちゃんが茶々を入れながらも、私のために場所を空けてくれる。
「旦那さん、ねぇ……」
私の表情は浮かない。叶ちゃんは変な顔をしたが、そのままぺらぺらとお喋りを続ける。
「まあ、恋するだけなら簡単ですよね。でも、結婚となればまた変わってきますか。相手の家族との関係もありますし」
私は黙って相槌を打ちながらも、食洗器に入れられないような洗い物の手を休めない。黙々と漆塗りの椀物を片づけていく。
「剱さんのご家族には会ったりしたんですか？」
「え？　ええ、まあね。まだそこまで深い面識は無いけ

れど、とても良い人だった」
「先輩の親御さんとの顔合わせはしたんですか？」
私は答えに詰まった。どう答えたものか。少し考えたが妙案も浮かばず、事実をそのままに話すことにした。
「私ね……親はいないのよ。どっちも病気で死んでしまってね。親戚もみんな、震災で行方不明になったりして……結局、私だけが生き残ったのよ」
「えっ……」
嘘はついていない。全部話したわけでもないけど。叶ちゃんの手が止まり、顔から笑みが消える。
「手、止まってるわよ」
「あ……ご、ごめんなさい」
私の思いがけない過去か、それとも自分の仕事か、どっちについて謝ったのかは定かではない。
「おい、お前ら。もういいぞ」
うどんを作り終えた釜田さんが近寄ってきた。
「残りはやっておく。今日はもう上がれ。疲れただろ」
「え、いいんですか？」
私はここぞとばかりに叶ちゃんとの会話をリセットしようと飛びつく。
「ああ。もういい時間だ。温泉にでも入ってくるといい」

＊　＊

深浦さんはそこまで口数が多い質ではないようで、ずっと美由さんのとめどないお喋りに耳を傾けている。
「そうか、随分と人が多いのはそういう理由か」
美由さんがここにいる人たち一同の紹介を終えた。
「えーと、あなたは押鳥さんですね。橋立さんがこちらに呼んだそうで」
互いに挨拶をする。彼もスペーシア製薬の一員だが、元々はリバティ側の人間だったはずだ。でも橋立さんの娘さんと関係が良好なところを考えると、内紛にはそこまで関係していないのかもしれない。
「ごちそうさまでした。あなたが釜田さんですか？」
「ん？　ああ」
「美味しかったです」
食器を下げに来た釜田さんにもそつなく挨拶をする。
「星美さん、橋立さんは？　仕事の内容で少しお話したいことがあるんですが」
「自室で赤木さんと仕事の打ち合わせをしていますよ」
そういえば、さっきから橋立さんと赤木さんの姿が見えない。俺とナナちゃんの調査結果を基に、今後の打ち合わせでもしているのだろうか。噂をしたら赤木さんが戻ってきた。
「深浦さん。お帰りなさい。橋立様が部屋でお待ちです」
「分かりました。すぐに行きます。美由、すまないが仕事の打ち合わせがある。行かないと」
「うん、行ってらっしゃーい」
深浦さんが部屋を出るのを見送り、そして美由さんは大きく伸びをした。
「あたしも風呂に行くかなー……赤木さんもお風呂？」
「ええ。今夜は早めに済ませて引き上げようかと」
「だったら一緒に大浴場でどう？　部屋のお風呂は狭いでしょ？」
親の秘書というポジションがどういう力関係になるのかは分からないが、美由さんの申し出に赤木さんは遠慮するそぶりを見せた。でも結局は連れだって大浴場の方に向かっていった。

＊　＊

大浴場は貸し切りだった。脱衣籠は全部ひっくり返っていて、誰もいない。異性はおろか同性に裸を見せることすらためらわれる私としては、叶ちゃんが同行していることを除けば好都合だった。
「貸し切りですよ、先輩」
脱衣所の中も声が反響して聞こえる。叶ちゃんは温泉を前にわくわくしているようで、威勢よく服を脱ぎ始めた。そういや、釜田さんがここでの仕事を誘った時も乗り気だった。
私も少し遅れるようにして服を脱ぎ始める。また人前に出るのに化粧を落とすのは憚られるけど……まあいいか。全身洗ってしまおう。
「早くして下さいよ、先輩」
叶ちゃんは早くもタオルを持って臨戦態勢だ。私を急かすように大浴場への引き戸に目をやる。
「先に行ってていいわよ。風邪引いたらどうするの」
「一人で入ってもつまらないですよ」
何を言っても無駄だ。私は口には出さずに黙って下着を脱いだ。
「先輩……その傷、どうしたんですか？」
叶ちゃんは目を丸くして私の裸体を見た。こういう反応が待っているから誰かと風呂に入るのは好きではない。
「あ、これ？　震災の時に、ちょっとね」
口から出まかせを言う。引き戸を開けると強い硫黄臭が鼻を突き、暖かな湯煙が私達を包み込む。
「震災って……津波ですか？」
「ううん。食器棚の下敷きになったところを助けられたのよ。そこから一緒に津波から逃げたの」
嘘だ。ろくでなしの遺産だ、これは。
「助けられたって、レスキュー隊か誰かですか？　一緒に逃げたというのも？」
叶ちゃんの問いをシャワーの音で誤魔化す。思い出し

たくない。でも、何度も何度も思い出し、そのたびに私はどうすることもできない。向き合いたくても、その機会を逸してしまった。今や幸せを知ってしまい、あの日のことはなあなあになってしまっている。
「叶ちゃん……肌、きれいね」
「え？　そりゃ、先輩よりも若いですからね」
うまい具合に話題転換に乗ってくれた。当の後輩は自慢げに丸い胸をそらす。
「先輩、変ですよ。私の憎まれ口に乗ってこないなんて」
「……ごめん、少し疲れちゃって」
「そんなんで今夜大丈夫ですか？　剱さんとお楽しみでしょ？」
「何言ってんのよ」
会話に疲れた私は適当にあしらう。体を洗い終え、湯船に。程良く温かい。それに、体の傷を隠せるほどに白く濁っている。好都合だ。
「叶ちゃん、早くしなさい。気持ちいいわよ」
「あ、はーい」
脱衣所以上に声が反響する。
「そういや先輩、剱さんとどこで知り合ったんですか？　前から気になっていたんです」
「えぇ？」
質問した本人には特に深い意味を持たないのだろうが、どう答えたものか。
「……そんなに根掘り葉掘り聞くからいい人ができないのよ。少しは学習しなさい」
話を逸らすことにした。
「うるさいですね、私は先輩よりもずっとスタイルも性格もいいんですから、今に先輩が羨むような男を捕まえますよ」
「だからその口数の多さを直したらって言ってるのよ」
「ポジティブって言って下さいよ。先輩みたいな根暗とは違うんです」
「私は根暗じゃなくて落ち着きがあるのよ。あなたのはポジティブじゃなくて能天気よ」
「うるさいですよ、このまな板！」
「黙りなさいよ肉まんのくせして」
互いに口調は激しいが、目は笑っている。叶ちゃんは歯を見せて笑った。
「……今くらいが先輩らしくていいですよ」
「そう……ありがとう」
誰かが引き戸を開ける音で会話は打ち切られた。
「……お父さんと部屋で何をしてたの？」
「何度も言っている通り、仕事の打ち合わせです」
この声は美由さんと赤木さんだ。
「仕事ねえ、どうだか。悪いけど、お父さんから手を引くなら今のうちだから。お母さんも察してるはずだしさ」
何だか物騒な会話だ。叶ちゃんは口に人差し指を立てた。聞き耳を立てるのはあまりいい趣味とは思えないが、そういう私も気になるのは事実だ。
「そんな身に覚えのないことを言われても困ります。第一、私が来てから橋立様の仕事が忙しくなったのは時系列的におかしくはありません。ですが、それは橋立様が取締役に選出されたからであって、私とふしだらな関係になっているからではありません」
「あたしは赤木さんとお父さんがふしだらな関係になっているとは一言も言ってないよ？　手を引いた方がいいとは言ったけど」
「……」
「……」
風呂場とは思えないくらい冷たい沈黙を破ったのは赤木さんだった。
「……それに、深浦さんも橋立様と同じくらい多忙です。それでもあなたは深浦さんを疑うことはしないでしょう？　同じことです」
「……とにかく、忠告はしたからね」
美由さんは会話を打ち切るように風呂桶を手に取り、浴槽からお湯を汲む。湯煙越しに私と目が合った。
「あ……碓氷さん、それに大和さんも」
「ど、どうも……」
ぎこちなく重苦しい沈黙が降りた。
＊　＊
気が付くと日付を跨ごうかという時間だ。俺は剱さんに注いでもらった熱燗を飲み干し、よっこらせと立ち上がった。
「ナナちゃん、今夜はこの辺で打ち止めにしよう」
当のナナちゃんは医学生コンビとお近づきになろうと思っているのか、さっきからずっと絡んでいる。
「えー、もう？」
「もう、って……既に１２時を回ってるぞ」
俺の呆れ声に急かされるように、彼女は皿に残っていたつまみの落花生を口に放り込んだ。
「すまないね、榊原君にソニック君、俺の嫁が変な絡み方をしてしまって。普段はもっとまともなんだけど」
「どーゆー意味よぉ、それぇ？」
酔いの回ったナナちゃんの言葉に医学生コンビは苦笑いを浮かべ、首を横に振った。いい子だ。
「いえいえ、こちらもこんな時間までお付き合い頂いてしまって……」
こんな時間まで酒を飲んでも顔色一つ変わっていない

……と思ったら、二人が手にするグラスに入っているのはウーロン茶だ。ウーロン杯ではないだろう。
「じゃあ、俺達もそろそろ引き上げますか。風呂に行こうぜ、まっち」
ソニック君が立ち上がり、榊原君も後に続く。
「お待たせ、礼士さん」
入れ替わりに碓氷さんが戻ってきた。
「お風呂、お先に頂きました。ありがとうございました」
「あらあら、お礼なんていいんですよ。どうでした？」
「とても気持ちよく入れました」
大和さんもひと風呂浴びてきたようで、少し濡れた髪からは石鹸と硫黄の匂いがした。星美さんとぺこぺこ頭を下げ合っている。
「今夜はこれでお開きですね。明日の朝食は何時にしましょうか？」
そのまま星美さんが場を締めにかかる。
「普段は何時なんですか？」
「7時です。ですが、ずらすこともできますよ。釜田さんの都合もありますし。それに、もっと遅くても仕事が山積みなわけでもないので」
「なら8時はどうだ？　それくらいなら早すぎるわけでもなく、でも午前中にもそれなりに時間を取れるぞ。山から下りて温泉街や田沢湖を散策するもよし、スキーに行くもよしだ」
異存は無かった。
「大和も碓氷も無理はしなくていいぞ、朝飯くらいなら俺一人でも大丈夫だ」
「いいんですか？　良かったですね、先輩は今夜の剱さんの相手もあるでしょう？」
「あ、ありませんよ！」
「無いわよ！」
若いカップルは顔を赤くして怒鳴った。大和さんはにやにやと笑う。彼女が独身の理由が分かった気がした。
「おやぁ？　もう倦怠期ですか、先輩？」
「あんたねぇ……」
「あらあら、若いっていいですね」
星美さんも微笑む。剱さんは苦笑いを隠さず、碓氷さんは顔から湯気が出ている。風呂上がりだから、というわけではなさそうだ。
「押鳥さんはそれでいいですか？」
「ええ、構いませんよ」
明日の朝はゆっくり朝風呂に入れそうだ。
宴がお開きになり、別館北斗星への帰り道。深浦さんが帰ってきたときは降っていたはずの雪は止み、満天の星空が頭上に広がっている。周りに人家が少なく、空気が澄んでいるからこそ楽しめる景色だ。
「ねー、ハチくんってばー」
駄目だこりゃ、今夜のナナちゃんはべろべろに酔っている。とても酒臭い。別館に辿り着いた俺は鍵を開け、中の電気をつける。
「ハチくんの浮気者ー」
「は？」
浮気なんてした覚えはないぞ。俺は困惑しながらも、ナナちゃんのコートを脱がせる。
「あの碓氷って人を目で追ってたくせにー」
「え？　ああ、あの人か……」
俺はナナちゃんに説明することにした。
「いやね、興信所の情報共有サイトにあの人の名前があってね。珍しい苗字だったから覚えていたんだよ」
ナナちゃんもこの情報に少し酔いが覚めたようだ。
「身辺調査が依頼内容で、期限は２０日……情報収集は難航しているみたいだった」
俺はスマホの履歴を辿り、例のページを開く。ナナちゃんも覗き込むと、ややあって真剣な表情をした。
「あの人、何か裏があるのかな？」
「……直感だけど、何かある。そんな気はするな」
俺は少しかっこつけて言ったが、どうやらナナちゃんの気に障ったらしい。結局、彼女の晩酌に付き合わされることになった。今日はなぜかご機嫌斜めだ。

＊　＊

小さくくしゃみが出た。
「寒い？」
礼士さんが歯ブラシを咥えたまま心配そうに私を見た。口の端から歯磨き粉が垂れている。
「ううん、平気」
布団を敷いているうちに舞った埃でも吸ったのだろう。
「洗面所、空いたよ」
礼士さんがうがいを済ませて客間に入ってきた。
「ええ、今行く。おー、さむさむ……」
客間は暖房が効いているが、廊下は効きが良くない。
「残りの布団は敷いておくよ」
「はーい」
何だかんだ言って、礼士さんと二人でいるのが一番気が楽だ。……でも、結婚というと全く実感が湧かない。さっきまでの会話が重苦しく私にのしかかる。
「私なんかが……」
鏡の中の自分を見つめる。
私だけが知っている、本当の私。
それを隠して礼士さんと恋仲でいることは、……礼士さんとの幸せな日常を甘受することは後ろめたく、そし

て息苦しい。
でも、いざあの人を目の前にしてしまうと……。
鏡の中ににゅっと礼士さんの顔が現れ、私は驚いて声を上げた。
「ああ、ごめんごめん。寒そうだったから半纏を持ってきたよ。クローゼットに入ってたんだ」
「え、あ、ありがとう……」
礼士さんは私の細い肩に半纏を被せてから、一つ大きなあくびをした。
「先に寝てるね。おやすみ」
そう言い、そして私の顔を捕まえる。
ちゅっ。
何が起きたのかを悟った時には、礼士さんの照れ笑いは廊下に消えていた。
「……ふ、不意打ちは卑怯だってば……」
鏡の中の私を見ると、唇を押さえながら満足と困惑、そして苦悩がないまぜになっていた。

＊　＊

大浴場には湯気が立ち込めている。
「うっわ……改めて硫黄の匂いがきついな」
「こんなもんだろ」
顔をしかめる僕を横目に、ソニックは湯浴みを済ませて湯船に体を横たえる。僕も後に続く。
「は〜あ、極楽極楽……」
「じじくさいなぁ……」
「別にいいだろ」
僕の呆れ笑いをよそにソニックは大きく伸びをして、頭に乗せたタオルを直す。
「それにしても、このお湯は凄そうだな。真っ白だ」
乳白色の湯はとろりと濁っていて、湯の下に沈んだ肌を窺うことはできない。美肌や皮膚病に効きそうだ。
カラカラと引き戸が開き、誰かが入ってきた。
「あ、深浦さん。お先にお邪魔しています」
「あぁ、榊原さんにソニックさん。どうも」
立ち込める湯気の中でも彼の浅黒い肌はよく目立った。湯を被る音がバシャバシャと反響した。
「お隣、いいですか？」
「ええ、どうぞどうぞ」
彼はきびきびした動きのまま、湯船に体を沈める。
「美由に呼ばれてこちらまで？」
美由……ああ、橋立先輩のことか。そういえばこの人は婚約者だった。
「ええ。大学が少し早めの冬休みに入ったので。その代わり、年明けすぐに授業ですけどね」
「雪山でレースをするのにいい場所を知っている、って誘われたんです」
俺とソニックが変わりばんこに答える。
「サークルで知り合ったんですか？」
「いえ、研究室で知り合ったんです。うちの大学は法医学の授業がとても厳しくて、先輩のノートにはとてもお世話になっています。先輩は落単しましたけど」
「ああ、鬼の仏谷教授か。確か看護科の方でも授業を受け持ってるんだったっけ。噂には聞いてるよ。まっちもよく飽きずに受けてるよな」
ハゲ教授のあだ名が少し面白かったようで、深浦さんは片頬で笑った。
「法医学というと、将来は検死官か何かを目指しているんですか？」
「いえ、少なくとも死人を相手にする気はありません。半分興味本位で受けているみたいなものです」
ソニックが呆れたように僕を見た。
「彼女は大学でもあんな感じなんですか？」
「あんな感じ、というのは？」
「いや、普段から元気な人でしてね、あの人は……」
婚約者として普段の彼女の様子が気になるのだろう。
「まあ、明るいのはいつも通りですね。ここに来てからも特に変わりないです」
深浦さんは考え込むように湯船に視線を落とした。
「深浦さんは先輩とどこで出会ったんですか？」
「え？　ああ、色々と紆余曲折がありましてね」
ソニックが放った質問ははぐらかされた……のかと思いきや、向こうから話してくれた。
「自分は以前、リバティ薬科工業という製薬会社に勤めていましてね。たまたま運が良くて上位のポストにまで登れたんです。しかし、数年前にスペーシア製薬に買収、吸収合併されたんですよ。その後に色々あって美由と出会いました」
大企業の中で権力を持つということは、自由に恋愛できないことだ。そんな話をソニックから聞いたことがある。これもその一例だろうか。
「リバティ薬科工業……？」
ソニックは聞き覚えがある話なのか、彼は何かを思い出そうとしているかのように眉根を寄せた。
「血族経営ですよ。旧リバティの派閥とスペーシアの派閥をまとめる意味合いもあって、美由との関係が始まったんです。でも、それとは関係なく、自分が美由のことを大事に思っていることは事実です」
結婚が恋愛だけでやっていけないことは事実だ。その辺、この人は割り切って考えているのかもしれない。
「すみませんね、つまらない話で」

「ああ、いえいえ。こちらこそ立ち入った事情を聞いてしまって」
僕は軽く頭を下げた。
「別に構いませんよ」
深浦さんはじっとりとした笑みを浮かべた。高速が遅れていたとか言っていたし、疲れているのだろう。
＊　＊
結局、ナナちゃんに解放された……正確に言うと、ナナちゃんが酔い潰れた時には深夜2時を回っていた。
「ナナちゃん、そんなところで寝ていると風邪引くよ？」
俺は妻の体をゆする。また肉がついたか？　本人の前では口が裂けても言えないが。
「全く……しょうがないなぁ」
一向に起きる気配が無い。俺は机に突っ伏して眠っている彼女の体を畳の上に横たえ、布団をかぶせた。変な姿勢で寝て体を痛めたらかわいそうだ。そのまま部屋の電気も消す。
窓に目をやる。降りしきる雪の中、本館の輪郭がぼんやりと浮かんでいる。まだ灯りが点いている部屋があるのを見ると、夜更かし組は俺達だけではなさそうだ。カメラを向け、シャッターを切った。

第三章

夜明け前、空はまだ暗い。私はぱちりと目を覚ました。横の布団を見ると、礼士さんの姿は無い。
冷たい空気に漂う硫黄の匂いが鼻を刺した。それに引きずられるように段々と頭が覚醒していく。ここまで目が覚めてしまったら簡単には寝付けない。スマホのロック画面を点けると、時刻は6時過ぎだった。
起き上がってゆっくりと伸びをする。眼鏡越しにも常夜灯だけに照らされた客間は薄暗く、布団の外は寒い。
「礼士さん……？」
どこに行ったのだろう。まあいいや、まずは顔でも洗おう。そう思って洗面所に行くと、籠の中に礼士さんの服が入っていた。ああ、朝風呂か。
私はふと気になって礼士さんが脱ぎ捨てたパジャマに手を伸ばす。まだ温かい。
「XL……ん、XXL！？　どんだけ大きいのよ、あの人……」
でも、あの体に抱きついているとなぜか安心するのよね……。ちょっと袖を通してみよう。
「おぉ……」
予想以上にダボダボだ。袖口を折らずにキョンシーみたいなポーズ。ぱたぱたと袖が揺れる。
礼士さんの匂いがする。一晩ずっと着ていたのだから当然だ。こうやって袖を通すと背後からそっと抱きしめられたみたいで、少しドキドキする。
「……おはよう。何してるの？」
「わあっ！」
風呂へと続く戸がいつの間にか開き、礼士さんが顔を出していた。骨太な締まった体からぽたぽたと雫が垂れている。
「れ、礼士さんこそどうしたの……？」
「タオルを忘れちゃってね」
礼士さんはそのまま動かない。
「……あの、そこにいられるとタオルを取れないんだけどな」
「……え、あ、う、うん」
私は我に返った。考えてみると、ぶかぶかなパジャマ姿の女と素っ裸でびしょ濡れの男、傍から見ると何とも間抜けな光景だ。
「……お風呂で待ってて。すぐに礼士さんの分も持っていくから」
「え！？」
礼士さんが素っ頓狂な声を上げ、それを聞いて自分が何を言ったのかに気付いた。
「……！？　あ、いや、その、そういう意味じゃなくて」
「じゃあ」
礼士さんが私の言葉を遮る。
「……風呂で待ってるから。タオル、よろしく」
そう言い残し、私の恋人は風呂場へと姿を消した。取り残された私はぼけっと突っ立っていた。
「……は、はい」
私は血の上った頭でやっとこさ返事をすると、そっと服を脱ぎ始めた。朝っぱらから何やってんだろう、私。
＊　＊
結局、昨夜はソニックとの雑談が弾んで寝付くのが遅くなってしまった。途中でトイレに行ったときには深浦さんの部屋の灯りが点いていた。夜更かしをしていたのは僕達だけではなさそうだ。
横のベッドを見ると、ソニックはまだ寝ている。天パが爆発したようにうねって寝癖になっている。
カーテンの隙間から外を覗くと、空が白み始めている。朝からぼたぼたと雪が降り、山の稜線は見えない。
後ろで布擦れの音がした。振り向くと、ソニックが寝返りを打って呻き声を上げた。
「起こしちゃったか。悪い」

「……ん、ああ。まだ早くないか？」
僕は勢いよくカーテンを開けた。バルコニーに出ようかとも思ったが、さすがに寒すぎる。やめておこう。
「雪国らしい景色だぞ、ソニック」
「お、本当だ。一晩でだいぶ積もったな」
なるほど、言われてみるとその通りだ。窓の外に見える別館北斗星なんて、雪をすっぽりと被ってかまくらみたいになっている。建屋の前の道は融雪装置のおかげか、雪一つ積もってはおらず、黒々としたアスファルトから朝もやが立ち込めている。これが霧降荘という名前の由来なのかもしれない。
「この天気だったらレースもできそうだな。ちゃんと前も見えそうだ」
「そうだな。でも、もう少し寝かせてくれ……ゆうべは遅かったんだから」
ソニックは大あくびを一つして、そのまま布団に潜ってしまった。僕はどうしようか考えた。朝食には早い。朝風呂でも浴びてこようか。そう思い、きつい硫黄の匂いが立ち込める大浴場へ。乾いたタイルは朝の冷気でひんやりとしていて、お湯が余計に熱く感じられた。

＊　＊

シャワーで体を湿らせて、白い湯船に向かう。礼士さんは私の姿を見て、場所を空けてくれた。
「はい、これ」
「お、ありがとう」
タオルを手渡し、私は湯船に体を浸す。熱い。
「何だか、昨日よりも硫黄の匂いがきつくない？」
礼士さんの言葉に私は鼻の神経を鋭くする。
「……言われてみれば、そうかも」
「やっぱりそうだよね？　給湯施設の調子でも悪いのかな？」
その辺のことは分からない。給湯施設なんて意識すらしなかった。
「傷跡、しみない？」
礼士さんは私の肌に散らばった傷跡に目をやる。私は肩まで湯船につかり、白濁湯の下に傷を隠した。
「こんな傷だらけで、礼士さんも嫌でしょ？」
「そういう意味じゃないよ。痛くないのかなって思ってね、その傷。……痛むのなら、何かできないかと思って」
そう言う恋人の声は心配そうだ。
「見た目には派手だけど、もう痛くは無いわ。大丈夫」
「そっか。それならいいんだ」
昨日とは違う。痛々しい姿を晒すことに抵抗が薄いのは、見せる相手に心を許しているからなんだろう。
私は礼士さんの横顔を見る。立ち込める湯煙の中、彼の垂れ目が私の視線と絡み合った。
「……何だか、顔赤くない？」
「え？　少し熱くて、お湯が」
「やっぱり熱いわよね？　昨日はちょうどよかったのに」
私は湯の湧き出し口に目をやる。こんこんと白い源泉が濃い湯気を放ちながら流れ出ている。
「私を待たなくてもよかったのに……湯あたりしたらどうするのよ」
「一緒に入りたかったんだよ」
「……バカ」
礼士さんは赤い顔をしたまま微笑む。そんなこと、よくさらりと言ってのけるわね。でもそう言われてまんざらでもない私がいる。
そのまま私は礼士さんの体にもたれる。この人に出会うまでは知ることのなかった安らぎが、優しく私を包んでいく。勢いに身を任せ、唇を奪う。
「これは、昨晩のお返し」
火をつける。
「……はは、やったな？」
それから。湯上りの私を抱く礼士さんは、いつものように優しかった。
「愛してるよ、瑞穂さん」
「……嬉しい」

＊　＊

8時前に慌てて跳ね起きた俺は、二日酔い気味のナナちゃんを連れて本館に向かった。昨夜は勝手に潰れたと思ったら突然夜中にトイレで戻したりして大変だった。外に出ると雪の無い道は歩きやすい。融雪装置様様だ。
「あ、おはようございます」
本館に入るとまず出くわしたのは榊原君だった。濃い硫黄の匂いを漂わせているところをみると、朝風呂を浴びてきたのだろう。ソニック君の姿は見えない。
「おーい、朝飯できたぞ。冷めるから早く来い」
広間の入り口から顔を出して俺達を呼ぶのは釜田さんだ。糸のように細い目をしているが、前が見えるのだろうか？　そんな不躾なことを考えながら広間に入ると、まだいくつか空席があった。
「あれ、橋立さんは？」
館主の姿が見えない。
「寝坊だと思います。休日はいつも昼過ぎまで起きてこないんです。昨夜は遅かったみたいですし。ですよね、赤木さん？」
「ええ。私が床に入る前に挨拶をしましたが、急な仕事が入ったみたいで」
「全く、いい歳してろくな予定管理しないんだから！」

美由さんが呆れたような声を上げた。でもそのじっとりとした目線は階上の父親の部屋ではなく、なぜか赤木さんに注がれている。
「なら、まあいいか……ソニックは？」
「彼なら寝癖を直していますよ。じきに来ます」
榊原君は自分の席に座り、天井を見上げた。
「飲み物は？　牛乳、オレンジジュース、どっちにする？　ココアもあるぞ」
俺はオレンジジュースを、二日酔い気味のナナちゃんは水を頼んだ。ソニック君は広間に入ってきてすぐに榊原君のぶんも併せてココアを注文した。髪がややぼさついているのは寝癖なのか天パなのか。
朝食はスクランブルエッグにベーコン、トマトサラダ。主食にはトーストが提供された。典型的な洋食だ。
「一人分余ったな……昼にでも食うか。昼飯は必要な人にしか作らねえから、欲しいなら今言ってくれ」
そう言う釜田さんは昨夜の残り物を手早く口に運んでいる。これに加えて今朝の料理も食べるようだ。
「押鳥さんはどうしますか？」
剱さんが俺に声をかけた。
「俺は本当ならスキーにでも行こうと思ったんですが……なにせ嫁がこの有様なので」
「どういう意味よ……あたたたた」
ナナちゃんは頭を押さえながら俺を見た。確か荷物に頭痛薬を入れてあるはずだ。後で飲ませよう。
「あらあら、二日酔いですか？　……私もここに残ります、釜田さん。夫の様子が少し心配なので。美由はスキーに行くんでしょう？」
星美さんが娘を見た。
「うん。りっくんはどうする？」
美由さんはベーコンにかぶりつきながら深浦さんを見た。深浦さんはトーストを食べ終え、ライターで煙草に火を灯した。
「自分も行くよ。こんなこともあろうかと、昨夜のうちに頑張って仕事を終わらせておいたから」
「あ、昨夜遅かったのは深浦さんも一緒だったんですか」
俺は昨夜のことを思い出す。夜が更けても灯りが点いている部屋が俺の別館から見えたが、あれは深浦さんの部屋だったのか。
「休暇中くらいのんびりしたいんですが、そうもいかない事案がありましてね」
そう言う深浦さんの浅黒い顔は心なしか眠そうだ。
「確氷、お前は買い出しを頼む。ついでに下で昼飯でも食べてくるといい。大和は悪いが残ってくれ。夕食の準備を手伝ってくれ」
「はーい。先輩と剱さんの邪魔をしない粋な計らいですね。ねー、先輩？」
「あんた……しまいには怒るわよ」
確氷さんは少し顔を赤くして、そしてそれを誤魔化すように牛乳を飲み干した。
「剱はどうするんだ？」
「うーん……麓の温泉街を散策してきます。昼は向こうで食べてきます」
「スキーには行かないんですか？」
美由さんの問いに剱さんは苦笑いをした。
「遠慮しておきます。ウィンタースポーツが壊滅的に駄目なものでして」
そう言われるとどれだけ壊滅的なのか見てみたくなる。
「お前らはどうすんだ？」
釜田さんが医学生コンビを見た。榊原君はイチゴジャムトーストで口が塞がっていたため、先にソニック君が答えた。
「天気もいいのでドライブしてきます。夕食までには戻ります」
ドライブという名の雪道レースなのは公然の秘密だ。
「ですが、天気は悪そうですよ？」
赤木さんが外を見た。夜明け頃は晴れていたのに大粒の雪がどかどかと降っている。雪山の天気は気まぐれだ。
「……雪の中のレースもいいものですよ」
榊原君が強がりを言う。
「昼飯は要らねえんだな？　分かった」
「赤木さんはどうするんですか？」
俺は気になって依頼主に話を振る。
「私も残ります。橋立様の業務がありますので」
「……じゃあ、昼飯は押鳥夫婦と橋立と赤木と、俺達のも入れて6人分か」
釜田さんは指を折りながら考え始めた。食材の配分やスケジュールを計算しているのだろう。
「でも、スキーするにはもってこいの天気ですよ」
「昨夜、そんなに降ったんですか？」
美由さんの言葉にナナちゃんが反応する。そうか、酔い潰れていたから知らないのか。
「昨夜の雪は凄かったですよ。今年は雪が早くて……例年よりも降雪量は多いらしいですしね。頭が痛いです」
剱さんがぼやきながらスクランブルエッグを口に運ぶ。雪の鉄路で列車を走らせるのはさぞかし大変だろう。
やがて、大和さんが食後のコーヒーを出してくれた。
「……先輩、もしかして朝風呂入りました？」
「え？　ええ、何で分かったの？」
確氷さんは戸惑ったように大和さんの方に振り向いた。

「髪から硫黄の匂いがしたので……あれ、剱さんも入りました？」
大和さんは少し二人を見比べて、そしてにやにや笑いだした。
「な、何よ……」
「朝からお楽しみでしたね、先輩？」
派手な一撃。碓氷さんは顔を真っ赤にして轟沈した。剱さんはどこ吹く風で黙々とトーストを齧っているが、必死に照れ笑いを隠しているように見える。
「お盛んだな」
「あらあらまあまあ」
釜田さんと星美さんが冷やかしに参戦する。
「他に誰か朝風呂に入った人はいないんですか？」
剱さんが話題転換を図る。それに応じたのは榊原君だった。
「あ、僕は入りましたよ」
「お湯、熱くなかったですか？」
「……言われてみれば。剱さんもですか？」
お湯が熱かった？
「剱さんと碓氷さん、別館のお風呂に入ったんですか？」
「ええ。榊原君は本館の大浴場に？」
「はい。普通のお風呂とは違うから水温調節もできなくて、茹蛸みたいになっていました。硫黄の匂いも昨日より強烈でしたし……」
「あ、榊原君もですか？　こっちも硫黄の匂いがきつかったですね」
あまりにも熱すぎる温泉というのも考え物だ。
「ボイラーの調子が悪かったんでしょうか？　後で確認してみますね」
星美さんの言葉に俺は少し引っかかった。
「ここのボイラーって、誰が操作しているんですか？」
「私達一家と深浦さん、それに赤木さんは操作方法を熟知しています。誰かいじったのかしら……？」
星美さんは首をかしげる。まあいい。とりあえず熱すぎる温泉よりも、嫁の二日酔いの方が大事だ。

＊　＊

朝食を済ませた僕とソニックは、早速雪道に繰り出すことにした。ぼたぼたと大粒の雪が降りしきっている。
先輩にガレージを開けてもらい、相棒に乗り込む。寒さをものともせずに一発でエンジンが目覚める。
「行くか」
僕はアクセルを踏み込み、霧降荘の敷地から車を出す。ヘアピンカーブが連続する山道は雪深く、真っ白に染まっている。降り続く雪で視界も良くない。
アクセルを遠慮なく踏み込み、エンジンの低い咆哮が雪山に響く。
サイドミラーにソニックのＲＸ－７の姿が見えた。後輪駆動で雪道に向かない車だ、苦労している様子が伺える。僕は彼を置いてきぼりにして、限界に挑む。
ヘアピンカーブ。ハンドルをさばき、強烈な負荷を体に感じる。ドリフトの末に景色が１８０度反転し、視覚が進むべき雪道を捉える。そして更なる加速。響くエンジンの爆音。速度計の針が振り切れる。
しかし。
突然、耳慣れない重低音が僕の鼓膜を打った。車の音ではない、もっと大きな……何か。
嫌な予感がした。攻めすぎるのは命取りだ。僕は大急ぎで車を停める。車が横滑りし、タイヤの悲鳴が山の空気を切り裂く。無理に引っ掻いた路面から雪煙が舞う。
「何だ……？」
雪煙が徐々に晴れ、僕は窓の外を見る。聞き慣れない重低音はますます大きくなってくる。背中に嫌な汗が流れた。
ばさばさっ。
杉木立からの落雪が屋根を叩く。
「ん……？」
音に交じって、自分の知らない振動が車に走った。エンジンの鼓動よりもずっと細かく、不規則な振動だ。
背後でソニックが車を停めるのが目に入った。パワーウィンドウから身を乗り出して怒鳴る。
「まっち！　どうした！？」
どうした？　……どうしたんだろう？
「大丈夫か！？」
大丈夫……いや、これは！？
本能が弾けた。僕は車の中からでも聞こえるように全力で怒鳴った。
「逃げるぞ、ソニック！」
ギアをバックに叩き込む。
「雪崩だ！」

＊　＊

朝食を済ませて早速ドライブに出かけた医学生コンビの食器を下げようとすると、釜田さんがそれを止めた。
「碓氷。とりあえず買い出しに行ってくれ。ここから下の街まで時間がかかるから、早く出ねえと良い食材から無くなっちまう。食器は俺と大和でやっておくから、剱に頼んで車を出してもらえ。ほれ、車のキーだ」
「そういうことなら了解です」
そのまま釜田さんは食後のコーヒーを啜っていた礼士さんに事情を話した。
「でも、そんなに急ぐんですか？　今から出ても食材が

まだ並んでいないと思いますが」
「馬鹿野郎、俺が気を利かして二人っきりにしてやってるんだ。早めに出て二人で温泉にでも入ってくればいいだろ。どうせ別館の風呂は窮屈だったんだろ？」
釜田さんが小声で礼士さんを焚きつける。私に丸聞こえな点を除けばありがたい。小声の意味が無い。
「そういうことでしたら……ありがたくこの機会を使わせてもらいます」
「いいってことよ。碓氷に渡したいもんもあるんだろ？上手くやれよ。ほれ、行った行った」
私に渡したいもの？　何だろう。しかしその疑問について頭を巡らせる間もなく、釜田さんに追い出されるように私と礼士さんは本館を出た。朝起きて礼士さんとお風呂に入っている時は晴れていたはずなのに、今はボタ雪が降っていてろくに前も見えない。じっとりと水分を含んだ重くて厄介な雪だ。
「こっちには融雪装置が無いから面倒よね……」
私は厚く雪が積もった別館への道をえっちらおっちらと進む。別館を出た時につけた足跡を引き返すだけだからまだ楽だ。朝っぱらは釜田さんと叶ちゃんの足跡しかなく、途中まで自力で雪を掻き分けるしかなくて大変だった。
「準備して、早いとこ出よう。早く山を下りれば向こうでも温泉に入れるし」
別館に辿り着き、荷物を置いてある客間に戻る。ぐちゃぐちゃに乱れ切った布団がそのままだ。
「仕事なのかデートなのか分からないわね」
私もくすくす笑いながら身支度を始める。
「釜田さんから車の鍵を借りといたわ。ここに置いとくから」
「うん、了解」
私は客間の隅に寄せた文机に鍵を置いた。
ん？
鍵が小刻みに揺れ始めた。
「……礼士さん？」
「え？」
礼士さんも異変に気付いたようだ。
「これって……」
礼士さんが私を手で制する。そのまま口元に人差し指を当てた。
何か聞こえる。低く、重く、そしてとてつもなく速い。
私の心臓が鷲掴みにされた。
過去。
悲鳴。
涙。
恐怖。
死。
暗転。
動悸。
あの日が一気に蘇る。
涙でぼやける視界。礼士さんの姿が歪む。
「瑞穂さん……！？」
声が銅鑼のように幾重にも連なる。
「大丈夫、大丈夫……」
礼士さんが私の体をぎゅっと抱きしめる。
大丈夫。
大丈夫？
迫りくる真っ黒な残像。
薄暗いあの部屋に置き去りにした。
助けられた。
違う。
逃げた。
為すすべもなく飲み込まれる。
過去。
振動。
振動。
激震。
激震。
激震。
血。
死体。
そして、私。
「瑞穂さん！」
礼士さんの叫びで我に返った。気が付くと私は、愛しい人の腕の中でガタガタと震え、荒い息を吐いていた。
「横になって。さあ、こっちだ……」
そのまま礼士さんは私を布団に押し倒す。
倒される。
喰われる。
嫌だ。
私を喰わないで。
お願い……！
「瑞穂さん！」
え……？
「ほら、落ち着いて。深呼吸して……」
いつの間にか私は礼士さんに馬乗りになっていた。
「聞こえる？　ほら、心臓の音を聞くんだ」
そのまま私の耳は礼士さんの厚い胸板に押し付けられた。鈍く穏やかな列車の響きのように、礼士さんの鼓動が耳に届く。

「ほーら、もう大丈夫」
暖かく、そして私の体の震えが段々小さくなっていく。
「大丈夫だよ、僕がいるからね」
大丈夫……？
「うん。もう大丈夫。ね？」
……うん。
礼士さんの大きな手が、優しく私の背中を撫でる。
「ちょっとした地震だと思うよ」
「……違う」
私は、地震とは違う何かを感じていた。
「もっと、身に迫るような……」
過去が蘇りそうになる。私は思わず礼士さんの肩にしがみついた。
いつかは向き合わなければならない過去なのに。
それなのに。
私は礼士さんに甘え、逃げている。
そんな自分が憎い。

＊　＊

振動が収まり、俺はこわごわとテーブルの下から顔を出した。ナナちゃんも俺にしがみついたまま、後に続く。
「……地震？」
「お前ら、無事か？」
真っ先にテーブルの下から立ち上がったのは釜田さんだった。
「ええ、大丈夫です」
俺は揺れが収まったことを確認して立ち上がる。テーブルの上は少し乱れてはいたが、食器が落ちたりしているわけではない。
「何だ、大した地震じゃなかったみたいですね」
深浦さんもテーブルの下から出てくる。
大した地震じゃなかった？　その言葉に引っかかった。大した地震じゃないのに、どうしてみんなテーブルの下に伏せたのだろう？　それに……それに、全身の毛穴が開くような、何かとてつもなく大きなものが迫り来る感覚。あれは、一体……？
「お母さん、ボイラーを見ておいた方がいいんじゃない？　変は止まり方をしてガスとか出したらヤバいしさ」
「美由、ええ、そうね。見てくるわね」
「自分も行く。ガスマスクを持っていこう。あと鍵も。硫化水素やメタンガスが出ていたら大事だ」
深浦さんがそう言い、外套を引っ掴む。なら私も、俺もと同行者が増え、結局は広間にいる全員で様子を見に行くことになった。
「おかしいなぁ……」
大和さんが首をかしげている。
「大和さん、どうしたんですか？」
すっかり酔いが覚めたナナちゃんが話しかけた。
「地震の規模を調べようと思ったんですけれど、インターネットに繋がらないんですよ。圏外って出るばかりで」
「調子が悪いんじゃないんじゃないですか？」
大和さんは首を傾げながらスマホをエプロンのポケットにしまった。
外に出ると、水っぽい雪が降り続いていた。給湯設備までの道は融雪装置のおかげで、やはり雪一つ積もっていない。
「ガスが出たら警報が鳴るはずだから大丈夫だとは思いますが、一応つけておきましょう」
「そうだな。何かあってからじゃ遅い」
深浦さんの言葉に釜田さんが賛同し、二人は揃ってガスマスクをつけた。俺も行くことにして、星美さんからガスマスクを受け取る。そのまま俺達は給湯施設に向かって歩く。
「あなたたちはここで待っていて下さい」
深浦さんに言われて星美さんとナナちゃん、それに大和さんと美由さんは別館北斗星の前で待たされる。四人の姿が徐々に小さくなり、そして俺は給湯施設の前で立ち止まった。
「鍵は……あった」
深浦さんが開錠しようとするが、なかなか開かない。
「あれ、おかしいな？　鍵が回らない」
「ええ？　貸してみろ」
しびれを切らした釜田さんがドアノブに手をかけると、呆気なくドアが開いた。一気に硫黄の匂いが強くなった。今までにないくらいに強烈だ。嫌な予感がする。
「何だ、最初から鍵なんてかかってねえじゃねえか」
深浦さん、釜田さん、俺の順で中に入る。建物の中はボイラーのランプしか灯りが無く、薄暗い。そして温室のように暑い。
「あれ……？」
深浦さんが声を上げた。
「どうしたんですか？」
「警報装置のスイッチが切られているんです」
「え？」
俺は深浦さんの背後に立った。深浦さんがスイッチを指で示す。確かにノッチが『切』の方に下がっている。
「これではガスが出ていても分かりませんね……おや、換気扇も切れてる」
「え、危ないじゃないですか！」
俺の声に急かされたのか、深浦さんは換気扇を点けた。荒い音を立ててファンが回り始める。そのまま警報装置

のスイッチも点けると、ジリジリとけたたましくベルが鳴った。ガスの濃度が基準値を超えているようだ。
「おい！　これを見ろ！」
しかし、警報のベルは釜田さんの悲鳴にかき消された。彼の方に回ると、ボイラーの陰に誰かが座り込んでいる。
暗くともはっきりと分かる禿頭。
ずんぐりと突き出た太鼓腹。
「橋立……さん！？」
「待て！」
深浦さんが慌てて駆け寄るのを釜田さんが抑える。そして彼はガスマスク越しに一つ深呼吸をして、そっと手首に触れる。
「……駄目だ、死んでやがる」
俺の悲鳴が雪山にこだました。

＊　＊

「あ……危なかった」
僕は激しい鼓動を抑えようと、大きく深呼吸した。
ソニックがクラクションを鳴らした。僕は彼の車の方に目をやる。彼は霧降荘の方に首を振る。言わんとすることは分かった。早く戻った方が良さそうだ。
僕は改めて目の前を見る。山を下りる唯一の道は、そしてついさっきまで僕とソニックがいたはずの道は、雪崩で完全に埋まってしまっていた。
大慌てで来た道を戻る。さっきの雪崩から逃げる時といい、この時といい、人生で一、二を争うくらいに攻めた走りをしただろう。それだけ僕とソニックは焦りに駆られていた。
実際にはそこまで時間はかかっていないはずなのに、霧降荘までの道のりがとても遠く感じられた。やっとの思いで辿り着くと、給湯施設の前に人だかりができていた。星美おばさんが本館の方に大慌てで走っていく。僕とソニックはシートベルトを外すのももどかしく、車を駆け降りる。
「おーい！　大変だーっ！」
ソニックがみんなの方に走る。僕も走る。肺一杯に吸い込む空気は今までになく強烈に硫黄の匂いがする。
「近寄るな！　危ねえぞ！」
くぐもった怒鳴り声が返ってきた。釜田さんの声だ。
ん？
僕とソニックはただならぬ気配を感じて立ち止まった。みんなが駆け寄ってくる。
「どうしたの！？」
夏奈さんの問いに僕は息を切らしながら答える。
「雪崩です！　道が埋まりました！」
一同の顔を絶望が覆う。
「雪崩……ですって！？」
「くっそお、こんな時に！」
「ええい、なんてこった！　これじゃ警察を呼べねえじゃねえか！」
警察？
「……何かあったんですか？」
ただならぬ気配に耐え切れず、ソニックが問う。答えてくれたのはガスマスクを外した釜田さんだった。
「橋立漣丈が死んだ」

＊　＊

どれくらいの時間が経っただろうか。礼士さんが私の背中を撫でるうちに、私の昂った神経はゆっくりと平静を取り戻していった。
ジリリリリリリリリ！
「ひゃっ！」
けたたましい警報音。
あの日と同じ。
「大丈夫……大丈夫だから……」
私は礼士さんの体にすがりつき、厚い胸板に顔を埋める。この人の不安を隠し切れない声も、あの日と同じだ。大きな背中に回した私の手が震えた。
「スイッチは……ああ、あれだ」
警報を切ろうと起き上がり、立ち上がろうとする。私は礼士さんから離れたくなかった。離さない。
「瑞穂さん……」
「やだ！　私を離さないで！」
礼士さんは少し逡巡したのか、間を空けてからそっと座り直した。
「大丈夫。僕はここにいるから」
警報音が私の鼓膜を揺るがし続ける。
「……立てる？」
これはあの日と違う。毛布のように優しく尋ねられる。
「う……ん」
無理やりに体の震えを抑え込み、足に力を込める。目線が一気に高くなった。そのままスイッチに近寄り、切る。静寂。
しかし、息つく間もなく静寂が壊された。誰かが乱暴に玄関の戸を叩いた。
「先輩！　剱さん！　いますか！？」
叶ちゃんの声だ。普段とは違いかなり切羽詰まった声のトーンだ。
「どうしたんだろう？　行ってみようか」
礼士さんは私の手を引いて玄関に向かう。出ると、叶ちゃんが青ざめた顔で立っていた。
「剱さん、先輩、買い出しは中止です。大変なことにな

りました」
只事ではない何かが起こった。
「何があったの？」
私は嫌な予感を押し殺しながら尋ねた。
「悪いニュースが二つあります。まず、私達は閉じ込められました。雪崩で道が塞がったみたいです」
「雪崩って……じゃあ、さっきの地震は」
あの何かが迫りくるような感覚は、大量の雪が崩れ落ちるものだったのか。
「ええ、たぶん。でも、もっとまずいことになりました。先輩、聞いても倒れないで下さい……橋立漣丈さんが亡くなりました」
亡くなった……ですって！？
膝から崩れ落ちそうになるところを、礼士さんの太い腕が支えてくれた。しかし、その腕も僅かに震えていた。

第四章

とりあえず、釜田さんがサンドイッチとコーヒーを作り、早めの昼食に出してくれた。生きている者全員が広間に集い、揃って不安な表情をあらわにしていた。
「飯、できたぞ」
釜田さんがサンドイッチを山積みにした大皿をテーブルに置く。でも、私も含め誰も手を伸ばそうとしない。
「食えるうちに食っとけ。何も食べねえよりも、何か食っておいた方が生き延びる可能性はうんと高い」
そう言い、自分だけさっさと食べ始める。イチゴジャムとパン屑が口元に残った。朝の残りの目玉焼きも自分の皿に確保してあるのは、いつも通りの食い意地だ。
礼士さんが私の横で口を開いた。
「とりあえず状況を整理しませんか？　今、僕達はどういう状況に置かれて、何が起こっているのか。それを確認しましょうよ」
「仕切るまでもないことです。雪崩が起きて私達は閉じ込められました。そこに橋立様の訃報が重なっただけです。不幸が偶然にも重なっただけです」
赤木さんが会話を乗っ取る。
「橋立様の件は事故でしょう。ボイラーの調整か何かの時にガスが発生して、知らず知らずのうちにそれを吸い込んでしまった。そういうことなんじゃないですか？」
事故。ありえなくはない、いや、一番可能性が高そうな話のように聞こえる。
「仮に事故だとしても、現場と状況を確認しておくに越したことはありませんよ。僕も事故死の可能性が一番高いと思いますが、その考えが現状を整理しない理由にはなりません」
礼士さんは言い返した。今度は星美さんが口を開く。
「私も現状整理自体には賛成です。ですが、なぜあなたが仕切るんですか？」
「そうよ。あなた、ただの運転士でしょ？　そんな能力あるんですか？」
温厚な彼女も夫の死を前にして、さすがに気が立っているのだろう。おっとりしているのは言葉遣いだけだっで、口調は刺々しい。娘よりはマシだが。
「僕は別に仕切りたいわけではありませんけどね……」
「まあまあ橋立、そう言うな。こいつは結構頼りになるんだぜ？」
礼士さんが苦い顔をする横で釜田さんがフォローを入れる。
「ゴールデンウイークに寝台特急の車内で殺人事件があったことを覚えてるか？」
「ええと、確か小田原での殺人事件も関係していたやつでしたっけ？」
夏奈さんの言葉に釜田さんは頷いた。
「剱はな、あの込み入った事件をすぱーって解決しちまったんだよ。それだけじゃねえ、6月にあった新幹線が乗っ取られた事件。あれもこいつが真相を見破ったんだ。こんなことを言うのは不謹慎かもしれねえが、餅は餅屋だ。ここは修羅場に慣れた彼に任せるのが一番安全だ」
一同の視線が礼士さんに集中する。
「でも、いずれの事件も警察が解決したって話だったと思いますが？」
「民間人が解いたってそんな面目丸潰れな発表、警察がするはずがねえだろ。剱も碓氷も騒がれるのが嫌だから警察に手柄を譲ったんだよ」
榊原君は釜田さんの言葉に沈黙した。
「もう一つ理由がある。ここにいる人で、剱と事前に面識があった人はいねえ。だから、こいつを仕切り役に任せても、犯人にプラスになる要素がねえはずなんだ。仮にこれが犯人のいる殺人だとしたら、の話だが」
釜田さんの言葉に緊張が走った。
殺人。
誰もがみな、その可能性には触れなかった。気付いていなかったわけではない。でも、触れることは憚られた。
「殺人って……こんな山奥で、そんなことがあるんでしょうか？」
真っ先に疑問を挟んだのはソニック君だ。
「お前の頭は帽子掛けか？　それを確かめるために現状

を整理確認するんだよ。とにかく俺はこいつに任せるのが一番安全だと思う。異存あるか？」
釜田さんが周りを見回す。無言。
「じゃ、任せたぜ、剱」
「僕ですか……」
当の礼士さんは少し苦い顔をしている。仕方ないと諦めの表情を浮かべ、話を始めた。
「まずは榊原君とソニック君、雪崩の件から話してくれませんか？」

＊　＊

まず僕達にお鉢が回ってくるとは思わなかった。
「残酷なことを言うようですが、死んでしまった人はどうしようもありません。雪崩が起きたということは、この雪山からどうやって脱出するかということが一番の問題になります。まずは僕達が生き延びて、この雪山から下山することを考えましょう」
道理だ。自分の身が一番可愛い。
「じゃあ、榊原君。それにソニック君。雪崩が起きたのはどの辺なんですか？」
僕は記憶を辿る。
「……正直なところ、正確には分かりません。ソニックとドライブをしていたら変な音が聞こえてきて車を停めて、そこから段々と振動が迫ってきて。慌ててバックしてどうにか無事だったんです」
本当に間一髪だった。一瞬でも遅れたらただでは済まなかっただろう。
「ソニック君はどう？　場所は分かる？」
「うーん……ここから車で１０分もかからない所だったと思います」
「スピード狂の感覚だと分かんねえよ」
先輩からの問いへの答えを釜田さんが粉砕した。
「どれくらいの規模の雪崩だったんですか？」
「あ、写真がありますよ」
当のソニックは意に介さない。深浦さんの問いに彼はスマホを出した。
「いつの間に？　随分と用意周到だな」
「慌てて撮ったから画質は悪いけれどな」
そう言ってソニックはスマホを操る。画像フォルダを開き、一同に見せる。
「これは……まずいですね」
赤木さんが呻いた。写真は少しぶれているが、道路が完全に埋没しているのは明らかだ。突き破られたガードレールが雪崩の威力を雄弁に語っている。
「高さ2メートルはありますね。どれくらいの長さが埋まっているんですか？」
大和さんの質問に僕とソニックは考え込む。
「……分かりません。あの時は逃げるのに必死だったので、そこまで観察する余裕がありませんでした」
僕は少しうなだれる。押鳥さんがわざと陽気な声でフォローを入れた。
「まあまあ、除雪車がありますし。少しの雪なら何とかなりますよ」
「それが……」
橋立おばさんが落胆したように口を挟んだ。
「あれを操縦できる人は限られています。一家の中では私の夫、つまり橋立漣丈だけです」
ずっしりと重い沈黙が降りた。その橋立おじさんは今、給湯施設の中でぴくりとも動かない。
「榊原君にソニック君、除雪車の運転はできる？」
先輩が僕とソニックを見る。
「すみません。僕もソニックも車ならともかく、重機はちょっと専門外ですね」
「そっか……」
いきなり父親を喪った先輩だが、見たところ気丈に振舞っている。でもさすがにため息を隠すことはできないみたいだ。
「他に除雪車の運転ができる人はいませんか？　剱さん、どうですか？」
「未経験です。車高があるので、下手に操縦して横転させかねません。運転は遠慮しておきます」
使える人がいないのでは、除雪車もただの置物にすぎない。釜田さんが気を取り直して発言する。
「まあ、どの道どうにかして助けを呼ばねえとな。幸いにして電気は切れていないし、食料はまだ十分にある。小分けにすりゃ四、五日の籠城なら余裕だ。味の質には目をつむってもらわねえといかんが」
釜田さんの言葉に少し安心した。電気が来ているということは暖房が使えるし、給湯施設も動く。凍死する心配はなさそうだ。
「助けを呼ぶ……電話はできますかね？」
碓氷さんの問いに答えたのは先輩だった。
「駄目でした。インターネットも電話も基地局が押し流されたみたいで、手持ちのスマホやケータイではどうにもなりません」
「インターネット基地局もやられたんですか？」
僕は慌てて自分のスマホを開く。液晶の隅に圏外という文字が浮かんでいた。
「本当だ、圏外になってる」
「私のも」
「全滅か」

席に座る一同めいめいのスマホはインターネットから切り離されていた。
「どうする……狼煙でも上げるか？」
「何を言ってるんですか。戦国時代じゃあるまいし、そんなの誰も気付きませんよ」
釜田さんと大和さんがつまらない漫才のようなやりとりを始めた。過去に事件に遭ったって言っていたし、この張り詰めた空気に慣れているのかもしれない。
「……あっ、俺の衛星電話なら使えるかもしれません」
ソニックがぱんと手を叩いた。
「衛星電話、持ってんのか？」
釜田さんが期待に満ちた眼差しでソニックを見る。
「こんな山奥なので、親が心配して持たせてくれたんです。繋がるかどうかは分かりませんが……」
彼は小走りで二階の自室へと向かい、すぐに戻ってきた。バブル期の携帯電話のようなごつい機械からアンテナを伸ばし、プッシュする。コールすること約４０秒。
「あ、もしもし、母さん？」
脱出口が開けた。

＊　　＊

ソニック君の秘密兵器は劣悪な電波環境の中、どうにか俺達の現状を外部に伝える大役を果たした。
「母から警察と、それに消防に連絡してくれるとのことです。ですが、いつ助けが来るのかは未知数ですね」
「少なくとも今日中に来ることは無いでしょうね」
俺の言葉に一同がしかめっ面をした。
「だってこの天気です。これじゃとても防災ヘリとかはここに辿り着けません」
俺は窓の外を指差す。大粒のぼた雪は朝から相変わらずだが、悪いことに風も強まってきていた。
「押鳥さんの言う通りです。となると陸路ですか……ですが、こんな辺鄙な山奥ですし、まず雪崩の現場まで辿り着くまでに時間がかかります。さらにこの時期は日が短い。夜を徹して除雪をやるなら話は変わってきますが、ここの警察や消防にそんな人員的余裕があるとはちょっと考えにくいです。雪崩の規模にもよりますが、今日中に助けが来ることは無いでしょうね」
剱さんも理詰めで俺達の希望をへし折っていく。
「にしても、衛星電話なんてハイテクなものをよく持ってたな。あんた、何者なんだ？」
釜田さんがソニック君に視線を投げる。
「母親に無理矢理持たされたんです。雪山に行って、万一があったら大変だからって」
万一とは雪崩で閉じ込められることを指したのだろうが、現実はそれを上回った。
「ソニックは大川重工業の御曹司なんです。平たく言うと、金満家のもとに生まれたんですよ」
大川重工業、という言葉にどよめきが上がった。
「礼士さん、大川重工業って？」
「日本を代表する重工業メーカーだよ。車や鉄道車両、航空機といった乗り物の部品を広く手掛けているんだ」
「……そういや、給湯施設のボイラーって大川重工業のものじゃありませんでしたっけ？」
俺は星美さんを見る。彼女は取扱説明書を探しに行き、すぐに帰ってきた。
「ええ、確かに大川重工業のものです」
表紙を指差す。大川重工業のブランドマークが印刷されている。
「俺を疑っているんですか？」
ソニック君が少し呆れたように言う。榊原君も同調して親友を援護する。
「大川重工業繋がりで彼を疑うのは少し邪推が過ぎませんか？　いくらソニックが大川重工業の御曹司でも、いちいち大川の製品に精通なんてできません」
「一応までに可能性を指摘しただけです」
邪推だろうという気持ちは俺にもあるのだが、かといって黙っているわけにもいかない。
「言い争いは後にしろ。それより、その衛星電話で直接に警察や消防に連絡はできねえのか？」
「それが、この衛星電話は子機なんです。母が持っている親機としか会話できないんですよ」
何でまたそんな中途半端なものを……まあ、無いものねだりをしても仕方ない。
「そういえば、この辺は雪崩が多い地域なんですか？」
榊原君がやや強引に話題を変え、星美さんに尋ねた。星美さんは少し考えこみ、おっとりと答える。
「さあ、どうかしら？……あまり聞く話ではありませんね。そうですよね、赤木さん？」
「ええ。橋立様はその辺も勘案してこの土地をお選びになったはずです」
「でも、現に雪崩は起こったじゃん」
赤木さんの返事に美由さんが噛みつく。
「というか、雪崩ってなんで起きるんですかね？」
ソニック君の問いに答えたのは剱さんだった。
「複数の例があるらしいですが、僕の知っているメカニズムでは放射冷却が原因になるものがありますね」
「放射冷却？」
ナナちゃんのオウム返しに剱さんは頷いた。
「ええ。晴れるということは、地表の熱を閉じ込める蓋の役割を担う雲がいなくなるということです。特に気温

の低い朝方に晴れると、地表の熱が逃げて放射冷却が起きるんです」
「確かに、今朝は晴れていました。すぐに雪になりましたが」
榊原君が合いの手を入れる。
「するとどうなるか？　地表に積もった雪、特に水分を多く含んだ雪は氷結します。すると雪の表面は氷になるわけですからツルツルに滑りやすくなります。そこに重い雪が積もると、摩擦が足りずに氷の上に積もった雪が滑り落ちます。これが雪崩では多いメカニズムです」
剱さんは一口サンドイッチを齧る。
「このサンドイッチ、結構いけますね」
「だろ？　マーマレードも食うか？」
「あ、それは要らないです」
あまりにも呑気な剱さんと釜田さんの会話に、俺は呆れを通り越して少し安心した。赤木さんが眉をひそめて二人を見ている。
「もちろん、そもそもの雪の量が多すぎて雪崩が起きることもありますけれどね。僕の職場も何度雪崩に泣かされたことやら……本当に雪は怖いですよ。白い悪魔です」
深浦さんが少し苛ついたように口を挟んだ。
「雪崩のことは分かりました。で、これからどうするんですか？」
剱さんは口の中を空にして答える。
「とにかく、今日は助けが来ないと割り切って考えるのがいいと思います。しかし、そうなると問題があります。あまり話したくはないですが、死体の状態です」
そうだ。それは俺もずっと気にしていた。
「現場保存は事件捜査の鉄則です。なので、素人なりに現場の保存をしたり、データを集める必要があると思うんです。幸いにして、ここには医者の卵もいますしね」
そう言い、剱さんは榊原君の方を見た。
「ぼ、僕ですか！？」
「もちろん強制はしません。しかし、死亡推定時刻の割り出しや死因の推定など、あなたの知識は役に立ちます。こんな言い方は難ですが、死体は事件解決のための最大の手掛かりです。死体の無い殺人事件は半分迷宮入りも同じことですからね」
言っていることは乱暴だが間違ってはいない。碓氷さんが僅かに体を縮こませたような気がした。
「そういう意味でも、死体が新鮮なうちにデータを集めておきたいんです。ですが、ここは状況が状況です。事件なんて放っておいて除雪などに注力するべきだという意見もあるでしょう。人員を除雪チームに全振りするか、それとも一部人員を事件に割くか。この二択での多数決を提案したいんです。何か考えがある人はいますか？」
剱さんの垂れ目が一同を見回す。
「一ついいですか？」
手を挙げたのはナナちゃんだ。
「仮に一部の人は事件捜査のためにここに残るとしたら、誰が残りますか？」
「そうですね……」
剱さんは考え込んだ。
「まず、榊原君には残ってもらうのが妥当でしょう。死亡推定時刻や死因の判定には医学生の知識が欠かせません。ですが、彼はまだ本当の医師ではありません。判断の二重化という意味を込めて、ソニック君にも同行してもらうのがいいと思います。後はこの屋敷の事情を一番熟知している星美さん、あなたにも残ってもらうことになるでしょう」
そして剱さんは俺を見た。
「他には押鳥さん、あなたにも残ってもらいます」
「俺もですか？」
意外な指名だ。
「押鳥さん、あなたはカメラが趣味だと言っていましたね？　現場の撮影をお願いしたいんです」
気乗りはしないが間違った判断ではないだろう。
「しかし、俺達がペアで行動することに何か意味があるとは思えませんが……」
ソニック君が剱さんの主張に疑義を挟む。
「気を悪くしないで聞いてほしいんですが、現時点では誰が犯人なのか分かりません。そもそも事故か事件かも不明です。仮にこれが殺人で、万一に榊原君かソニック君が犯人だとしたら、死体に関するデータをある程度誤魔化す絶好の機会を与えることになります。だから医者役は二人いることが望ましいんです」
榊原君とソニック君は絶句した後、苦笑いするしかなかった。
「仮に俺とまっちの共犯だとしたらどうしますか？」
「お手上げですね。優秀な警察が真相を看破することを期待するしかありません」
ソニック君の挑発的な意趣返しに剱さんも苦笑した。
「時間が惜しい。早いとこ決めようぜ」
釜田さんが催促した。

＊　　＊

釜田さんのマークⅡに揺られること約２０分。私は雪崩の現場に辿り着いた。
唖然とした。
「何よ、これ……」
雪の壁だ。礼士さんの背丈は軽く超えている。

「こりゃあ参ったな……なんてこった」
釜田さんも私の横で天を仰ぐ。
「奥行は……少なくとも１０メートルはありますね。道が曲がって奥が見えないので、もっとあるかもしれません。人力での除雪は無理ですよ」
深浦さんの冷徹な声が私の耳に届く。
「除雪車も動かせないし……どうしよう」
夏奈さんがため息をついた。
「他に道は無いんですか？　迂回路とか」
叶ちゃんが駄目元で聞いてみる。案の定、答える者は誰もいなかった。
多数決の結果、全会一致で二手に分かれることになった。しかし、除雪チームからすると男手四人を失ったのはダメージが大きい。
「ここに居られるのは日が暮れるまでだ。夕食の準備をしなきゃいけねえし、夜は危ねえからな。始めよう」
釜田さんの号令で、私達はめいめいにショベルを手にした。そして雪壁に向かって儚い抵抗を開始した。

＊　＊

除雪隊を見送った僕達は、玄関でそのまま打ち合わせに入った。
「まずは僕と押鳥さん、それに星美さんの三人で中に入ります。押鳥さんが一通り写真を撮ってから榊原君とソニック君は入ってきて下さい。検死をお願いします」
「了解です。あ、皆さん、ガスマスクを持ってきました」
「ガスマスク？」
橋立おばさんが茶色いガスマスクを差し出し、僕達はきょとんとした。
「夫は給湯施設の建屋内で見つかりました。給湯施設そのものも様子がおかしいんです。異常な操作をしたみたいで。ガスを出しているようなので、防毒をせずに近寄るのは危険です」
言われてみると、硫黄の匂いが今までになく強烈だった気がする。それに、非常ベルも鳴っていた。
「そうですか……じゃあ、押鳥さんが写真撮影を終えてから星美さんはボイラーを正常運転に戻して下さい。榊原君とソニック君にはその後に検死をしてもらいます」
僕達はコートを羽織り、外に出る。忌々しいことに、雪は一向に止む気配が無い。
「ガスって硫化水素ですか？　でも、警報装置とかがありそうなものですけれど」
剱さんが早速質問を放つ。
「それが、警報装置の電源が落とされていたんです。深浦さんが見つけて、点けてくれました。今はもう警報が切れているので、ガスマスクをしなくても安全です」
「ふむ、そうですか……」
押鳥さんの言葉に剱さんは腑に落ちないといった顔をした。ガスマスクを試着してみる
「……もう少し大きいのは無いんですか？」
「このサイズだけです」
剱さんはくぐもったため息をついた。顎の辺りが少しつっかえてきつそうだ。
「ガスマスクはいくつあるんですか？」
「霧降荘に滞在する全員分を確保してあります」
ソニックの問いに橋立おばさんが答える。
「誰かが使った形跡は？　その、橋立さんを見つけた人以外で」
「深浦さん、釜田さん、それに俺が装着した以外に、ですか……星美さん、どうですか？」
「さあ……特に何も気付きませんでしたけど」
印象に残っていないということは、恐らく何も異常が無かったのだろう。どうせ後で確認することだ。剱さんがガスマスクを外すのを待って押鳥さんが歩き出した。
「こっちです」

＊　＊

給湯施設までじっとりと濡れたアスファルトが続いている。この天気にも関わらず、全く雪が積もっていないのは融雪装置の威力によるものだろう。
「この道、融雪装置を埋め込んであるんですか？」
剱さんが星美さんに聞く。星美さんは頷いた。
「元々、霧降荘は本館と別館北斗星、そして給湯施設の三つの建物からできていました。それぞれを結ぶ道には融雪装置を埋設してあります。ここの温泉のお湯をそのままパイプから流すんです。ほら、この小さい穴。分かりますか？」
星美さんがしゃがみ込んだ。剱さんも続く。俺と医学生コンビは背後から覗き込む。
「本当だ、穴から染み出している液体が温泉ですか？」
「ええ。当初は入浴用にだけ使うつもりだったんですが、いざ源泉採掘を始めると予想外に水蒸気の量が多かったんです。お風呂にするにも多すぎますし、かといって垂れ流しにして捨ててしまうのもあんまりです」
「それでこの融雪装置に転用することにしたんですか」
温泉をそのまま使うなんて、随分と贅沢な融雪装置だ。立ち上がった剱さんは少し渋い顔をしていた。
「この融雪装置は２４時間稼働しているんですか？」
「ええ」
剱さんは少し考えこみ、後ろを振り返る。
「あちらの別館へ続く道には融雪装置がなさそうですね。押鳥さん、写真を撮って下さい」

言われると、あちら側の別館へ続く道は雪が積もっている。足跡もいくつか見える。俺は言われるがままにシャッターを切った。

「あの別館金星、彗星、明星は霧降荘が完成した数年後に増築したものなんです。本当は融雪装置も延長したかったんですが、湧水の能力を超えてしまうので無理でした。地面を掘り返してパイプを新たに埋設するのも大変ですし。温泉を運ぶパイプは地表に引きました」

「新しく建てた別館に温泉を引けるくらいに給湯施設の処理能力には余裕があったんですね」

剱さんと星美さんの会話を聞いているうちに、問題の給湯施設の前に着いた。

「発見当時、鍵は閉まっていたんですか？」

「いえ、それが開いていたんですよ。深浦さんが鍵を差し込んでも開かないので釜田さんがそのままドアノブを回したら、そのままドアが開きました」

俺は死体を見つけた時のことを思い出す。

「そうですか……じゃあ、入りますか」

剱さんはそろそろとドアを開けた。そのまま先陣を切って中に入る。星美さんが電灯を点けると、白熱灯が室内を薄ぼんやりと照らし出した。剱さんは入口のドアノブに顔を寄せる。

「これ、内側から鍵はかけられないんですね」

「はい。中に閉じ籠る人もまずいませんし。防犯上、鍵は外からかけられるようにはなっています」

「普段、鍵はどこに？」

「厨房です。後は主人が合鍵を管理しているはずです」

「星美さん、ボイラーの操作盤はどこですか？」

「ここです」

俺は星美さん、剱さんの後に続く。薄緑色に塗装された操作盤には大川重工業のロゴが光っている。

「あら？」

星美さんが首をかしげた。

「どうかしましたか？」

俺と剱さんが操作盤に近寄る。

「水蒸気バルブが全開になっています。たぶんこれが、先程話した異常な操作ですね」

警報装置と換気扇は深浦さんが戻していたが、蒸気バルブには気付かなかった。

「押鳥さん、とりあえず写真を撮って下さい。……水蒸気バルブが全開とはどういうことですか？」

剱さんが怪訝な顔をしたのかどうかは部屋が薄暗くてよく分からなかった。俺は言われた通りに操作盤の写真を撮り、それを確認した星美さんがバルブを正常位置に戻した。

「実はここ、湧き出るのはお湯そのものではないんです。湧き出るのは水と、硫黄やメタンなどのガスを含んだ高温の水蒸気なんです。ざっくり言うと、その水蒸気を直接水にくぐらせて温泉にしているんです」

それって源泉かけ流しって言えるのだろうか？　……と思ったら、剱さんにしてみたらあっさりと納得できるような話だったようだ。

「カラ炊き、でしたっけ？　そういう温泉もたまにありますよね」

あるのか。

「水蒸気の量を調節するのがこのバルブです。ですが、ここの鉱泉ではバルブを全開にするほどの水量はないんです。半分近くバルブを開けたら霧降荘の全ての温泉施設、それに融雪装置は十分に稼働できます。それを全開にすると、水に溶け切らない硫化水素が出てきます。水に与える熱の量も増えるので、水温も高くなります。水量は一定ですので」

「ああ、それで今朝はお湯が熱かったのか……じゃあ、水に溶け切らなかった硫化水素がこの建屋の中に充満したってことですか？」

「たぶん……ですけど」

俺には苦手な分野だ。薬学生に解説を求める。

「ソニック君、硫化水素ってそんなにヤバいんですか？いや、ヤバいのは知ってるんだけど、どうヤバいのかよく分からなくて」

「引火性の猛毒です。めちゃめちゃざっくり言うと、空気中の硫化水素濃度が０．１％を超えると致死量と言われています。普通に温泉で嗅ぐような腐卵臭では、割合で表すのが馬鹿馬鹿しいほどに空気中の硫化水素濃度は低いです。もちろん人体に影響はありません」

「猛毒なんですね……」

想像以上にヤバい代物だった。俺は絶句した。

「硫化水素は水に溶ける性質があります。水の約３倍の体積を溶かすと飽和状態、つまり溶ける量が限界に達します。限界を超えると溶け残りが出ます。この機械でガスを限界まで溶かすとなれば、蒸気そのものを溶かそうとどんどん送り込むことになります」

「……そんなにたくさんの硫化水素が溶けたお湯ってヤバくないですか？」

「心配は要りません、押鳥さん。浴室は本館、別館問わず２４時間体制で換気扇が回っています」

星美さんの説明に俺はほっとした。ここからは榊原君が説明を引き継ぐ。

「この建屋は割と大きいので、溶け切らずに噴出した硫化水素が充満するのにそれなりに時間がかかるはずです。

一回呼吸して即死する濃度に達するまでなら尚更です。そこまでの濃度に達すると腐卵臭もしないので、吸い込んでも気付かないでしょうね。気付く前に死ぬでしょう」
一回呼吸して即死、しかも無臭……バケモノかよ。
「操作盤については何者かが故意に操作したと考えていいでしょうね。じゃあ、死体の方を見てみましょうか」
剱さんがボイラーの陰に向かう。
「押鳥さん、写真を。色々な角度から撮って下さい。誰かパソコンや、カメラのSDカードを読み取る機械を持っている人はいますか？」
「パソコンなら俺が持ってますが、どうしたんですか？」
ソニック君が答える。本当に何でも持ってるな。
「万一の不具合、あるいは犯人の仕業で写真データを消去されたら大変です。万一に備えて写真のバックアップを取っておきたいんですよ。パソコンへの取り込みが完了したらそこからケーブルを介して僕をはじめとした複数人のスマホに転送しましょう。そこまでデータをコピーしたら犯人も手出しはできません」
慎重にも程があるだろう。俺は少し呆れながら黙々と写真を撮る。室内が少し薄暗いため、ストロボが灯る。
「写真のバックアップは後で手伝ってもらいます。榊原君、ソニック君、簡単でいいので検死をお願いできますか？　死因、死亡推定時刻が分かれば上等です」
二人はおずおずと死体に近寄る。
「なあ、まっち？　俺は法医学の授業を取っていないから全然分からないんだが、死亡推定時刻ってどうやって割り出すんだ？」
「一番メジャーなのは直腸温で割り出すことらしい。でも、それはとても僕達には無理だ。道具が無い。精度はかなり落ちるけど、ここは生きている人間がやるように口に体温計を入れることで代用しよう。おばさん、体温計を持ってきて下さい」
「ええ、ちょっと待っててね」
星美さんが早足で建屋の外に消えた。
「見た感じ、誰かと争った形跡は無さそうですね。服装も乱れていませんし」
剱さんが俺の横から死体に目をやる。
「ソニック、まずは死斑から見よう。皆さん、スマホのライトを点けてくれませんか？　ここでは暗すぎます」
医学生コンビ以外の人がめいめいにスマホライトを点けた。橋立漣丈の哀れな最期がくっきりと浮かび上がる。医学生コンビは死体の前にしゃがみ込んだ。
「まずは死斑から見よう、ソニック」
「ああ……でも、そもそも死斑って何だ？　薬学の世界ではほとんど取り扱わないから詳しくは知らないんだが」
榊原君は少し頭の中を整理するように考えて、区切るように話し始めた。
「人は死ぬと血液循環が止まるだろ？　すると、体内の血液が重力によって引っ張られて、下になっている部分に溜まる。血液が滞留するところは皮膚の上からでも見えるよな？　それが死斑だよ。橋立おじさんの場合は壁にもたれかかるようにして亡くなっているから、下半身に死斑が出る。犯人が死体の姿勢を変えていなければ、という条件ではあるが、その心配もなさそうだな」
榊原君の説明で俺にも何となく理解できた。
「死斑の色によってある程度の死因が特定できることがある。血液中の成分、特にヘモグロビンが化学反応を起こして変色したら、当然死斑の色も変わるからな。その辺は薬学部でも習わなかったか？」
「化学反応、ですか？」
今度は理解が追いつかなかった。
「ええ。化学反応を起こす物質、事象が死因になっていることもしばしばあります……ソニック、どうだ？　分かりそうか？」
「ヘモグロビン反応による色素変化は習った記憶がある。行けるかも」
「よし、じゃあやるぞ」
二人は橋立さんのズボンをまくり上げる。
「足の部分を照らして下さい」
指示に従う。二人は素肌をそっと触り始めた。
「死斑は……赤紫色ってとこか。これは簡単じゃないな、ソニック？」
「赤紫色ってことは、ヘモグロビンの色素変化がほとんど起こっていないってことか……一番メジャーな死斑だけど、考えられる死因というと何だろう？」
「硫化水素による急性中毒ってことか？　それに伴う窒息死？　少なくとも慢性中毒ではないな」
「硫化物とヘモグロビンが反応すると緑褐色になるんだったよな、まっち？」
「もしくは緑色を帯びる暗赤褐色、だったはずだ。でも、硫化水素が全身の血液、ヘモグロビンと結合するのは少しずつ硫化ガスを吸い込んだ場合だから……慢性中毒か。ソニック、どう思う？　慢性中毒って死亡するまで３０分～６０分かかるんだが」
「この建物の大きさからすると、硫化水素が充満するのに結構時間がかかるはずだ。充満する前から建屋の中にいたら間違いなく慢性中毒による死斑が出る。それが無いってことは慢性中毒の線は薄いだろ」
何を言っているのかはよく分からないが、傍から聞いていると物凄く頼もしく聞こえる。

「はっきりしたことは断言できないが、死因は恐らく高濃度の硫化水素を吸い込んだことによる窒息死。死斑の色を見るとそこまで多くの硫化水素が体内に巡ったわけではなさそうだから、即死だったかもしれない」
「榊原君、ソニック君、体温計はこれでいい？」
星美さんが戻ってきた。手には白いデジタル体温計が握られている
「ええ、ありがとうございます。剱さん」
榊原君はお礼を言い、剱さんを呼ぶ。
「どうしました？」
「今から死亡推定時刻を調べますが、あくまでもこれは目安です。調べる僕達は素人ですし、調べ方も本来のものよりもずっとグダグダです。なので、結果はかなりガバガバになります。それは承知しておいて下さい」
「誤差が生じるということですね。どれくらいの誤差ですか？」
剱さんの垂れ目が榊原君を刺す。
「ええと……前後3時間は余裕を持ちたいです」
「分かりました。では、お願いします」
榊原君とソニック君は死体に向き直る。
「どうなるかな……」
榊原君は慎重な手つきで体温計を死体の口に差し込む。待つこと数十秒。鼓膜を切るような沈黙は体温計の電子音で破られた。
「出た。……31．3度」
榊原君はそっと体温計を口から引き抜き、デジタル表示を俺達に見せる。確かに31．3度だ。剱さんの視線に促されて写真を撮る。
「で？　この体温から死亡推定時刻って、どうやって割り出すんだ？」
ソニック君が榊原君の顔を覗き込む。イケメン二人、時と場所さえふさわしかったら絵になる光景だろうな、などとつまらないことを考えてしまった。
「条件によって大きく異なるから、はっきりとは分からない。基本的に春と秋の気温では1時間ごとに1度体温が下がる。夏場では2時間に1度だ。冬場は1時間に2度らしい。ここでは……剱さん、どう思いますか？　ここはボイラー室で、普通の外気温を基準にするのは……」
剱さんは少し考えこんだ。
「そう言われても、僕はその辺は素人なので……」
「……仕方ない。体温については後回しにするので、考えておいて下さい。死後硬直はどうだろう？　ソニック、手伝ってくれ」
榊原君はそう言って、橋立さんの死体をあちこち無遠慮に触り始めた。
「ほぼ全身かちかちになってるぞ、まっち」
「ってことは……仏谷教授の授業を基にすると死後半日前後は経ってることになるな。でも、犯人と取っ組み合ったりして死ぬ直前に体を激しく動かしていたら死後硬直はもっと早まるしな、死後8～12時間ってとこかな？　これも室温に左右されるから確たることは言えないけれど。次は角膜……あれ、この死体、目を閉じてる」
榊原君は橋立さんの瞼を開けようとしたが、少してこずった。死後硬直でうまく開かないのだろう。
「……いいや、角膜については諦めよう。どうせ閉じているからそこまで白濁も進行していないだろうし、参考になるかどうか微妙だ」
「他に何か死亡推定時刻を割り出す方法は無いのか？」
榊原君は何かを思い出すように額を押さえる。
「えーと……胃の中身はとても分からないしな、あ、死斑！　さっきの死斑、体の下半身に広く出てたよな？」
そう言われたソニック君は死体のズボンを捲し上げた。
「……ああ、かなり大きい。ほぼ満遍なく出てる」
榊原君はそっと死体のふくらはぎに触り、そして指を突き立てた。
「……何やってるんですか？」
「死斑の動きを見ているんです。死亡してから時間が経つにつれ、血液は凝固します。指で押して死斑の模様に変化がある場合、例えば死斑が動いたり薄くなったりした場合には、血液が凝固しきっておらず、まだ亡くなってからそこまで時間が経っていないということです」
俺の問いに早口で答えつつ、榊原君は調べを続ける。
「……触ってもゆすっても死斑に変化は出ないな。ということは、ええと……死後6～12時間くらいだ」
榊原君は改めて剱さんに向き直る。
「剱さん、死体の体温についてはどうしたらいいと思いますか？　素人の代表として意見を聞かせて下さい」
「冬場の温度にすべきか、それとも通常の室温にすべきか迷いました。……ここは通常の室温にしましょう。ボイラーがあるということは放熱によって室温がある程度上がるはずです。ですが、今は真冬なのでそれを差し引くと、通常の室温換算が妥当だと思います。あくまでも素人考えですが」
「素人なのはお互い様です。となると、1時間に1度、いやでも最初はもっと急に体温が下がるはずだから……」
そのまま榊原君は何事かぶつぶつと呟く。
「誤差が大きくて当てにならないことを前提に話しますが、体温から考えると死亡したのは約4～8時間前です。他の要因、死後硬直や死斑などから考えられる死亡時間は概ね6～12時間前です」

「それらが重なる時間帯、つまり6～8時間前が死亡推定時刻だと？」
　剱さんの眼光は鋭い。
「一番可能性が高いとしたら、それくらい……つまり、今が13時過ぎですから、今朝の5～7時くらいかと。条件を全て足し合わせて考えると、今から4～12時間前。つまり昨夜1時から今朝9時の間に殺されたことになります」
　剱さんは少し黙ったまま考え込む。
「……分かりました。後は目撃証言やアリバイ調べで絞り込みましょう。他に何か変なものや、変わったものはありませんか？　遺書みたいなものとか」
　剱さんの質問に星美さんが手を挙げた。
「あの、主人は合鍵を持ってここに入ったと思うんです。なので、どこかに合鍵があるはずです」
　星美さんの立ち合いのもと、剱さんが死体のポケットを調べていった。やがて小さな鍵が上着の外ポケットから出てきた。
「ええ、これです！　これが主人の持っている合鍵です」
「さっき話していたものですね。そうですか……分かりました。とりあえずこれくらいでいいでしょう。出ましょうか」
　剱さんは最後に、変わり果てた姿になった橋立さんの前にしゃがみ込んで手を合わせた。俺達も慌ててそれに倣い、そして外に出た。雪は忌々しくもぼたぼたと降り続いている。
「日が暮れるまでまだ時間があります。僕達も雪崩の様子を見に行きましょう」
「じゃあ私、温かい飲み物を用意してきます」
　しばらくしてから、俺達は医学生コンビの車に分乗して現場に向かうことにした。ガレージの横で、誰にも動かせない除雪車が雪の下に沈んでいた。

＊　　＊

　私達が雪崩に向かって儚い抵抗を試みていると、車の音が聞こえてきた。振り向くと速そうな車が二台、そろそろと近付いてきていた。
「ある程度の調べが終わったので応援に来ました」
　白い車からソニック君が出てきた。助手席から礼士さんも出てくる。除雪に勤しんでいた私はショベルを倒れないように雪に突き立て、駆け寄る。錆一つ無い真っ黒なショベルは突き立てるのに十分すぎる重さだった。
「どう？」
　礼士さんは私の背後、雪の壁に目をやる。
「とても駄目ね。人力じゃ埒が明かない」
「そっか……代わるよ。体を冷やしたら大変だ。橋立さんが温かい飲み物を持ってきたから、少し休んで」
「ありがとう。このショベル、鉄でできているみたいで重いのよ」
　見ると、星美さんが青い車から電気ポットを持ちながら降りてきた。
「熱い番茶を持ってきました」
　その声に釣られて他の面々も駆け寄ってきた。
「やあ、これはありがてえ」
　榊原君が車のトランクから湯飲みを出し、釜田さんがそれを配る。
「ハチくん、どうだったの？」
「ああ……立ち話もあれだし、夕食の時にでも話すよ。正直なところ、俺にもまだ整理がついていないんだ」
「お父さ……いえ、父はどうだったんですか？」
　美由さんが礼士さんに近寄る。
「素人の手だけでは分かることに限界がありました。事故なのか、自殺なのか、それとも殺人なのか。それについても判然としません」
　美由さんは険しい目を足元に伏せる。
「でも、分かったことが何もないわけではありませんよ。そんなに気を落とさないで下さい、先輩」
　榊原君のフォローにも美由さんは硬い表情のままだ。
「念のためですが、食事時にでも皆さんの行動を時系列順にまとめようと思っています。どの道警察からも聞かれますし、記憶が曖昧にならないうちにまとめることに意義はあります」
　私は礼士さんのぶんの番茶を受け取り、渡す。
「お、ありがとう」
　私も湯気が立ち上る番茶に口をつけようとした。雪が入り、茶色く溶けた。

第五章

　結局、礼士さん一行が援軍に来ても除雪はほとんど進まなかった。男手が増えたとはいえ、あれだけの量の雪を人力のみで掻き出すのは不可能だ。日暮れ頃、私達料理組は先に霧降荘に戻ることにした。他に星美さんが手伝いに、後は深浦さんが霧降荘の雪下ろしのために戻ることになった。雪の重みで建物が潰されたら洒落にならない。
　閉じ込められた今、問題になるのは食料だ。
「非常食はえーと、乾パンと水とサバ缶と……」
　星美さんが戸棚の奥から埃を被った段ボール箱を引っ

張り出した。
「まあ、長期戦になるとやべえしな。今ある食材も少し切り詰めて使うか。しかし、電気が止まらなくて本当に良かったぜ」
「非常用の発電機はありますし、万一の場合でも大丈夫ですよ。暖を取るなら温泉もありますし」
釜田さんはずっと星美さんの相手をしている。いきなり夫が亡くなったのだ。見た目には変わりなくおっとりと振舞っているが、憔悴しているのは明らかだ。
「美由さんも大丈夫ですかね……」
せりを刻む私の横で叶ちゃんが広間の方を振り向いた。舞茸をバラバラにする手は休めない。
「榊原君とソニック君がいるし、私達にできることは何もないわね。そっとしておきましょう」
今夜は予定通りきりたんぽ鍋だ。温かい鍋を囲めば重苦しい空気も多少はマシになるだろうか。
「雪崩、どうにかなりませんかね……」
私は首を横に振った。あれは人力だけではどうにもならない。美由さんや夏奈さんの強硬な主張により、陽が暮れても除雪作業は継続されていた。
「分からない……今夜も天気が悪そうね。これ以上雪が降らないといいんだけど」
深浦さんが屋根から雪を落としたのだろう、重い音がしてから窓がカタカタと揺れた。暗い窓に映り込むのは私の不安げな表情だけだった。

＊　＊

夕食の時間になった。今夜のメインはきりたんぽ鍋、おかずが少々。美味しそうではあるが、食欲はあまり湧かない。主を失った上座の椅子が否応にも現実を突きつける。
腹が鳴った。体は素直だ。
「どっこいしょ、あたたた……」
ショベルを手に雪崩に無駄な抵抗を試みた俺達は体中を痛めていた。もう若くない。少し体を動かしただけで筋肉が悲鳴を上げるのは当然のことだ。
「大丈夫、ハチくん？」
ナナちゃんが俺を心配そうに見た。ナナちゃん自身も相当疲れているはずだ。
「疲れた。ご飯食べたら寝る。ナナちゃんもきつかったろ？」
「まあね～……」
心身共に疲労困憊していた。一日の間に死人が出て、雪崩で閉じ込められ、助けも来ず、しまいには除雪で体を痛めつける。無茶苦茶だ。
「疲れただろ、食いな。飯を食わねえと生き残るもんも生き残れねえぜ。世の鉄則だ」
釜田さんが沈み切った空気を吹き飛ばそうときりたんぽ鍋を取り分け、各人に押し付ける。
「熱いぞ、気をつけろ」
俺にも取り分けてくれた。
「今日は料理に割く時間が無かったからこれと酒で勘弁してくれ。これで野菜もたんぱく質も炭水化物も全部取れる。すまんな。量はあるからたんと食え」
俺は手元の器の中身をしげしげと眺める。斜めに切ったちくわみたいな餅？　と鶏肉、糸こんにゃく、くたくたに煮込まれた野菜が入っている。
「きりたんぽって何なんですか？」
ソニック君が問う。事件に関係した話題を避けようとしているのだろう。彼も疲れた表情をしていた。
「切ったたんぽのことですね。棒に巻き付けた餅……というか、潰してくっつけたご飯ね。おはぎの中身に近いのかな？　これを囲炉裏に突き立てて焼いたものをたんぽって言うんですよ。それを斜め切りしてきりたんぽ」
大和さんが鶏肉を口に入れながら答える。そのきりたんぽは醤油だしで煮込まれて汁気を吸い、すっかりぶよぶよになっている。栄養素も偏りなく取れる上に老人や子供にも食べやすい、ある種の万能鍋かもしれない。
「除雪車はどうしますか？　今の戦力では話になりませんし、誰かが運転できたら……」
碓氷さんが口を開く。
「そういう碓氷さんは運転できないんですか？」
赤木さんが碓氷さんを突っつく。碓氷さんは苦い顔をして首を横に振る。
「私にできるならとうにやっています」
そりゃそうだ。赤木さんもそう言われて苦笑した。
「除雪車ですか、重心が高いので操縦が難しそうですね」
ソニック君の表情も浮かない。
「……駄目元で、自分が運転してみましょうか」
口を開いたのは深浦さんだった。
「りっくん……運転できるの？」
美由さんが怪訝そうな顔で婚約者を見る。
「分からない。でも、つべこべ言っている場合じゃないだろ。明日の朝イチでやりましょう」
ようやく明るい話題が出た。一同の表情がわずかに緩んだ。文字通りの百人力だ。俺は熱々の汁と一緒にしらたきを口に放り込む。
昨日とは打って変わって、今日の夕食は淡々と進むのか、それとも何か大きな動きがあるのか。でも俺はそんなことが気にならないくらいに疲れていた。今日はさっさと風呂に入って寝よう。

「皆さん」
案の定、一番動きを起こしそうな人が口を開いた。
「あまり気は進みませんが……皆さんが除雪に行っている間に色々調べて、判明したことをお伝えしようと思います」
剱さんはそう言い、鍋汁を一口啜った。彼の巨体は普通の雪かきの時には重宝しそうだが、あの雪崩の前には無力に等しい。
「過度に期待されても困るので、先に言っておきます。分かったことはあまり多くありません。まずは橋立さん。死因は硫化水素による急性中毒、これは状況からほぼ間違いないとのことです。死亡推定時刻は昨夜1時から今朝9時の間です」
「……いくら何でもそれじゃ長すぎますよ。何の役にも立たないじゃないですか」
大和さんが口を尖らせる。
「これには訳があるんです。僕とソニックでおじさんの遺体を調べたんですが、死亡推定時刻を割り出すのは普通の医学生の知識では厳しいのが実情です。法医学の授業で基礎的な知識は身についているとはいえ、経験がものを言う分野なので。よって、僕とソニックは慎重を期して複数の方法で死亡推定時刻を割り出すことにしました。誤差も含めてそれら複数の結果を合わせたところ、剱さんが今言ったような結果に落ち着きました」
そこから榊原君はかいつまんで死亡推定時刻割り出しの経緯を説明した。
「そっか。で、結局のところ一番可能性が高いのは何時頃？　検死の結果が被った時間帯が一番可能性が高いんでしょ？」
美由さんが榊原君に問う。気丈な人で、目はまだ赤いがもりもりと皿の中を空にしていく。
「今朝の5時から7時の間、といったところでしょう」
「だいぶ絞られましたね」
そう言う赤木さんの声は心なしか明るくない。
「ここからは僕から提案があります。警察の手間を省くことも目的に、皆さんのアリバイを調べようと思うんです。前もって時系列順に皆さんの行動をまとめていけば、何か分かるかもしれません」
剱さんはそう言い、自分の皿を空にする。美由さんがお代わりをし終えるのを待って鍋に向かう。頭脳労働と肉体労働を掛け持ちして疲れているのだろう。
「その前に剱さん、一つ確認したいことがあります」
声を上げたのはナナちゃんだ。
「さっきから死体の状況を説明してくれましたが、それ以前の大事なことが抜かっています。とどのつまり、これは事故なんですか？　それとも自殺なんですか？　それとも殺人なんですか？」
場の空気がずっしりと重くなった。
「剱さん……どう思いますか？」
俺もナナちゃんに加勢する。この辺は夫婦の呼吸だ。
剱さんは少し考えるように眼鏡をかけ直し、そして浅く息を吸った。
「殺人です」

＊　　＊

さっきまでの静けさとは打って変わって、礼士さんの一言に一同は騒然となった。
「剱、どういう意味だ？　説明しろ」
「殺人って、何か証拠はあるんですか？」
釜田さんと赤木さんが真っ先に噛みついた。
「そう言われましても、おいそれと納得できません。何か理由があるんですか？」
星美さんも畳みかける。私は不安げに礼士さんの横顔を見ることしかできない。
「証拠ですか……ええ、あります」
また一転して沈黙。礼士さんの穏やかな声色がよく響いた。
「まず、死体の発見された状況を説明します。少し長くなりますが」
礼士さんはきりたんぽを一口かじり、間を置く。
「死体が発見されたのは敷地の隅、給湯施設の中でした。鍵はかかっておらず、橋立さん自身が管理している合鍵が現場にはありました。橋立さんはそれを使って給湯施設建屋に入ったと考えるのが妥当です」
合鍵の話は初耳だ。押鳥さんがカメラを出して、写真を見せてくれた。
「死因となったのは硫化ガスを吸い込んだことによる急性中毒。医学生二人の話によると、高濃度の硫化ガスを一息吸い込んだだけで即死するそうです。しかも硫化ガスは高濃度になると腐卵臭がせず、無臭になるそうです」
「厄介ですね……」
深浦さんが合いの手を入れる。
「硫化ガスが発生した原因は、水蒸気バルブが全開になってガスが水に溶け切らなくなっていたことでした。この温泉はカラ炊きという方式を採用していて、地中から高温のガスを噴出させ、それを鉱泉に溶かして温泉にしているんです。温泉の方式としては珍しくないものだそうです。ですよね、星美さん？」
星美さんがこっくりと頷いた。
「鉱泉の量は限られているので、おのずと鉱泉に溶かすことができるガスの量も変わってきます。バルブを全開

にすると、鉱泉に溶け切らなかったガスが建屋の中に充満します。建屋の換気扇も警報装置も電源が切られていたので、橋立さんは建屋の中にガスが溜まっていることに気付かなかったでしょう」
「そのガスを吸って橋立さんは亡くなった、ってことですか？」
叶ちゃんの言葉に礼士さんは頷いた。
「でも、それで殺人と言い切るのはダメでしょ！」
美由さんが礼士さんに食って掛かる。
「おかしいのはここからなんですよ。事故、自殺、殺人の三つの可能性を順に検討してみましょう」
礼士さんは言葉を切る。
「まずは、事故。水蒸気バルブを全開にして、ガス警報器と換気扇の電源を切る……一つのスイッチだけ操作をミスした、というのなら事故の可能性が十分にあるでしょう。ですが、三つのスイッチ操作を同時に誤るでしょうか？　考えにくいです。よって事故の線は薄いです」
ということは、自殺か殺人か。
「次に自殺の可能性。現場には遺書がありませんでした。橋立さんはこの霧降荘を持てるような経済力を持っている人物です。死体のすぐそばに遺書が無いというのはおかしいのではないでしょうか？」
「部屋にあるんじゃないですか？　それか、弁護士の人か、秘書の赤木さんに預けているとか」
ソニック君が疑問を呈する。
「その可能性は否定できませんが、どうでしょうか？　赤木さん？」
礼士さんはテーブルの隅に座る赤木さんを見た。
「遺書の管理については、私は何も把握していません。弁護士の方に一任しております」
返事から得られることは少ない。
「そうですか……仮にここにあるとすれば橋立さんが前もって弁護士から持ってきた遺書、もしくは誰かが作成した偽物の遺書でしょう」
「その根拠は？」
深浦さんの問いかけは鋭い。私も同じ疑問を抱いた。
「これが自殺ではない、と判断する根拠があるからです。先程、榊原君とソニック君が調べてくれましたが、橋立さんの死因は硫化水素による急性中毒、おそらく即死だろうということでした。ここまではいいですね？　これが自殺だとすればおかしな点があるんです」
礼士さんは言葉を切り、お茶を飲む。今日はアルコールを摂っていない。
「建屋の中にガスが充満するには、それなりに時間がかかるはずです。橋立さんがガスを発生させるようなボイラー操作をして、そこで座して死を待つなら、橋立さんは慢性中毒によって亡くなるはずです」
慢性中毒……イマイチ何を言いたいのかが分からない。
「榊原君、硫化水素による急性中毒と慢性中毒の違いを説明して下さい」
「あ、はい」
榊原君は少し意表を突かれたようだ。慌てて箸を置き、一拍置いて話し始めた。
「急性中毒は高濃度の硫化水素を吸い込んで短時間で死亡、場合によっては即死することを指します。この時、体中に硫化水素は巡りません。硫化水素は血流に乗って体全体に巡りますが、そんな時間もなく血流が止まるからです。そのため、死斑……死体に出る痣のようなものですが、それは赤紫色になります。硫化水素が全身の血液に分散したヘモグロビンと反応する時間が無いので、血色の変化が起きないんです。赤紫色というのは一般的な死斑の色で、おじさんにも確認されました。押鳥さん、写真をお願いします」
押鳥さんがポチポチと愛機を操作し、写真を見せる。赤紫色のような模様が死人のふくらはぎに浮き出ているのが分かった。
「慢性中毒は、低濃度の硫化水素を比較的長時間、約３０分～６０分吸い込むことによって死亡するものです。この場合、血流に乗って体中に硫化水素が巡ります。硫化水素がヘモグロビンと結合して緑褐色に変化するので、死斑は緑褐色になるんです。しかし、今回の死斑は緑褐色ではありません。なのでおじさんの死因は慢性中毒ではない、と判断できます」
語り終えた榊原君はお茶に手を伸ばし、礼士さんが説明を引き継ぐ。
「橋立さんが硫化水素を発生させ、そこで死を待っていたとしたら？　建屋内に硫化水素が充満するには時間がかかります。そのため、一発で致死量の硫化水素を吸い込むことはできず、時間をかけて少量ずつ硫化水素を吸い込むことになります。つまり、橋立さんが自殺したと仮定したら死因は慢性中毒であるはずなんです」
でも、実際は急性中毒だった。
「ガスが溜まるまで外で待っていたんじゃねえか？」
釜田さんが問いかける。
「その可能性は確かに否定できません。なので自殺の可能性も僅かに残しておくつもりです。ですが、自殺するような人がわざわざ寒い屋外で３０分以上も待つでしょうか？」
「無いと思うわ。自殺は判断力の欠如により死への恐怖

が薄れていること、それに勢いが大きな要因を占める。そんなに長時間待っていたら、その間に正気を取り戻すはずよ」
　私は反対した。
「先輩、詳しいですね……」
　叶ちゃんの言葉は礼士さんの説明の続きに呑まれた。
「ですが、建屋内に致死量の硫化水素が溜まるまで３０分もかかりますかね？　榊原君の話では、３０分以上継続して硫化水素を吸い込むことで慢性中毒になるそうですね。しかしそれは、裏を返せば２０分とかで致死量の硫化水素が建屋内に蓄積すれば橋立さんの死因は急性中毒になるわけでしょう？」
　深浦さんの言葉に礼士さんは考え込む。
「言葉尻を捕えたら深浦さんの言うこともっともですが、実際の死斑はそこまで慢性と急性がくっきりと分かれるわけではありません。３０分以上吸い込むと慢性中毒扱い、というのも必ずしも普遍的な指標ではないんです。その辺は承知しておいて下さい」
　榊原君が補足説明を加える。それから礼士さんの方を向く。
「論より証拠です。実験してみたらどうですか？　もう一度建屋の換気扇を止め、発生するガスの量を最大化して、致死量に至るまでの時間を計測するんです」
　誰からも異論は出ず、早速実験することになった。ただし、致死量まで硫化水素濃度を高めるのは危険ということで、警報が鳴るまでにどれくらいの時間がかかるかを計測することになった。
「ここの警報はどれくらいの濃度の硫化水素を検知したら発報されるんですか？」
「ええと……致死量の半分ってこれには書いてあります」
　星美さんが警報装置の取扱説明書をめくりながら答える。長いことしまい込んであったのだろう、表紙は黄ばんで折れ曲がっている。
「ってことは単純計算で、警報が出るまでの倍の時間で致死量の濃度に達するわけだな。実際には既に空気中に硫化水素が漂っているからもう少し時間がかかるってとこか」
　釜田さんがそう言い、いの一番にガスマスクをつける。私達もガスマスクをつけつつ、給湯施設に向かう。死体を見たくなかった私は建屋を遠巻きに眺めるだけにしようかとも思ったが、礼士さんのそばを離れたくない。結局のこと建屋の内部に入った。
「瑞穂さん、ボイラーの陰は見ない方がいい。その……橋立さんがいるから」
　礼士さんは言葉を選びつつ私に忠告する。その横で星美さんと深浦さんがあまり慣れない手つきで操作をしていく。
「これでしばらく待ちましょう」
　操作が終わったようで、私達は本館に戻った。
　それから、２３分後。けたたましく警報が鳴った。
　すぐに給湯施設に向かい、操作を正常運転に戻し、建屋内を換気してガスを抜く。水蒸気が溜まっていたこともあって、建屋内は暖房をよく効かせたように暖かかった。
　本館へ戻る帰り道、礼士さんは浮かない顔をしている。
「どうしたの？　具合でも悪い？」
　私は小声で聞いた。礼士さんは小さく首を横に振った。
「いや、体調は大丈夫なんだけどね。警報が鳴った後に建屋に入った時、何か引っかかって……」
　そのまま思案顔で広間に戻り、礼士さんは再度説明をする。
「実験の結果、致死量に至るまでにかかる時間は単純に考えて４６分という結果になりました。実際はもう少しかかるでしょう。急性中毒と言い切るには長すぎます。これにより、自殺の可能性はほぼ無いだろうと僕は判断します。そうなると、残った可能性は一つです」
　礼士さんは一同を見回す。誰も、最後の可能性に言及しない。沈黙。
「橋立漣丈さんは、ここにいる何者かに殺されたという可能性です」
　礼士さんが沈黙を叩き割り、締めくくる。いや、火蓋を切ったのかもしれない。犯人との対決の火蓋を。

＊　　＊

　解剖実習で死体には人並み以上には慣れているが、さすがに今日のあれは精神的に堪えた。除雪も肉体的に堪えた。後はさっさとひと風呂浴びて眠りたかった。
　しかし、まだやることが残っていた。
「ここからは各人のアリバイを調べていきたいんです。そうすれば亡くなる前の橋立さんの動きや、犯人の炙り出しに繋がるかもしれません」
　剱さんの声は淡々と穏やかで、それでいて有無を言わせない芯がこもっている。
「その前に、駄目元で皆さんに聞きます。『橋立漣丈を殺したのは自分だ』という人は？」
　無言。
　沈黙。
　静寂。
「……やっぱり、答えるわけがありませんか」
　剱さんはため息交じりに言った。僕のように無実だから手を挙げない人がほとんどだろうが、わざと手を挙げ

ない人もいるのだろうか。殺人なのかどうか、という点に僕はまだ半信半疑だった。
「アリバイを調べる前に、一つ聞いていいですか？」
深浦さんが手を挙げた。
「あなたは橋立さんの死体の状況からこれは殺人だ、という結論を下しましたね？　ですが、その死体の状況判断は素人の医学生によるものです。榊原君とソニック君には申し訳ないが、どこまで信用に値するのか疑問です」
「殺人だと判断するには根拠が弱い、そう言いたいんですか？」
押鳥さんが逆に問いかけ、深浦さんが浅黒い顔を縦に振る。面と向かって素人呼ばわりされても腹は立たなかった。それだけ僕も不安だった。
「心配するのは分かります。かく言う僕も心配です。ですが深浦さん、先程の説明で事故死の可能性は無いということは分かってもらえましたか？」
あれだけのボイラー操作を単なるミスで片づけるのは無理がある。深浦さんもそこは同意するように頷いた。
「なら自殺か殺人か、となります。僕は殺人の可能性が濃厚だと考えていますが。殺人が穿った見方だという批判も分かります。ですが、これが殺人ではないと言い切ることは現状では不可能です」
可能性を否定できないと言ったらきりがないのが普通だが、この状況では殺人の可能性も十分考えられる。
「殺人だとしたら？　誰が、何のために事件を起こしたのか？　それが分からない現状において、どうやって大切な人を守るんですか？」
僕は悟った。表情からは窺い知れないが、そうか、剱さんも不安なのか。
「大切な人がいつ狙われるのか分からない今、僕達にできることは？　それは一刻も早く犯人を見つけることです。自殺と判明した場合、『犯人はいませんでした、お騒がせしてどうもすみません』……それで一件落着です」
「自殺か他殺か分からない今、用心して殺人を前提に話を進めよう……そう言いたいんですね？」
僕の言葉に剱さんは大きく頷いた。
「誰か、この方針に反対する人は？」
再びの無言。
再びの沈黙。
再びの静寂。
「では、改めて。皆さんのアリバイを見ていきましょう……と言っても、いきなり聞かれるのでは皆さんも不愉快でしょう。まずは僕自身のアリバイの有無を話していきたいと思います。皆さんも準備しておいて下さい」
剱さんは少し頭の中を整理するように黙り込み、そして語り始めた。
「昨夜、ここでの宴会がお開きになったのは0時頃ですよね、皆さん？」
僕達は一様に頷く。確かにそれくらいのはずだった。
「そこから僕は瑞穂さんと別館に引き上げ、それぞれ風呂に入り寝ました。翌朝、つまり今日ここに来たのは7時半頃だったかな？　橋立さんが亡くなったとされる最有力の時間帯、午前5～7時についてはアリバイはありませんね」
「私も礼士さんとずっと行動を共にしていましたが、アリバイにはならないでしょう。アリバイが無いのは私も同じです」
剱さんの横で、碓氷さんも付け加える。
「一応聞いておくが、二人が互いのアリバイを証明できるとしたらそれは何時頃だ？　今二人が話した時間帯、ずーっと二人とも寝てて意識が無かったわけじゃねえだろ？　起きてて互いのアリバイを一応は証明できる時間帯もあるはずだ」
「……瑞穂さん、何時から起きてた？」
釜田さんの問いにカップルは考え込む。
「昨夜は1時過ぎに寝て、目が覚めたのが6時くらいかしら……礼士さん、朝風呂に入ってたでしょ？」
「そうだね。僕は昨夜は先に寝ちゃったし、夜間の瑞穂さんの様子はよく分からない」
「……そういえば、剱さんは今朝『お風呂のお湯が熱かった』みたいなことを言っていましたよね？　僕も本館で朝風呂に入って熱かった、みたいなことを言ってたじゃないですか」
僕は今朝の会話を思い出す。
「榊原君、ええ、そうでしたね。硫黄の匂いが強烈だったとも。ボイラー操作によりお湯の温度が高くなった、と考えるとそれらの現象にも合点がいきます」
剱さんは座り直した。
「ここのお風呂はあのボイラーでお湯が一括で管理されています。なので、根幹のボイラーがいかれると本館、別館問わず全てのお風呂に異常をきたします。ボイラーでは、水蒸気バルブが全開になっていました。水蒸気を鉱泉に溶かして温泉にするカラ炊きシステムの温泉では、ガスを溶かせば溶かすほどガス内の熱も鉱泉に溶けて、結果として水温が上がることは想像がつきます」
「バルブを全開にしたから水温も高く、硫黄の匂いも強烈だったということですか？」
赤木さんの言葉が一番分かりやすい。
「そうです。その操作で鉱泉に溶け切らなかったガスで橋立さんは命を落としました。ここから、僕と瑞穂さん、

それに榊原君が犯人である可能性は低くなります」
いきなり容疑者圏外から外れる可能性が出てきたが、他の人の視線が少しきつい。僕は何もしていないから胸を張って身の潔白を主張すればいいだけなのだが。
「なぜですか？　自分だけ容疑者圏外に抜け駆けしようとしているんじゃないでしょうね？」
押鳥さんが剱さんを睨む。
「犯人はボイラーを操作して橋立さんを殺しています。その犯人が本館、別館の両方のお風呂に異常を発生させることは予期できたでしょう。元々は温泉用のボイラーをいじるわけですからね。そんな犯人が自分から温泉の異常を話題に出すようなことはしないでしょう。あと、僕と瑞穂さん、それに榊原君が共謀している線は論外です。そもそも僕達は初対面ですからね」
そう言われてしまうと反論できない。確かに、朝食の席で風呂の異常を話題にしたのは剱さんだ。
「でも、剱さん達には足跡があるのでいいですね」
先輩が皮肉っぽく言う。
「別館金星、彗星、明星、剱さん一行が泊っている建物の周辺には融雪装置があるので、給湯建屋に行く際に足跡が残る。でも、そのような足跡は無かった。だから私達は無実だ。どうせそう言いたいんじゃないですか？」
「ちょっと、美由……」
「まあまあ橋立、言わせておけ。気が立ってるんだから仕方ねえよ」
おばさんが慌てるが釜田さんがなだめる。
「美由さん。あなたの指摘は一理あります。確かに、僕達が泊っている別館から給湯施設に行くとすれば、給湯施設の方にまっすぐ足跡がついているでしょう。ですが、そのような足跡はありませんでした。押鳥さん、写真を」
カメラマン役の押鳥さんが剱さんの所に駆け寄る。カメラを操作して目的の写真を引っ張り出す。
「これがその写真です。各別館から出ている足跡は全て本館の方に向かっています」
「となると、俺達は無実か」
釜田さんの言葉に剱さんは渋い顔をした。
「事はそう単純ではありませんよ、釜田さん。僕達だって、本館を経由して行けば足跡を残すことなく給湯施設に向かうことができます」
気まずい沈黙が流れた。探偵一行は自ら容疑者圏内に留まったのだ。大和さんが消し炭のようになっている。
「そういえば榊原君、あなたが朝風呂に入ったのは何時頃ですか？」
唐突な話題転換に、一瞬自分に水が向けられたことに気付かなかった。
「えーと……夜はまだ明けていませんでしたね。６時過ぎくらいでしょうか？　あと、僕より先に本館の男湯に入った人はいないと思います」
「なるほど、僕と同じくらいですか。誰も入っていないというのは、どうしてそう思うんですか？」
僕は少し言葉に詰まった。感覚的にそう感じただけで、ちゃんとした理由を感じ取ったわけではない。納得できる理由に頭を振り絞る。
「あのー……そうだ、床のタイルです。僕が入った時はタイルが乾いていた記憶があります。誰かが直近に入ったなら、タイルが濡れているはずです」
嘘を言っているつもりはない。そもそも、僕は無実なのだから嘘を言う必要が無い。
「分かりました。……今の会話で、もう一つ。犯人がいつボイラーを操作したのかが絞り込めるかもしれません。星美さん、ここの温泉は源泉かけ流しですよね？」
「ええ。そうです。浴槽を洗う時とかのために源泉の流れを止められるようにはなっていますが。昨夜はずっとかけ流しにしていたはずです」
星美さんは言葉を選びながら返事をする。お湯を出しっぱなしにしているって、源泉を押さえているからこそのセレブ発言だ。
「本館の男湯のお湯が全て入れ替わるまで、どれくらいの時間がかかりますか？」
「だいぶ大きい浴槽なので……３０～４０分はかかりますね。それがどうかしたんですか？」
剱さんはすぐには答えず、考え込む。照明の光で若白髪が銀色に光った。
「榊原君がお湯の異常を認識するには、ある程度本来入っていた適温のお湯が熱いお湯に入れ替わる必要があります。榊原君がお風呂に入った時間を6時としてお湯の異常を察知したとすると、犯人は遅くとも5時半にはボイラー操作を終えたことになります」
たかがお風呂に入ったくらいでここまで情報を引き出せるのか。
「榊原君より前に温泉に入ったという人は？　本館、別館、男湯、女湯の別を問いません」
どうやら探偵は風呂に的を絞って話を進めることにしたようだ。
「部屋の風呂になら入りましたね」
声を上げたのは深浦さんだった。
「部屋の風呂……本館には各個室に風呂があるのか？」
釜田さんの糸目が星美さんを見た。言われてみれば、僕とソニックにあてがわれた部屋にも浴室があった。

「深浦さん、風呂に入ったのは何時くらいですか？」
「４時半時に目覚ましをかけて、眠気覚ましに入ったので。たぶん４時４０分とかだったと思います」
「そんな朝早くから何をしていたの、りっくん？」
婚約者も興味を惹かれたようだ。
「仕事です。取引先との時差があったので、朝早くからのオンライン会議でした。風呂を出たのは5時前だったんですが、その、窓の外に変なものが見えたんです。寝る前も窓の外に何か見えたみたいな気がして、疲れているんだと思って寝たんですが……」
「変なもの？　二回も？」
剱さんが深浦さんの方に向き直る。
「ええ。人影のような……いや、今考え直してみると、あれは間違いなく人影でした。誰かが給湯施設の方に向かって歩いていたんです」
穏やかな顔を崩さなかった剱さんも、これには驚きの表情を見せた。
「人影って、どんな？」
深浦さんは少し考え、そして答えた。
「一回目は女の人のように見えました。もう一回は確か、太めの男性だったと思います。……橋立さんじゃないでしょうか」

＊　　＊

深浦さんの発言が場の空気を揺らした。この証言が本当なら、橋立さんが給湯施設内に入って亡くなったのは5時以降ということになる。いやそれ以上に、深浦さんは犯人の姿を見たのかもしれないのだ。
「どうしてそれをもっと早く言わないんですか！」
「すみません……その時は目の錯覚か何かだろうと思って深く考えませんでしたし、橋立さんが亡くなったショックですっかり失念していました」
大和さんの文句に弁明する。そういえば、橋立さんの死体を見つけた時は俺も深浦さんと一緒だった。
「本当にそれは橋立さんの姿だったんですか？」
「……あの太り具合は、他に心当たりがありません」
俺はそっと周りを見回す。橋立さんはかなりの肥満体だった。剱さんは骨格が大きすぎるし、医学生コンビはスリムすぎて見間違うことはない。釜田さんは痩せ型の男で、これも却下。深浦さんは体型は中肉中背、俺は大型ではあるが、橋立さんのようにメタボではない。いずれも却下。というか俺はその時間にナナちゃんと一緒に寝ていたから、まず見間違われるはずは無いが。
「体格以外に、橋立さんだと思う根拠は？」
俺は深浦さんに質問する。
「……髪型、でしょうか？　女の人のように伸ばしたものではありませんでした。なのでここにいる女性陣はみんな違います」
また俺は周りを見回す。橋立さんは禿頭だった。ナナちゃんはセミロング、美由さんはサイドテール、大和さんはポニーテール、碓氷さんはショートヘア、星美さんと赤木さんがロングヘアだ。どんなに目が悪くても禿頭と見間違うことはあるまい。
「仮に深浦さんの証言が事実だとしたら、橋立さんは何者かに呼び出されて給湯施設に向かい、建屋内に充満していたガスを吸って即死。死体に目立った外傷が無かったことや、死因が急性中毒だったこととも一致しますね」
ナナちゃんが冴えたことを言う。
「誰かに呼び出されたのならメールや電話履歴を……いや、直接口頭で呼び出すのが返って足がつかずに安全ですか。履歴を探しても無駄かもしれませんね」
ソニック君の考えに一つ頷いて、剱さんは話を進める。
「それからお風呂に入って、どうでした？」
「……言われてみれば、昨夜に医学生の二人と入った時よりは熱かったような気もします。でも、そこまでちゃんと覚えているかと言われると……部屋の風呂なので、大浴場とかよりも環境が違うのかな、って思って気に留めなかったのかもしれません。元来、熱めの風呂が好きなのが災いしたんでしょうか」
確たる証言は得られないが、剱さんは穏やかな表情のままで顔色を変えない。まあ、そこまで注意することでも無いかもしれない。
「深浦さんの言葉を裏付けられる人はいますか？　橋立さんらしき人物を見た、とか、深浦さんがお風呂に入っている音を聞いた、とか」
テーブルの隅で赤木さんが手を挙げた。
「深浦さんが5時以降に起きていたのは恐らく本当のことです。私は今朝、5時半くらいにお手洗いに行ったんですが、深浦さんの部屋のドアから灯りが漏れているのを見かけました。そこから部屋に戻って二度寝して、起きたのは6時半くらいでしたが……」
剱さんは難しい顔をして眼鏡をずり上げた。部屋に灯りが点いていた、というだけで深浦さんの姿を見たわけではない。灯りを点けたままで部屋にいない、ということも十分可能だ。先の榊原君の証言と同じだ。
「この建物は客室の防音はしっかりしているので、部屋の中の物音には気づきにくいかもしれません」
星美さんが赤木さんを擁護するような発言をする。
「現段階では深浦さんの話の真偽は分かりませんね。いや、本当のことを話していると思いたいんですが」
聞き込みは続く。長丁場になりそうだ。

「寝る前に見た人影というのは？」
　剱さんが話題を変えた。
「何時頃ですか？」
「ええと……2時前、かな？　ちょうど会社の部下に仕事資料をメールした時だったので、その時間を見れば分かるはずです」
「メールしたって……ここは電波が届かないじゃないですか」
　大和さんの噛みつきにソニック君が反論する。
「大和さん、電波が届かないのは雪崩で基地局がやられたからです。昨夜の時点で電波はまだ生きていましたよ」
「あ、そっか。勘違いしてすみません」
「深浦さん、そのメールはパソコンでしたんですよね？　一応履歴を見たいので見せてくれませんか？　送信時刻を見たいだけなので、書類の中身は見せなくていいです」
「はい。ちょっと待ってて下さい。持ってきます」
　そう言って深浦さんは足早に広間を出る。俺の横で榊原君が手を挙げた。
「どうしました？」
「ええと……赤木さんの発言と似たような内容になるんですが、僕は昨夜1時半頃にトイレに行きまして。深浦さんの部屋は僕達の部屋の向かい側なんですが、その時にも部屋に灯りが点いていました」
　似たような、というかほぼそっくりな発言だ。深浦さんと初対面の人が言うだけ、信憑性は高いかもしれない。
「そうですか……まあ、灯りを点けっぱなしにしておいて部屋を空けることはできますからね」
　剱さんはどうやら半信半疑のようだ。
「お待たせしました。これが送信履歴です」
　小型のノートパソコンを開き、剱さんに見せる。
「1時47分ですか……オンライン会議の履歴の方も見せてくれませんか？」
「ええ。えーと、履歴はどこだ……？」
　少し手こずりながらも、やがて履歴を引っ張り出した。
「5時きっかりに開始して、7時20分までですか。さっきの送信履歴と合わせて、証拠として写真を撮ってもいいですか？」
「本来は御免こうむりますが、今回は事情が事情です。いいですよ」
　剱さんはお礼を言い、俺を呼ぶ。俺は愛機を手に馳せ参じた。それにしても、この人は5～7時という最有力の死亡推定時刻にアリバイがあることになる。
「じゃあ、撮りますね……ええと、あれ？」
　カメラがバグったようで、過去に撮った写真のスライドショーが始まってしまった。
「すみません、すぐに直しますから」
　剱さんの目が一枚の写真に留まった。
「押鳥さん、今の写真は？」
「へ？」
　俺はカメラの電源を落とし、再度入れ直す。今度は正常に動いた。
「本館の夜の姿を捉えた写真があったじゃないですか。見せてくれませんか？」
「そんなの撮ったか……？」
　酔っていて覚えていないのかもしれないが、フォルダを探すと確かにあった。
「これ、撮ったのが昨夜の……2時4分ですか」
　どうやらそのようだ。俺の部屋の電気を消した後に撮ったようで、本館二階には灯りの点いた部屋も見える。
「これは自分の部屋ですね」
　横から覗き込んだ深浦さんが言った。図らずも、2時頃に深浦さんが在室していた可能性を指摘するものになった。俺はパソコンの画面に焦点を合わせ、シャッターを切る。
「でも、2時頃に何者かの姿を見たという深浦さんの証言が事実なら、犯人はまだ幸いでしたね。少しでもタイミングを間違えたら、このカメラでばっちりと犯行の瞬間を撮られていましたよ」
　大和さんの言葉を聞いて俺は忸怩たる思いに捕らわれた。もう少しタイミングをずらしていたら、ここで犯人を明らかにできたのかもしれない。
「それで、2時頃に見たという人影はどんな姿でしたか？」
　剱さんが話を戻し、核心に触れた。そうだ、まだ深浦さんの証言を最後まで聞いていなかった。場合によっては一気に容疑者を絞り込めるかもしれない。
「……ロングヘア、だったと思います」

＊　　＊

　ロングヘア……ってことは！？
　私の目線は二人に向けられた。
「深浦さんが言う髪型に該当するのは橋立星美さん、それに赤木さんの二人ですね。鬘などを使えば話は変わってきますが、そもそも夜中に人目を忍んで行動している犯人がわざわざ変装するとは考えにくいですね」
　礼士さんは声の調子を変えずに、穏やかに話を進める。
「一応、ポニーテールの大和さんと、それからサイドテールの美由さん。念のために髪をほどいてみてくれませんか？」
　二人は何も言わず、髪を解く。いずれもせいぜいセミロング程度の髪の長さで、とても腰に届くようなロング

ヘアに見間違えるような長さではない。
「ありがとう、もういいですよ。……本当にロングヘアの人だったんですね？　今の二人のようなセミロングではなく？」
「え、ええ。雪女みたいな……」
雪女、ねぇ。
「……他に手がかりが無い現状、とりあえず深浦さんの話を前提にして話を進めましょう。星美さん、あなたの昨夜の行動を教えてくれませんか？　特に、深浦さんが言う午前二時頃を中心に」
星美さんは少し困ったように眉根を寄せた。
「そう言われましても……昨夜はここでの宴会がお開きになった後、部屋でお風呂を済ませてすぐに寝てしまったので。1時前には既に夢の中でした」
「部屋には誰かいませんか？　夫の橋立さんとか……」
「いえ、夫は別室です。仕事で夜遅いこともあるので。美由が同じ部屋ですが、家族同士の証言はアリバイにはならないんですよね？」
「ええ、残念ながら」
礼士さんは重々しく頷く。
「起きたのは何時くらいですか？」
「朝まで熟睡した後、起きたのは7時頃でしょうか？」
話は美由さんに移った。
「美由さん、あなたはお母さんと同室だそうですね？どうですか、何かおかしな点はありますか？」
「いや……無いと思います。あたしは昨夜、赤木さんとそこの大浴場に入った後で寝たんですが、それが0時40分くらいでした。その時には母が部屋の風呂から上がって、寝支度をしているところでした。あたしが起きたのは7時半頃でしたが、母の姿はありませんでした」
「確か、その時間なら俺を手伝ってくれてたぜ。な、橋立？　7時過ぎには起きてきて、そのまま食事の時間までずっと一緒だった」
釜田さんが助け舟を出した。でも残念なことに、時間帯から考えるとあまり助けになっていない。
「ええ。さすがに何も手伝わないのは気が引けたので。久しぶりに会って積もる話もありますし」
手伝わないのは気が引けるとは、見上げた精神の持ち主だ。同じ時間帯に私が何をやっていたかを思い返すと……僅かに頬が赤くなった。
「赤木さんの行動はどうですか？」
美由さんが少し苛ついたような声で話題を強引に変えた。どうもこの人、赤木さんのことを嫌っているようだ。
「私ですか」
当の赤木さんは少し疲れたような面持ちで、ロングヘアを掻き上げた。
「昨夜は美由さんとそこの女湯に入りましたね。碓氷さんに大和さんが先客でしたけれど」
いきなり話を振られて少し面食らったが、叶ちゃんが頷いた。
「そうでしたね。何か揉めているみたいでしたけれど、あれ何だったんですか？」
藪をつついて蛇を出す、とはこのことか。赤木さんの表情が少し渋くなった。
「揉めていた？　……差し支えなければ後で聞かせてもらいます。まずは昨夜の行動を教えて下さい。風呂から出て、それからどうしましたか？」
「寝ました」
実にシンプルな回答だ。アリバイも何も無い。
「そうですか……厨房に給湯施設の鍵があるので、犯人はそれを使って建屋に入り、ボイラーを操作したと考えるのが妥当です。昨晩、厨房に出入りした人影を見たという人は？」
誰もいなかった。
「では、昨夜最後まで厨房にいたのは？」
釜田さんが手を挙げた。
「俺だ。食器の後片づけに1時半くらいまでいたが、誰も出入りしなかったぞ」
「鍵を取ろうと厨房に出入りするにはこの食堂か、もしくは勝手口から入るかです。あるいは、橋立さんが持っていた合鍵をどうにかして入手したのかもしれませんが」
礼士さんは脱線しかけた話を戻す。
「それで、赤木さん？　そこからどうしました？」
「起きたのは6時半くらいでした。起き抜けに二、三の仕事をパソコンで片付けたので、履歴を見せましょう」
赤木さんはそう言い、礼士さんが頼む前にパソコンを取りに行った。それにしても、なんでここの人はみんな朝から仕事仕事なんだろう。
赤木さんは程なくして戻ってきた。さっきの深浦さんと同じ要領で履歴を確認し、押鳥さんが写真を撮る。
「朝からお仕事ですか、こんな別荘に来ても休まりませんね」
夏奈さんの声かけに赤木さんは微笑む。
「場所を変えて仕事をするだけでも十分な気分転換になりますので」
私は得られた情報を整理する。深浦さんの証言によると、給湯施設に向かう人影が見えたのは2時前。ロングヘアの姿ということは星美さんか赤木さん。双方共にアリバイは無し。……どっちも怪しく見える。
「履歴で思い出しましたが、それこそボイラー操作の履

歴って分からないんですか？　それを調べたら犯人の行動が丸分かりだと思いますが」
榊原君が思いついたように疑問を呈するが、星美さんがそれをあっけなく否定した。
「ボイラーと言っても営業用じゃなくてもっと簡素なものなので、履歴記録の機能は無いです」
こんな立派な別荘を賄うくせに、意外としょぼいボイラーだ。警報装置も簡単にスイッチを切れるものだし、安全装置みたいなものもない。履歴すら分からないとは。
「皆さん、一つ質問があります。亡くなられた橋立さんは合鍵を持っていたということですが、それを前もって知っていた人は？」
礼士さんの質問に手を挙げたのは3人。星美さんに赤木さん、それに深浦さんだ。
「美由さん、あなたは知らなかったんですね？」
彼女は黙ったまま首を振る。
「犯人は厨房に置かれた鍵か、あるいは橋立さんが持っていた合鍵を使ってボイラー建屋に入ったと考えられますね」
ソニック君が声を上げる。
「ああ、そうだな。だが、俺達がここに来る前に橋立一家と赤木はここに来ていた。俺達が知らないうちに厨房にある鍵を手に入れることは可能じゃねえのか？　何時何分に誰が厨房に出入りしたかなんて、いちいち覚えちゃいねえだろ。誰がいつ鍵を手に入れたか、を考えるのはあまり意味があるとは思えねえ。誰にでもチャンスがあったんだからな」
釜田さんの言葉にみんな黙ってしまった。
「……ここはもっと情報を集めましょう。まだアリバイを話していない人はどれくらいいますか？」
とりあえずアリバイ調べを進めることにしたようだ。釜田さんに叶ちゃん、医学生コンビ、それに押鳥夫妻が手を挙げた。
「まだこんなにいるのか……」
礼士さんは私にだけ聞こえるようにげんなりと呟いた。
「……頑張って」
私は小声でエールを送った。

第六章

正直なところ、残りの人のアリバイを洗って得られたものはそう多くなかった。釜田さんの証言は僕が大浴場で朝風呂を浴びたことを一応は証明してくれた。僕とソニックは深浦さんと風呂場で一緒になったことを話した後、ろくに話すことは無かった。大和さんは何も知らぬ存ぜぬで押し通した。押鳥夫妻は酔い潰れて何も覚えていない奥さんに、それを介抱するので精一杯の旦那さんと、何の役にも立たなかった。確かなことを一つ挙げるとすれば、あそこまでべろんべろんに酔った夏奈さんに犯行はどう考えても不可能だということくらいだ。
現状において、『犯行ができるかどうか』だけで考えるとおばさんも赤木さんも同じくらい怪しい。でもこの考えには大事な要素が抜け落ちている。動機だ。
そんなことを考えていると、剱さんも同じことを言いだした。
「アリバイもそうですが、殺人においては動機も重要です。何か橋立さんとトラブルがあったりした人、もしくは何か心当たりがある人はいませんか？」
釜田さんが食器を下げる音が響くだけで、答える人はいない。どこから話せばいいのか迷っているのか、それとも答えると都合が悪い人がいるのか……？
剱さんはゆっくりと一同を見回し、そして続ける。
「美由さん、それに赤木さん。昨夜、風呂場で揉めていたと聞きましたが……差し支えなければ話してもらえませんか？」
ソニックの隣に座る先輩の顔が強張った。
「……赤木さんに、お父さ……いえ、父から手を引けって言ったんです」
先輩がいつになく低い声で言った。
「手を引け、とは？」
「……不倫です。恐らく」
先輩の顔が苦虫を噛み潰したように歪む。剱さんの垂れ目がその表情を捉えた。
「赤木さんが橋立さんと不倫関係にあった。そう言いたいんですか？」
先輩は硬い動きで頷いた。糾弾された赤木さんの表情は何かを押し殺しているかのように冷たい。
「赤木さんが父の秘書になってから、急に父が家を空ける日が増えたんです。父が取締役になってから多忙だったのは知っていますが、赤木さんが来てから余計に多忙を極めるようになったんです」
「……でも、それは本当に仕事が忙しかったからではないんですか？」
剱さんが念を押す。
「勘……かな。怪しいと思ったんです」
「勘ですか……それだけで赤木さんに揉め事を吹っ掛けるのは、大人の僕からすればどうかと思いますよ」
「揉め事を吹っ掛けた？　違う、鎌をかけたんです」

先輩は剱さんに口を挟ませず、そのまま続ける。
「昨日、あたしは赤木さんを風呂に誘いました。そして言ったんです。『お父さんから手を引け』って。そしたらこの人、『橋立さんとはふしだらな関係にはない』って言ったんですよ。おかしいでしょう？　手を引く、という言葉には色々と捉えようがあります。なのに何でこの女は『ふしだらな関係』って言ったんですか？」
　これが誘導尋問なのか？　ここではあまりふさわしくないかもしれないが、何というか……やるな、先輩。
「でも、娘のあなたが気が付いて、妻である星美さん、あなたが気付かないはずがないと思いますが。その辺はどうなんですか、星美さん？」
　剱さんは娘から母親に話を振った。
「……正直、疑う気持ちが全く無かったとは言いません。赤木さんが夫の秘書になってから、夫は忙しくなりました。でも、本当に多忙になっただけなのかもしれないとも考えました。そこにお座りの押鳥夫妻が勤めていらっしゃる亀井衛生工業さんとも、赤木さんが来てから関係ができた会社ですし……秘書の腕が良くて本当に仕事が増えたのかも、と考えていました。それに、仮に不倫関係にあったとして、赤木さんから夫に仕掛けたとはあまり思えないんです。赤木さんはまだ若くてきれいですし、何も既婚者に手を出さなくても良縁に巡り合えるかな、って。夫には財産はあるでしょうけれど、それ以上に若い女性からすれば魅力があるとは……」
　あの禿頭に太鼓腹……正直、魅力のある相手かと言われたら返事に困る。赤木さんの表情は険しいままで変わらない。
「では聞きましょう。赤木さん、下衆なことを聞きますが実際はどうなんですか？」
　赤木さんは、父に先立たれた母子を見比べた。
「確かに、私は橋立様と不倫関係にありました。認めます」
　先輩の顔に血が上り、椅子を蹴って立ち上がる。
「あんた！　まさかお父さんを……」
「ですが」
　赤木さんは冷たい声で先輩を制した。
「向こうに言い寄られて、それで渋々応じたんです。私から始めたものではありません」
　赤木さんは不快そうな顔で吐き捨て、二人に頭を下げた。ロングヘアがうねった。

＊　　＊

　美由さんは後輩の医学生コンビになだめられて、渋々と椅子を直して座った。その吊り上がった目はじりじりと赤木さんを睨み続けている。
「向こうから求められた、ということは、不本意ながらも不倫に合意した……そういう解釈でいいですか？」
　剱さんの声はやはり穏やかだ。まだ若そうに見えるが、俺よりも年上なんじゃないかと錯覚してしまう。
「はい。私が橋立様の秘書になってから、私の体を求めてくるまでにはそう時間はありませんでした」
「断れなかった、というのはなぜですか？」
　この声は剱さんではなかった。
「お母さん……」
　星美さんは、娘の不満げな声に耳を貸さない。
「何か訳があるんですよね？」
「……代わりはいる、と」
　彼女はそれ以上多くを語ろうとしない。だが、その一言から察することは容易だ。求めに応じなければクビにする、とでもほのめかされたのだろう。大企業の取締役の秘書となると給料もなかなかだ。簡単に捨てられるものではなかったのかもしれない。
「なぜ話してくれなかったんですか？」
　星美さんがおっとりとした声のまま続ける。
「……愚問でしたね。話したら赤木さんもタダでは済まない、といったところでしょうか」
　赤木さんは小さく頷き、語る。
「お二人には感づかれてしまっていたようですね……黙っていて申し訳ありませんでした」
　空気が重い。赤木さんの表情は硬いが、美由さんは少しばつが悪そうな顔をしている。
「……話をまとめますが、星美さん、あなたは橋立さんが赤木さんと不倫関係にあったことにはそこまで感づいていなかった、ということでいいですか？」
　剱さんが重い空気をかき混ぜる。
「ええ」
「赤木さんからすれば、不倫は今の立場を人質に取られた不本意な関係だったと？」
「はい」
　剱さんは頬をぽりぽりと掻いた。
「赤木さんにもある程度の動機はありそうですね。……話は変わりますが、橋立さんが亡くなった場合の遺産の取り扱いはどうなるんですか？」
　ずけずけとした質問にさすがに橋立一家は苦笑した。
「当分死ぬ予定の無かった人なので、遺言状を書き換えたりはしていないと思います。順当に行けば妻である私に半分、娘の美由や夫の親戚に等分、といったところです。ただ、娘である美由が結婚した場合、もしくは婚約者がいる場合はその人にもある程度の遺産が配分されるようになっているはずです」

「つまり、僕にも多少の遺産が配分されるということになりますね」
赤木さんの説明に深浦さんが付け加えた。
「では、今すぐに遺産が必要な状況にある人はいますか？　経済的に危ない人とか」
誰も手を挙げなかった。
「他に動機……何か思い当たるものはありますか？」
これもまた、誰も手を挙げない。
「では、この話題は一旦保留にしておきましょう。押鳥さん」
剱さんが俺に水を向けた。
「亀井衛生工業とスペーシア製薬の間で、何かいざこざはありませんでしたか？」
この質問に俺は困り果てた。そもそも亀井衛生工業なんてでたらめ、探偵業ということを隠すためにとってつけた設定に過ぎない。本当のことを話すにも、依頼主の赤木さんの許可が無いとどうにもならない。
「榊原君とソニック君は橋立さんと面識は無いと思いますが、何かトラブルは無かったんですか？」
医学生コンビに話題を振っている隙を突き、剱さんに悟られないように赤木さんの方を見た。小さく首を横に振られた。まだ自分の正体をばらすな、ということのようだ。
「……俺の方で、特に何かトラブルがあった話は聞きませんね。そもそも、関係が悪化している企業の人をプライベートで別荘に招くとは考えにくいでしょう」
俺はあくまで亀井衛生工業の人間として答えた。
「まあ、それもそうですね」
剱さんはあっさりと納得してくれたみたいで、少し気が緩まった。
「僕達も先輩に誘われてここにお邪魔しているだけなので、トラブル云々は皆無です。第一、おじさんとは今回が初対面です」
「なるほど。それにしても、亀井衛生工業の方々など橋立さんの仕事上の付き合いの人もいるのに、よくここへ招待することを許しましたね。部外者の僕が言うのもアレですが」
言われてみれば、ここの集まりは大人が多い。学生が参加するようなものとは少し考えにくい。
「あたしが呼んだんです。雪山レースがしたいという話は以前から聞いていたので。親も、りっくんも賛成してくれて。法医学の授業の話をしたら興味が出たみたいで」
美由さんの答えには屈託が無い。俺とナナちゃんは論外として、榊原君とソニック君にも動機は無さそうだ。
「深浦さんはどうですか？　元リバティ薬科工業の人間として、橋立さんに何かしらの反感を抱いていたということはありませんか？」
彼は浅黒い顔を振った。
「終わった話です。確かに、割り切れないものがあることは認めますが、それだけで人殺しはしませんよ。むしろ、橋立さんの会社に入ってから状況は好転しました」
収穫は無さそうだ。
「釜田さんや大和さんには何もないと思いますが、一応聞いておきます。何か橋立さんといさかいがあったりしたことはありますか？」
あるわけが無かった。大和さんはそもそも初対面のようだ。釜田さんは星美さんとは顔なじみのようだが、殺された橋立さんとの関係性は無さそうだ。
剱さんもいよいよ質問が尽きたのだろう、長かった夕食はようやくお開きになった。合鍵は剱さんが一晩預かることになった。

＊　＊

夕食が終わった後、剱さんは念のために橋立さんのメールや通話履歴を調べてみた。赤木さんの協力を得てあれこれ調べたものの、徒労に終わったようだ。調べものが済んでから剱さんは押鳥さんとソニックに声をかけた。昼間に話していた写真データのコピーに取り掛かるようだ。僕達の部屋で作業することになった。
「お邪魔します」
剱さんは部屋に入ると、窓に目をやった。
「ここからも給湯施設に続く道が見えるんですね」
「そうですね。寝るときはカーテンを閉めていたので、何も見ていませんけれど」
僕は窓を開け、雪の積もったバルコニーに出た。夜の冷たい空気が部屋を支配する。
「まっち、寒いから閉めてくれ」
「ああ、ソニック。すまない」
僕は窓を閉めようとしたが、剱さんもバルコニーに出てくるのを待たなければならなかった。
「何か気付いたことでもありましたか？」
剱さんは一回り辺りを見回して、静かに首を横に振る。
「あそこの道に融雪装置があるのはやっぱり痛いですね」
「融雪装置？」
話が読めない。
「あそこの道に雪が積もっていたら足跡が残って有力な手掛かりになったのかもしれないんですが」
「足跡ですか。ミステリではありそうな展開ですね」
ミステリには明るくないが、いつだったか探偵ものの映画で足跡が取り上げられていた気がする。
「あっ」

剱さんが小さく声を上げた。何かに気付いたのかと思ったが、全く別のことだった。
「明日雪下ろしをしないと」
「雪下ろし？　ああ、それなら深浦さんがやってくれましたよ。陽が暮れる前に」
「えっ？　……ああ、そうでしたっけ？」
探偵は驚いたように屋根を見上げる。氷柱も雪塊も無い、のっぺりとした屋根が僕達の方に傾斜を向けているだけだ。
「本当だ、いつの間に……？」
手先が冷えてきた僕は剱さんを置いて部屋に戻った。部屋ではソニックがパソコンとにらめっこしていて、ＳＤカードを預けた押鳥さんが所在無げに突っ立っている。
「座りますか？」
「え？　ああ、ありがとう」
どっこいしょ、とベッドの端に腰を下ろした。
「明日も重労働になりそうですね」
「本当、参りますよ」
儀礼的に会話を始めたが、どうも続かない。この人が犯人なのかもしれないし、向こうも同じことを僕に対して思っているのかもしれない。
「押鳥さん、データのコピー終わりましたよ」
ソニックの声に押鳥さんは立ち上がった。僕もバルコニーにいる剱さんを呼びに向かう。
「こちら、お返しします。剱さん、あなたのスマホにもデータを転送しておきました」
「助かります」
剱さんはソニックからスマホを受け取り、写真を確認する。
「これでいいですか？」
「上出来です。ありがとうございました。今夜はこれでお開きにしましょう。どうも、お邪魔しました」
探偵とカメラマンが部屋を出ると、僕とソニックはそれぞれのベッドに倒れこんだ。
「はぁ……参ったな、こんなことになるなんて」
「仕方ないだろ。事件はともかく、雪崩は天災だ。誰のせいでもない。……ソニック、バンテリン無いか？　雪かきして体中バキバキだ」
「無い」
衛星電話は持っているのにバンテリンは無いのか、とも思ったが口には出さないでおく。
「衛星電話で事件のことは伝えたのか？」
「橋立さんが亡くなったことは伝えた。死体があるって伝えた方が警察の動きも速いだろうしな。でも、殺人の可能性については何も話していない。電話したのは剱さんが事件だって言い始める前だったし」
僕はスマホを開く。やっぱり圏外のままだ。

＊　　＊

厨房で食器を片付けていた。叶ちゃんは釜田さんととりとめもないお喋りをしている。
「これ、どこにしまうのかしら」
私は包丁を手に取った。
……もし今ここで、橋立さんを殺した犯人が襲ってきたら？
包丁の刃が鈍く私の顔を映した。
「碓氷。包丁は右から二番目の引き出しだぜ」
「あ、はい」
記憶を振り払う。
片付けを済ませた私は、今夜はさっさと別館に戻ることにした。早く、一番心を許せる人と二人きりになりたかった。
その夜。私は存分に恋人に甘えた。一緒に寝るようにせがみ、彼の胸に顔を埋め、背に腕を回し、今を、過去を忘れようと眠りを貪った。

＊　　＊

今夜は別館で風呂を済ませることにした。ナナちゃんが先を譲ってくれたため、俺はお言葉に甘えて先に入らせてもらった。
布団に入り、夫婦二人きりの時間。夜が更けてから、嫁が話しかけてきた。
「ハチくん、起きてる？」
「どうした？」
「……明日、赤木さんを説得しない？　私達の本当のことを話さずにいるのは、やっぱりまずいかもしれないし」
「まあ、依頼人さえＯＫすれば、俺達が職業を偽る必要は無いもんな。そうしよう」
探偵業に限らずどこの業界でもそうだが、依頼人のことをむやみに話すべきではない。その結果として自分の身分職業を誤魔化す場合もあるのは、やはりこの業界の特殊性ゆえだろう。
「俺達が推理畑なら一発で真相を看破するかもしれないのになぁ」
「私達は推理というよりも、潜入調査を主にやってるからその辺の能力は皆無だよね……推理はあの人に任せたら？」
「あの人って、剱さんか？　同僚よりも頼りないけれど、今は彼に頼るしかないのかもな」
探偵事務所に勤めているだけあり、同僚や先輩には推理に長けた者もいる。雪崩で通信が破壊されていなかったら助けを求めていたところだ。

「とりあえず、赤木さんには明日掛け合ってみよう。許可が出たら剱さんに話す。何かのデータにはなるかもしれない」
会話はこの辺で打ち切り、俺は頭まで布団を被る。
ボイラー室の片隅、冷たくなった橋立さんは何を思っているだろうか。
＊　　＊
夜明け前、昨日とは変わってソニックが先に僕を起こした。今日は朝から晴れている。
「やっと起きたか。行くぞ、まっち」
僕が寝ぼけ眼で起き上がると、彼は出かける格好をしていた。
「行くって、どこに？」
「除雪だよ。少しでも進めておけば、後が楽だ」
こんな朝っぱらから……僕は少し呆れながらもベッドから起き上がった。筋肉痛で節々が痛んだ。
「それに、深浦さんが除雪車を運転するって言っていたよな？　一人だけでやらせるのは酷だろ。手伝いに行こう。早く雪崩をどかして、こんな所はさっさと出よう」
そういうことか。僕はベッドから這い出て、着替えを始める。冷え切った空気がパジャマ越しに肌を刺した。
＊　　＊
「ん……」
目が開いた。
「おはよう、起きた？」
あ、礼士さん……。
ちゅっ。
「えっ……！？」
ふふっ……。
「……ちょ、待って待って、起きて起きて！」
揺さぶられてはっきりと目が覚めた。
「……おはよ」
この場には似つかわしくないほどの深い眠りだった。それにしても体がじんわりと温かい。……そうか、一緒に寝てもらったんだっけ。
「どうしたの、顔赤くして？」
「え、覚えてないの？」
礼士さんは赤い顔をしたまま私から目を逸らした。
「……まあ、いいや。雪かきに行ってくる。深浦さんが朝イチで行くって言ってたから、手伝ってくるよ。一緒に行く？」
そういえば、昨日の夜にそんなことを言っていた気がする。
「ええ。私も行く」
着替えを済ませて外に出る。叶ちゃんが付けたと思しき真新しい足跡だけが雪の上で鮮やかだった。このまま除雪に行けるかと思ったが、しかし、残念ながら一緒に行くことは叶わなかった。
「よお、碓氷、剱。起きたか」
別館を出た所で釜田さんとかち合った。
「碓氷、朝飯を作るから手伝ってくれ。剱、悪いが嫁を借りてもいいか？　人手が要るんだ」
私と礼士さんは揃って渋い顔をした。離れたくない。
「本当、お前ら夫婦みたいだな。早く結婚しろ」
釜田さんの苦笑いが、山の稜線から染み出た朝日に照らされた。
「ごめん、礼士さん。私はあくまでここに仕事で来ているから。ご飯を作らないと」
「……一緒にいなくても、平気かい？」
しぶしぶと小さく頷く。
「分かった。釜田さん、彼女を頼みますよ」
「あいよ。行くか、碓氷。大和が待ってる」
そのまま本館の方に、叶ちゃんがつけたと思しき足跡を辿る。昨夜も雪がどかどかと降ったようだ。
「あ、おはようございます」
本館から榊原君とソニック君、深浦さんが連れ立って出てきた。
「どうも。今朝も冷えますね」
榊原君は眠気が覚め切らないのか、欠伸をしながら黒いブルゾンコートの襟を合わせた。吐息が朝日で桃色に染まる。
「まだ夜明けですしね。……除雪車を動かすにしても、まずは雪をどかさないと」
剱さんがため息をついた。ガレージの奥に、除雪車のオレンジ色の屋根が覗いている。
礼士さんを筆頭とする除雪隊と別れると、私は勝手口から厨房に入った。するとそこには、ちょっと予想外の光景が広がっていた。
「叶ちゃん、何やってるの……？」
叶ちゃんが戸棚という戸棚を引っ掻き回している。探し物だろうか？
「おっかしいなぁー、どこにも塩が無いなんて……あ、釜田さん、先輩、おはようございます。塩、見ませんでしたか？　あの大袋の奴です」
「塩？　ねえのか？」
「どこにも見当たらないんですよぉ……」
「そんな馬鹿なわけあるか、昨日はここに……ねえな」
やれやれ、この調子だと朝食は遅くなりそうだ。
＊　　＊
ガレージの周囲は深浦さんが除雪をしておいてくれて

いて、黒いアスファルトが顔を覗かせていた。昨日、屋根から下ろした雪がここに落ちて溜まっていたからまとめて除雪したのだという。何かと気が付く人だ。こんな性格が幸いして、リバティからスペーシアに引っこ抜かれたのかもしれない。

「助かりました。俺のＲＸ-７は後輪駆動で雪道に特に弱いので。こうやって除雪されているとありがたいです」

ソニックが深浦さんに頭を下げる。

「車のことはよく分かりませんが、そう言ってくれるのなら除雪した甲斐がありました」

除雪車は降り続いた雪に埋もれ、出すに出せない状況だった。早く起きて深浦さんの手伝いに駆け付けたのは正解だった。彼一人ではどうしようもない。タイヤと運転席をある程度掘り起こした後、そこからは力技で雪から脱出することにした。豪雪地帯がどんなものかよく分かる。記念に写真を撮ってたお前が言うなよ」

「こんな時に呑気だな、まっち」

「雪崩の写真を撮ってたお前が言うなよ」

体を動かしているうちに段々と眠気が晴れてきた。

「排気管周りの除雪をお願いできますか？」

「ええ。一酸化炭素中毒になったら大事ですからね」

深浦さんが人数分のショベルを持って除雪車の反対側から出てきた。排気管周りに雪が積もると、排気ガスが車内に逆流して一酸化炭素中毒になり、あっという間に死に至る。本来、雪道での運転はとても恐ろしいものだ。

「でも、除雪車の屋根に雪が無くて良かった。雪下ろしの手間が省けた」

「ああ。二階くらいまで高さがあるから、下手に上るのは嫌だもんな」

ソニックと雑談をしながら手を動かしているうちに、深浦さんが先にタイヤ周りの雪払いを終えた。僕達も程なくして排気口周りの雪寄せにケリをつけた。

「深浦さん。僕達がここに来る前に誰かこの除雪車を動かしたりしましたか？」

剱さんが深浦さんに声をかけた。

「え？　ええ。橋立さんが亡くなる前、ここに来た初日にこれで除雪をしました。どうかしましたか？」

「いや、除雪車のショベルの中に結構な量の雪が入っているんですよ」

言われてみるとその通りだ。

「たぶん、橋立さんが最後の最後に雪を捨て忘れたんですよ。あの人が初日にこの除雪車で霧降荘の敷地周りを除雪してくれたんですけどね。過去にも何度かこういう捨て忘れがありました。行きがてら捨てておきますから、お三方は先に現場に向かって下さい」

「頼みます。ソニック、ショベルを持って先に行ってくれ。剱さんは僕の車に乗って下さい」

こうして僕達は出発した。

「朝食は８時です。それまでに戻ってきて下さい。礼士さん、気を付けてね」

見送りに来た碓氷さんに剱さんが手を振った。

＊　　＊

結局、厨房のどこを探しても塩は無かった。私達を手伝うために早起きしてくれた星美さんも一緒に探してくれたが、徒労に終わった。１．５キロくらいの大袋に入ったあれだけの塩が全く見当たらない、というのもおかしな話だ。釜田さんは頭をかきむしった。

「参ったな、これじゃ仕事にならねえ」

塩は調味料の基本だ。

「醤油とかはあるから、それで何とかするしかねえな」

「ですね。昨日まではこの戸棚にあったのに、誰かが持ってったんですかね？」

私にも見当がつかない。

「他の食材はあるんですか？」

「ああ。全部揃ってる」

釜田さんは冷蔵庫を開けた。なるほど、肉に野菜、果物といった類がまだそれなりに残っている。日持ちのしない生魚は初日に全部食べ切った。

「ここにある他に、非常用の缶詰や乾パンもあります。普通に食べたとしてもあと２、３日は全員分の食料を賄えますね」

星美さんはそう言い、さっき叶ちゃんが引っ掻き回した戸棚を指した。あそこに沢山の非常食があるのだろう。

「このままじゃ埒が明かねえ。まずは適当に何か作って、それから考えよう」

そう言って釜田さんはコンロに火を点けた。私も叶ちゃんに急かされ、仕事を始めることにした。

「そういえば、誰か美由を見かけませんでしたか？　朝起きたら既にいなかったんですけど」

「さぁ、分かりませんね。朝風呂にでも入っているんじゃないですか？」

叶ちゃんがあまり気の無い返しをする。私も彼女については皆目見当もつかなかった。

＊　　＊

俺とナナちゃんが起床する頃には既に太陽が顔を出していた。本館に向かうと、ちょうど車が二台、それに除雪車が戻ってきた。

「ああ、押鳥さん。おはようございます」

青いインプレッサの助手席から剱さんが顔を出した。寒風に晒され続けたのか、鼻先が赤い。

「どうも。除雪ですか？」
「ええ。除雪車があると進みが段違いですね。そろそろ朝食なので、先に行ってて下さい」
車が二台ガレージに吸い込まれ、除雪車はその建屋の奥に停車した。二階の部屋のバルコニーにぶつかりそうで、見ていて少しひやりとさせられた。深浦さんが運転すると昨夜の席で言っていたが、やはり運転経験に乏しいのかもしれない。
本館では既にほとんどのメンバーが起きて、食堂に集まっていた。ご飯に味噌汁、卵焼き、野菜の味噌和えと、今朝は和食だ。
「あれ？」
碓氷さんが声を上げた。
「瑞穂さん、どうかした？」
「食事が二人分余っちゃって……」
「ええっ？」
その言葉に、俺も含めて周りの人間は顔を見合わせる。
「そういえば橋立、娘がいねえって言ってなかったか？」
釜田さんがだならぬ口調で言い、それにナナちゃんが被せた。
「確かに。……それに、赤木さんはどこですか？」
嫁の言葉に、俺は嫌な予感がした。
「本当だ、いねえな」
「まだ寝てるんじゃないですか？」
「アホ。こんな状況でそんな神経の切れた真似ができるわけねえだろ」
釜田さんと大和さんが漫才みたいな掛け合いをするが、その声は張り詰めている。
「星美さん、二人から何か連絡は？」
「え？　ええと……」
剱さんの鋭い声に、星美さんはあたふたとスマホを開く。でも、今ここは圏外だ。メールやメッセージが入るはずもなく、当然ながら二人からの通知も無かった。
「……まずは先輩の部屋に行ってみませんか？」
ソニック君がこわごわと発言する。
「万一ということもありますし……」
万一って……まさか。
この一言で空気が変わり、俺達は彼女の部屋に行くことにした。同室で部屋の鍵を持っている星美さんを筆頭に、階段を上ってすぐの部屋。
星美さんがノックをする。返事は無い。
「美由？　いるの？　朝ごはんができたわよ」
ドアを開ける。無人だ。
「起きた時からいなかったので、たぶんここにはいないと思いますが……」
母親の言う通り、手分けして部屋の中を捜索したが彼女の姿は無かった。
「仕方ありません。美由さんは後回しにして、赤木さんの部屋に行きましょう」
剱さんが言う。廊下を曲がり、彼女の部屋に向かう。
「赤木さん？　朝食ができましたよ。起きているなら返事をして下さい」
星美さんの声に対する返事は無い。
「……中に入りましょう」
剱さんはドアノブに手をかける。鍵がかかっていた。
「剱さん、合鍵を！」
合鍵を使うと扉はあっさりと開いた。室内になだれ込むも、薄暗い部屋の中には誰もいなかった。ベッドの上は使われた形跡がある布団が置いてあるだけで、やはり人の姿は無い。その他、特に変わった様子も無い。
「お風呂場はどうでしょう？」
大和さんがそう言い、洗面所に向かう。その奥が風呂場のようだ。
「赤木さん、いますか？　開けますよ？」
「大和さん、気を付けて！」
剱さんが大声を出す。それもむなしく、ドアが開く音がした。
悲鳴。

＊　　＊

僕は耐え切れずに駆けだした。何かまずいことが起きたのは直感で分かった。でも、具体的には分かることを脳味噌が拒んでいた。
青ざめた顔をした大和さんを釜田さんが支える。その横を駆け抜け、僕は浴室に入る。
「先輩……！？」
浴槽の中、先輩がぐったりと横たわっていた。
じっとりと濡れそぼった服の隙間から覗くのは真っ青に冷え切った肌の色。ぴくりとも呼吸のそぶりを見せない胸部の膨らみ。既に息が無いのは、見るだけで明らかだった。
「まっち！？」
駆け付けたソニックが僕を呼ぶ。
「これは……先輩……！？」
彼も絶句する。僕は脈を取ったが、冷え切った肌に触れた瞬間には既に諦めていた。
「ソニック……駄目だ、手遅れだ」
僕は目を閉じ、深く呼吸をする。大丈夫、うん、もう大丈夫。
「まっち……大丈夫か？　顔色悪いぞ」
「大丈夫だ……うん、平気だ」

僕は無理やり膝の震えを抑え込み、立ち上がる。
こんな所で死体が二つも出た。これは只事じゃない。
「美由……！　美由！？　しっかりして、美由！」
「美由！　……ああ、そんな！」
僕とソニックは、背後から駆け寄った母親と婚約者に場所を取られた。
＊　＊
私は礼士さんにすがりつきながら、どうにか崩れ落ちずにいた。
人が死んだ。
それがどれだけのことか。
しかも、二人死んだ。
事故や病気なわけがない。
殺人だ。
……。
人を殺す。
よくも、そんなことが。

第七章

美由さんの死体が発見されてから、生き残った人々の反応は二種類に分かれた。礼士さんを筆頭に冷静さを保ち、今後の動きを考えている人。私を筆頭に、あまりの事態に混乱してうろたえている人。
「美由……」
浴室から声がした。夫に引き続き娘まで喪った母親の声だった。
「誰が……誰が！　誰が誰が誰が！」
胸を裂くような嗚咽交じりの声が私達を貫く。
「誰なのよ、美由を殺したのは！」
当然、誰も何も答えるはずが無かった。
「殺してやる……」
星美さんの声が一段低くなった。
「殺してやる……っ！」
星美さんと深浦さんがのっそりと浴室から出てくる。医学生二人に腕を取られながら、いや、半ば引きずられながら。体の動きは無気力に魂が抜けたようになっているが、その声に宿る殺意は私の肌を粟立たせた。
「橋立。まずは落ち着け、な？」
「落ち着け？　この状況で落ち着けって言うの！？」
釜田さんがなだめるも噛みつかれる。私は頭のネジが外れてしまったようで、ただぼんやりとその様子を見ているだけだ。でも、私はまだマシな方だった。深浦さんは青黒い顔をしたまま、赤木さんのベッドに座り込んでしまった。
「辛いのは分かる。よーく分かる。だが、ここはまず飯にしよう」
「釜田さん！？　こんな状況で何言ってるんですか！？」
叶ちゃんの呆れ声で私は我に返った。
「だって朝っぱらから何も食ってねえんだぞ？　どうせ空腹のままでも何もできやしねえ。それに橋立、お前のそんな姿、娘さんも見たくねえと思うぞ。だから、今は気丈に振舞え。腹に何か入れたら少しは気分も良くなるぞ」
星美さんは黙りこくったままだ。
「まずは食え。話はそれからだ」
沈黙すること約1分。母親は暗い表情のまま、僅かに首を横に振った。
「……食べたくありません」
あのおっとりとした態度はどこへやら、完全に生気を失っている。釜田さんはそっとため息をつくと、私と叶ちゃんの方を見た。
「確氷、大和、とりあえず飯の準備だ。俺達まで何も食わねえわけにはいかん。深浦、お前、食えるか？」
深浦さんは首を横に振りかけ……そこから弱々しく首を縦に振り直した。釜田さんはそれを見て、続ける。
「とりあえず食うだけ食って、それから考えようぜ。ここからとんずらするのか、それとも……」
釜田さんの細い目が、私の頭上を通り越して礼士さんを見た。
「……犯人をとっ捕まえるのか」
＊　＊
用意された朝食は冷めてしまったため、温め直してもらった。美由さんの分はいつの間にか下げられている。赤木さんと星美さんの分の朝食にはサランラップがかけられていた。櫛の歯が欠けるように空席が増えていく。釜田さんと星美さんの姿が見えないが、恐らく上で介抱しているのだろう。
「……で、これからどうするんですか？」
ナナちゃんが味噌汁を啜ってから口を開く。飯の力とは恐ろしいもので、あれだけささくれ立っていた神経が嘘みたいに収まってきた。こういう時は、多少食欲が無くても何か腹に入れるだけで違うのかもしれない。でも釜田さんは落ち着きすぎだ。
「昨日みたいに二面作戦で行きますか？　剱さん」
探偵はお茶碗を置いた。
「ソニック君、とりあえず食事が終わったら衛星電話で連絡を取って下さい。レスキュー隊はいつ到着するのか、

それが把握できないとこちらではどうしようもありません。ここから脱出するにしても、たったこれだけの人員と一台の除雪車では、やはりマンパワー不足です」
「分かりました」
「それが終わったら、昨日と同じメンバーで美由さんの検死、及び現場検証に移りましょう。他の人は赤木さんの捜索に当たって下さい。異存のある人は？」
手を挙げる者はいない。そうだ、赤木さんも消えてしまったのだ。……もしかすると、もう死んでいるかもしれない。
「検死が済んだら、僕達もそちらの応援に向かいます」
榊原君が付け足す。除雪もあるのに、それ以上に赤木さんの捜索という仕事まで増えてしまった。しかしそんな愚痴を垂れている場合ではない。
「これからどうなるんでしょうか……？」
碓氷さんの口から不安げな、か細い声が聞こえた。
「分からねえ。でも腹は減るからな、飯は炊くんだよ」
唐突に釜田さんの声が聞こえ、僕達は振り向いた。
「星美さんの様子はどうですか？」
ライターで煙草に火をつける深浦さんの横で榊原君が聞いた。深浦さんの周囲だけ人がおらず、何だか寒々しく感じられる。婚約者を喪った深浦さんは青黒い顔のまま、白米を一口ちびりと食べただけで箸を置いた。そこから立て続けに何本も煙草を灰にした。
「とりあえず二口三口食わせたが、それが精一杯だ。捜査には協力するらしいが、あの様子だと精神的にきついかもしれねえな」
昨日と同じメンバーで捜査するのは厳しいかもしれないが、これは後で剱さんと打ち合わせよう。
「僕達のこれからについてそこまで心配することはないよ、瑞穂さん。少なくとも犯人は無関係な人間を殺す気は無さそうだし」
「どうして？」
碓氷さんの表情はやはり浮かない。釜田さんも発言に食いつく。
「剱、今言ったのはどういう意味だ？」
「犯人は殺そうと思えばいつでも僕達を皆殺しにできました。そうしなかったということは、無関係な人間を殺すつもりはないということです」
えらく物騒なことを言う。
「皆殺しって……一応聞くが、どうやって？」
「料理ですよ。一昨日と言い昨日と言い、ここで出された料理には大皿料理や鍋料理など、一つの器から配分する料理が出されています。それに毒を入れておけば、僕達を一発で皆殺しにできます。やろうと思えば初日の夜に僕達を皆殺しにできたわけで、わざわざ現段階まで生かしておく必要はありません。殺された方々から考えると、犯人は製薬会社に関係のある人である可能性は低くありません。毒薬の入手も比較的容易でしょう」
言われてみると、確かに。
やがて、食事を終えたソニック君が衛星電話をかけた。
「皆さん、朗報です。遅くとも明朝には除雪が全部終わり、警察とレスキュー隊が来るそうです！」

＊　＊

赤木さんの部屋は本館の二階、ガレージがある方に面している。食事を終えた僕達は剱さんに連れられて美由さんの検死に向かう。そう、どういうわけか先輩は赤木さんの部屋で死んでいたのだ。残された除雪班は出発の準備をしている。
部屋の前では釜田さんに付き添われておばさんが立っていた。魂を奪われたように、能面のように無表情だ。
「橋立さん、構いませんか？」
剱さんが穏やかな声で語りかけても、真っ赤な目をしたまま僅かに頷くしか反応が無かった。
部屋にはベッド、クローゼット、テーブルなどのごく普通の家具が一通り揃っている。窓の外、バルコニーの柵からは除雪車のオレンジ色の屋根が覗いている。
「押鳥さん、まずは部屋の写真を頼みます」
剱さんは押鳥さんに部屋の撮影を頼んだ。とりあえずやることが無い僕は、なるだけ邪魔にならないようにバルコニーで待つことにした。
バルコニーから外を臨むと、遠くには山の稜線が白く染まっている。真下に目をやると除雪車のオレンジ色の屋根が見える。柵を飛び越えたら簡単に乗り移れそうだ。
「なあ、まっち？　この傷、何だろうな？」
ソニックが除雪車の屋根を指差した。目を凝らすと細い線状に複数の傷が見える。塗装が剥げているようだ。
「あれ、本当ですね」
いつの間にか横に来ていた剱さんも少し驚いたようだった。
「恐らく、この建物のガレージに車庫入れした時に天井とぶつかったんじゃないですかね？　天井の梁に引っかかったとか？」
僕の意見に剱さんは合点がいったようで、しきりに頷いてから部屋に戻った。
「剱さん、部屋の撮影が済みました。バルコニーを撮影するのでよけて下さい」
カメラマンに追い出され、僕とソニックは剱さんと先に浴室に入ることにした。タイルが濡れているため靴下

を脱いだ。浴槽の中で先輩が目を閉じて沈黙している。服を着たままなのがかえって痛々しい。
押鳥さんも少し遅れて浴室に入ってきた。あまり広くない浴室で、大の男四人が入ればぎゅうぎゅうだ。まずは手を合わせ、死者を弔う。
「先に押鳥さんに写真を撮ってもらいましょうか」
僕とソニックは浴室から追い出された。
「何だか二度手間だな。入れられたり追い出されたり」
「ああ見えて剱さんも混乱しているんだろ。これくらいの段取りの悪さは責め立てるほどじゃない」
僕のぼやきをソニックがなだめる。ややあってから写真撮影は終わったようだ。剱さんに手招きされ、再び浴室の中に入る。
「床がだいぶ派手に濡れていますね。シャワーでも浴びたんでしょうか？　でも美由さんは服を着たままですし」
剱さんは床と先輩の死体を見比べながら少し考えていたが、とりあえず保留することにしたようだ。
「押鳥さん、星美さんと一緒に部屋の中に変なものが無いか調べて下さい。榊原君にソニック君、検死をお願いします。昨日の橋立さんの時と要領は同じ、死因と死亡推定時刻が判ればありがたいです。あと、誰かスマホカメラで一連の流れを録画してくれますか？」
録画はソニックのスマホが引き受けた。尻込みしていても仕方ない。僕はソニックを見た。
「やるか」
腕まくりをしてそっと浴槽の中に手を入れる。
「ひえっ、冷たい！」
「変な声出すなよ、ソニック」
「すまん、まっち。想像以上に冷たくて」
確かにかなり冷たい。お湯を張ってからかなりの時間が経っているようだ。温泉のお湯を引いたようで先輩の四肢は白濁りの下に隠れて見えない。
「まずは引き揚げないとどうにもならないな。ソニック、引っ張り出そう。剱さん、死体を持ち上げるのを手伝って下さい」
三人がかりで持ち上げるほど重い女性ではなさそうだが、手を滑らせたりしたら大事だ。死体はぐんにゃりとして踏ん張りが効かず、持ち上げるのは大変だった。浴槽から出して濡れたタイルの上に置く。
「死後硬直がそこまで進んでいないな」
「先に死斑から見るか。その方が簡単そうだ」
僕は死体のズボンをまくり、ふくらはぎを出す。
「思いのほかはっきり出てるな……でも、これは赤紫色というよりも鮮赤色じゃないか？　どうだ、ソニック？」
「昨日のおじさんのと比べると明らかに赤みが強く見える。でもあっちは薄暗かったしな……剱さん、浴室の電気を消してくれませんか？」
「え？　はい、分かりました」
電灯の光が消え、窓の無い浴室は一気に薄暗くなった。擦りガラスでできたドア窓からの明かりが頼りだ。
「さっきの給湯施設の時のようにスマホライトを点けて下さい。俺やまっちの見間違いを避けるために、橋立さんとなるべく同じ光線条件で比較したいんです」
「よし。これでいいですか？」
剱さんのスマホライトが生気を失った先輩の肌を照らし出す。
「ええ、ＯＫです。……明らかにおじさんの死斑より赤い。鮮赤色で間違いないだろうな。剱さん、もう大丈夫ですよ。電気を点けて下さい」
ソニックの指示で浴室が明るくなる。
「鮮赤色の死斑ってことは……死因は？」
ソニックが立ち上がり腕組みをする。
「薬学の方では青酸系の毒物による中毒死が定番だけど……まっち、どうだ？」
「真っ先に出てくるのは一酸化炭素中毒。これは定番中の定番だ。他には凍死でも鮮赤色の死斑が出るらしい。後は今言ってくれた青酸中毒とかか……それ以外には何も思いつかないな」
僕が思いつく例もそう多くはない。
「一酸化炭素中毒の線は低いですね。浴室が目張りされていたわけではないし、そもそも一酸化炭素中毒で死ぬなら車の排気口周りを雪で塞げば一発です。車も雪もそこにありますし。でも、死んだ後に誰かがわざわざ車からここまで先輩の死体を運んで浴槽に入れる、というのは考えにくいです」
剱さんがようやく口を開いた。理にかなった考え方だ。
「でも、この風呂場の換気を止めて温泉のガスを充満させれば……あ、でもそれなら死因は硫化水素による中毒で死斑の色が変わってくるか。というかこの建物の風呂は２４時間換気されているって橋立さんが言っていたな」
「じゃあ、凍死もありませんね」
剱さんがぶつぶつと考えをまとめるのを遮って僕も考えを表明する。
「だって、ここは風呂です。手に入るのはお湯か、せいぜい水です。凍死させるにも大量の氷を調達できませんよ。それに凍死させるならすぐそこの山にでも連れ出して、雪の中に埋めるのが一番です」
「となると……消去法ではあるけれど、青酸中毒？」
ソニックの言葉に僕は頷いた。
「それが一番妥当だと思う。でも……アーモンド臭っぽ

い匂いするか？」
　僕はそっと先輩の口元に鼻を寄せる。すると、首筋に何かが見えた。
「ソニック。これは……殴打痕じゃないか？」
　首筋に青あざができている。かなり大きく、派手だ。裂傷にまでは至っていないが、とても強い力で殴られたと容易に察することができる。
「うわぁ、これは酷い。皮膚が裂けていないだけで、かなりの怪我だな。もしかしてこれが死因か？」
「いや、それなら死斑の色が赤紫色になるはずだ。こんな鮮紅色になるとはちょっと考えにくい。たぶん、先輩は犯人に殴られて気絶、そのまま青酸を呑まされて亡くなったんじゃないか？」
「椅子か何かで殴られたのか？　裂傷にまで至っていないから、凶器に血痕はついていないと思うけど」
「だとすると、凶器は何だ？　見た感じだと棒状のもので殴られたと思うんだけど、部屋にそんな物あるか？」
　いくら考えても結論が出そうにない。本来の目的に戻ることにした。口元に鼻を寄せるが、硫黄の匂いで鼻が馬鹿になったのか、何も分からなかった。
「そもそも、アーモンド臭って嗅いだことあるのか？」
「無い。ソニックは？」
「俺も無い。というか、あれも青酸中毒になったら必ずする、というわけでもないだろ？」
　結局、アーモンド臭がするかどうかの結論は出なかった。ソニックも駄目元で先輩の口元の匂いを嗅いでみたが、やっぱり何も分からなかった。
「口の中を見てみよう。青酸は猛毒だから、そのまま呑んだら口の中で炎症を起こしているはずだ。剱さん、スマホライトを」
　何度も貸すように求められるとさすがに渋い顔をされるかと思ったが、当の本人も結果に興味があるようだ。渋ることなく貸してくれた。口の中を照らし出す。
「……駄目だ、炎症はおろか口内炎一つ見つからない。健康そのものだよ」
　僕は落胆を隠せなかった。徒労感だけが雪のように積もっていく。
「落ち込むなよ。そもそも青酸をそのまま呑むなんてことはせずに、カプセルか何かに入れたのかもしれない。他には注射とか？」
「注射か。服の下に何か痕跡があるかもしれないな。剱さん、脱がせますか？」
　剱さんは少し考えてから、黙っておばさんの方を見た。先輩の母親として、娘の遺体を無下に扱われることには我慢ならないだろう。しかし、聞いてもろくな反応が無いためそのまま調べることにした。
「おい、ソニック。これって……」
　長袖長ズボンの姿では分からなかったが、下着姿にするとはっきりとある物が残っていた。
「暴行の痕か。犯人と取っ組み合ったか、殺されそうになったところを抵抗して、最後に首筋に打撃を受け、昏倒した」
「誰がやったかまでは分からない、か」
　ソニックが苦々しげに言う。
「ですが、こんな痕が付いていたら、とりあえず他殺で間違いなさそうですね……注射痕はありますか？」
　剱さんの言葉に調べを再開する。しかし注射痕は見つからなかった。僕は諦めて立ち上がり、剱さんに結果を知らせる。
「状況証拠に頼らざるを得ないんですが、先輩……橋立美由さんの死因は青酸系の毒物による中毒死の可能性が高いです。他の死因が浴室で死ぬにはあまりにも適していないのでこの結論に至りました。首筋の殴打痕が致命傷になった可能性も考えましたが、死斑の色と矛盾するため、首筋に打撃を受けて気絶させられ、抵抗できなくなったところに青酸を呑まされたと考えます」
「分かりました。ありがとう」
　剱さんは僕達に一礼した。役に立てた自信は無い。
「じゃあ、死亡推定時刻を調べてみよう。今何時ですか？」
「えーと、9時半ですね」
　剱さんが腕時計を見た。
「まずは死後硬直を見ようか。さっき持ち上げた時に四肢がある程度垂れ下がったし、口もすんなりと開いたから、まだ亡くなってからそこまで時間は経っていないはずだ。ソニック、肩・肘・膝を触ってみてくれ。僕は顎と首を視る」
「ああ。……少し突っ張ってきてるかな」
「そうか。顎や首は硬くなっているから、余裕を持って考えても死後1～4時間ってところかな。でも、ここは風呂場だしな」
「お湯の中で死んだと考えると、かなり高めの室温、水温で考えるのがベストか。じゃあ……えーと、どうなるんだ？　まっち？」
「室温、気温、水温が高い場合は死後硬直は早くなる。逆に低い場合は死後硬直が遅くなる。だから、死後1～4時間よりももっと最近に亡くなった可能性があるということだ。でも、1～4時間でも十分に最近だから、これ以上変更する必要もなさそうだけど、どう思う？」
「いいんじゃないか？　余裕を持って時間帯を決めていると思えばちょうどいいだろ」

「よし。ソニック、次は目だ……って、先輩も目を閉じてるのか。弱ったな、これだと乾燥しないから調べようがないぞ」
「仕方ない。まっち、体温を調べよう」
　剱さんがおばさんから体温計を前もって受け取ってくれていた。娘の死体を恥ずかしげもなく触りまくっている僕達を見て、おばさんは何を思っただろうか。
「体温計を貸して下さい」
「ええ。はい、これ」
　憔悴しきった返事を最後まで待たずに受け取り、体温計を口に入れる。待つこと数十秒、アラームが鳴った。
「１０．３度……これは低体温症なんてものじゃないぞ！？」
　予想外に低い結果に驚きを隠せない。
「血流が止まったところに、気化熱で顔の体温が下がったんじゃないか？　それに、青酸の痕跡を探すのに口を開けたのがマイナスになったのかもしれないぞ」
「そうか、深部体温じゃないもんな」
「榊原君、あまり邪魔はしたくないですが、深部体温って一体？」
　剱さんが僕の横にしゃがみ込んだ。垂れ目の奥から石炭のように明るい黒目が覗いている。
「深部体温というのは、平たく言うと体の奥の体温です。普通、体温を測る時は脇の下や口など、表皮組織に温度を計測しますよね？　死亡推定時刻の判定ではそれでは当てにならないので、直腸の温度を調べることが多いんです。これが深部体温です。今の僕達の設備では深部体温を調べるのは無理なので、やむを得ず口の中という表皮体温を調べています」
　ある程度は理解できたのか、ふむふむと剱さんは頷く。
「これじゃあ、体温は当てにならないな。死斑は？」
「結構大きく出てるし、あまり死斑の動きも見られないな……死後６時間は経ってることになる」
「ええ？　でも、死後硬直は１～４時間か、それより短いって言ってただろ？」
「だからおかしいんだよ。死体は嘘をつかないから、死体を見る前提条件が間違っていることになる。とりあえず、死亡推定時刻は死後硬直から考えると５時半～８時半、死斑から考えると３時半、合わせて３時半～８時半、ということになるか」
　そこから何が間違いなのかを考えようとした時、押鳥さんが血相を変えて飛び込んできた。
「剱さん！」
　この叫びは只事ではない。
「どうしました？」
「遺書です！　遺書が見つかりました！」
　その言葉に僕達は弾かれたように立ち上がり、驚きの表情を隠さなかった。しかし、その表情は押鳥さんの次の言葉でさらに驚きで重ね塗りされた。
「赤木さんの遺書です！」
＊　　＊
　遺書は彼女のパソコンを漁っていたら出てきた。ワードファイルの中に、『遺書』というタイトルが見えた。
「これです」
　俺は剱さんに画面を見せ、席を譲る。キャスター付きの回転椅子が軋んだ。そこまで長い遺書ではなく、剱さんはすぐに読み終えた。

『遺書

　皆様がこの文章を読んでいる時、既に私はこの世の住人ではなくなっていることでしょう。何も語らずにこの世を去るのはあまりにも申し訳ないため、言い訳じみてはいますが遺書というかたちで真実を述べさせて頂こうと思います。
　橋立漣丈、橋立美由の両名を殺害したのは私、赤木真鈴で間違いありません。橋立漣丈様の件については剱様が述べた通り、給湯施設内にガスを発生させて窒息に至らせたものです。望まない不倫関係への恨みを晴らし、本来の予定では、それだけで犯行は終わるはずでした。美由様は私を疑っており、私の部屋を訪ねてきました。そして私を犯人だとし、父親を殺された怒りに身を任せたのでしょう、襲い掛かってきました。私はそれを思わず返り討ちにしてしまったのです。
　本来は殺すはずの無かった人間を殺めてしまった苦痛を胸にしまったまま、この雪山を降りる気にはなれませんでした。なので、ここに記しておきます。私が犯人です。
　橋立星美様、そして関係者各位に多大なご迷惑をおかけしたことを心よりお詫び申し上げます。誠に申し訳ありませんでした。

赤木　真鈴　』

「なんて書いてあるんですか？」
　榊原君が急かす。剱さんが二人に席を替わっている間、俺はそっと浴室の方を見ていた。美由さんは夜中にこの部屋を訪ね、赤木さんに詰め寄り、取っ組み合いの末に命を落としたということだろうか。

「赤木さんが書いた遺書だとしたら……急いで彼女を見つけないと」
しかし、そう言う榊原君の声は張りつめたものではなく、諦めのような響きを含んでいる。
「これは何時に作成された文書ですか？　死亡推定時刻が狭まるかもしれません」
「えーと……ソニック君、後ろから失礼するよ」
薬学性の背後からマウスを操作し、操作履歴を出す。
「この文書の最終更新は今朝の４時５０分ですね。今が９時４６分ですから、約５時間前です」
５時間も前に書かれていたら、もう赤木さんが生きている可能性はほぼ無いと考えていいんじゃないだろうか。
「なるほど……じゃあ、人によっては偽装が可能ですね」
「偽装！？」
俺は素っ頓狂な声を上げた。
「ええ。皆さんのアリバイを調べないことにははっきりしませんが、これが赤木さん本人によって打たれた文書だという保証はどこにもありません」
「でも、他人のパソコンを操作するのは簡単な話ではありませんよ？」
「あなただって現に今、赤の他人のパソコンをこうやって操作しているではありませんか。もちろん、誰にでも可能というわけではないでしょうが、赤木さんと親しい関係にあった人ならできるのではないでしょうか」
思わぬ切り返しを食らって言葉に詰まる。職業で探偵をやっている身としてはこれくらいお茶の子さいさいだが、こんな形で裏目に出るとは。剱さんは赤木さんのものと思しき書類鞄を見た。机の横に立てかけてある。
「そもそも、遺書をしたためるなら手書きでもいいでしょう。これくらいの短い文章なら、わざわざパソコンを立ち上げてワープロ打ちをして保存する、なんて手間をわざわざするほどのものでもありません」
「それだけの手間をかけたかったのかもしれないじゃないですか。遺書ですよ？」
ソニック君が疑問を呈する。
「ですが、犯人による偽装工作だとしたら辻褄が合うんですよ。手書きの遺書だと、筆跡鑑定で誰が書いたのか一発でばれてしまいますからね。その点、ワープロ打ちは安全です。指紋さえ残さなければ、パソコンの所有者が打ったと考えるのが自然ですからね」
「……剱さんは、赤木さんも誰かに殺されたと考えているんですか？」
星美さんが恐る恐る尋ねる。剱さんはややあってからゆっくりと頷いた。
「自殺の可能性を全否定する気はありませんが、殺人の可能性の方が大きいと考えています」
そうだ。心のどこかでは直感的に分かっていた。これが自殺なはずがない、と。
でも、改めてそれを探偵の口から告げられると、やはり心は重苦しくなった。俺の口から思わず疑問が出た。
「他に根拠はあるんですか？　その、これが殺人だという根拠は？」
「あるにはありますが、どうせ除雪班の人たちが戻ってきたら説明しなくてはなりません。二度手間になるのは面倒なので、皆さんが揃ったら話します。それに、今は赤木さんを見つけることが先決です」
探偵はその巨躯を椅子から上げた。
「ああ、これだけは言っておきましょう。もうこれ以上の殺人は起こらないと思いますよ」
剱さんはそう言い、窓の外を見る。今日は晴れてはいるが、風が強い一日になりそうだ。

＊　＊

風が出てきた。除雪車の排気ガスをモロに顔に喰らい、私は思わず咳き込んだ。
「大丈夫ですか、先輩？」
「ええ。それにしても、除雪車があるとここまで違うのね。百人力じゃないの」
「深浦さんには感謝しないといけませんね」
確かに、いくら運転がよたよたしておっかないとはいえ、除雪車の威力は絶大なものだ。でも、この雪崩に太刀打ちできるような力はあるはずもなかった。
「こりゃあ、掘っても掘ってもきりがねえな」
釜田さんが腰を叩きながらぼやく。
「無理しないで下さいよ？　もう年なんですから」
「ふん、若造にはまだまだ負けねえよ。こう見えてまだ本厄も迎えちゃいねえんだ」
叶ちゃんのからかいに釜田さんは笑う。
「除雪隊は道の反対側から掘っているんですよね？　見えますか？」
夏奈さんも作業の手を休めて背を逸らす。全然見えないようだ。雪崩の高さは除雪車の背丈とほとんど同じくらい、２メートルは優にある。見通しなんて皆無だ。
「それにしても、いませんねえ。赤木さん」
夏奈さんは困り果てたようにぼやく。雪崩現場までの道中、車をゆっくりと走らせながら目を皿にして探したが、彼女を見つけることはできなかった。
「案外、まだ霧降荘の中にいるんじゃないですか？　隠し部屋みたいな仕掛けがあったりして」
綾辻行人の館シリーズじゃあるまいし。叶ちゃんの言葉を相手にする者はいなかった。

「おい、あれ」
釜田さんが何かに気付いて、後ろを指差した。車だ。どうやら赤木さんの部屋の捜査が終わったようだ。
青い車から礼士さんが降りてくると、一同は動きを止めた。深浦さんも除雪車から降りてきた。
「どうだったの？」
「まあ、ぼちぼちだよ。そっちは？」
「全然だめ。赤木さんも見つからないし、雪崩もどうにもならない」
私は使っていた雪かき用のショベルを手渡した。真っ黒な鉄製のショベルは重くてしんどかった。礼士さんはそれを軽々と肩に担いで雪の壁に向かう。ショベルの先っぽから雪が落ちて、橙色の塗料が顔を出した。
他の調査班一同も車から降りてくる。難しい、というか浮かない顔をしている。あまり得られるものが無かったのか、それとも？
「分かったことは多いです。昼食の時にまとめてお話しします。雪崩の方は？」
礼士さんはそう言って、私の背後に目をやる。
「除雪車のおかげでだいぶ進みは良くなりましたが、やっぱり厳しいですね」
無駄骨、という言葉が頭に浮かぶ。昨日から2メートル進んだと考えるか、2メートルしか進んでいないと考えるか。
ここからは援軍もあり、少しはペースが上がった。と言っても微々たるもので、体の疲れと痛みを代価に得たのはわずか1メートルくらいの前進だけだった。
「仕方ねえ、とりあえずここで打ち止めにしよう。そろそろ昼飯の時間だ。剱の話も聞きてえしな」
釜田さんの白い吐息が突風に消えた。

第八章

遅くとも明日には救助が来るということで、食料の残りをそこまで気にする必要も無くなったのは幸いだった。どういうわけか塩が無いということで、昼飯はご飯に味噌汁、肉と野菜を味噌で炒めたものが出された。味噌かぶりだが勘弁してもらった。
「それで？　どうだった？」
釜田さんが剱さんを見る。剱さんは眼鏡をずり上げた。
「まず、端的に結果をお話ししましょう。美由さんは何者かによって殺されたと考えられます」
どよめき。
「連続殺人、ということですか？」
大和さんが釜田さんの陰から声を上げる。
「そうですね。こんな一っ所で全く別件の殺人事件がそれぞれに起こるとは思えません」
最初にここに来た時は、まさかこんなことになるとは思わなかった。
「美由さんの死亡推定時刻は3時半～8時半、遺書の最終更新の時刻が4時50分なので、犯行時刻はそれくらいだと考えられます」
「遺書？　遺書があったの？」
碓氷さんが驚きの声を上げる。
「遺書があるのなら自殺じゃないんですか？」
ナナちゃんが聞く。俺も現場で同じ質問をした。
「いいえ、この遺書には赤木さんの署名がありました」
再度、どよめき。
「遺書の内容によると、赤木さんはまず橋立さんを殺害。ボイラーの操作をしたのは彼女だということです」
「じゃあ、深浦さんが見たロングヘアの人影は赤木さんだったってことね」
碓氷さんの発言にも納得が行く。
「そうなるね。遺書には続きがあります。赤木さんが橋立さんを殺したことを美由さんは感づいていた、そして彼女は赤木さんに詰め寄り、激昂して殺されそうになった。そして……」
剱さんは言葉を切った。
「そして、美由さんを返り討ちにして殺してしまった」
淡々と続ける。
「部屋の中で取っ組み合いになったんでしょうね、恐らく。美由さんの首には強い力で殴打された痕がありました。おそらくそれにより気絶し、赤木さんに青酸カリを呑まされたものと思います」
「取っ組み合い……風呂場で取っ組み合ってどちらかが浴槽に落水したら、水が飛び散ってタイルも濡れますね」
剱さんがぼそりと呟く。
「待って下さい、どうして青酸カリなんですか？　今までの話だとてっきり撲殺されたものだと思ったんですが」
深浦さんが煙草から口を離して聞いた。美由さんが亡くなってから、彼が煙草を吸うペースは倍くらいになっているように感じる。それと引き換えに、食事の量は半分以下になっているようだ。
「死斑が鮮紅色だったんです。普通、撲殺では死斑が赤紫色になります。ですが死斑が鮮紅色の場合、死因は一酸化炭素中毒、凍死、そして青酸カリによる毒物中毒、大体これらに絞られます。美由さんが発見されたのは浴室で、何か細工が施された痕跡もありませんでした。よ

って、一酸化炭素中毒も凍死も選択肢から外れ、死因は青酸カリだと考えました」
榊原君が説明すると、ソニック君が大声を上げた。
「ソニック、どうかしたか？」
「先輩の殴打痕って、もしかして浴槽に頭をぶつけたんじゃないか？　赤木さんと取っ組み合いになっているうちに浴室になだれ込み、そこで押し倒されるか足を滑らせるかして、浴槽に首筋をぶつけた。それなら棒状の物で殴られたような痕になってもおかしくはないだろ？」
榊原君もその考えに手を打った。しかし、それに反対の意を示す者がいた。
「それはいささか怪しいと思いますよ」
剱さんが冷ややかな声で遮った。
「どうしてですか？　何かおかしいですか？」
「いえ、ソニック君の殴打痕の意見は良い線を突いていると思います。前提条件が正しければ、の話ですが」
剱さんはそのまま続ける。
「僕は、この遺書は犯人による偽造だと考えています」
医学生コンビはそのことを失念していたみたいで、虚を突かれた表情をした。
そこから剱さんは、現場検証の時に話した内容を繰り返した。ワープロ打ちで筆跡鑑定が無く犯人にメリットがあること、そもそもパソコン打ちすることは手間がかかること、云々。
「なるほど、遺書が偽造された可能性があることは分かりました。ですが、前提条件というのは？」
深浦さんが疑問を呈する。
「もし赤木さんが美由さんを殺害してこの遺書を書いたとするなら『返り討ちにした』という表現をするでしょうか？　過失で殴り殺してしまった、ということなら分かりますが、死因は青酸カリによる中毒死と現状では考えられています。殴り倒した後にわざわざ青酸カリを呑ませて『返り討ちにした』とは言わないと思います」
剱さんはそのまま続ける。
「仮に赤木さんが殺されている場合、部屋の鍵が閉まっていたことも推測ながら理由付けができます。赤木さんを殺して部屋の鍵を奪えばいい」
「それを言うなら剱さん、合鍵を持っているあなたにも犯行が可能ですね」
俺は意地悪く指摘する。剱さんは冷静な目で俺を見た。
「仮に僕が彼女を殺害したとすれば、足跡の問題がありますね。今朝、僕と瑞穂さん、それに釜田さんが別館を出た時、大和さんがつけた真新しい足跡しかありませんでしたよ」
「剱さんの言う通りです。今朝は私が別館を最初に出たんですが、足跡は全く付いていませんでした」
大和さんも付け足す。知り合い同士でかばい合っているようにも見えるが、とりあえず深追いしないでおこう。
「自殺というには不自然なことは分かりました。ですが、そもそも本当に赤木さんが他殺だという証拠はあるんですか？　鍵だって、赤木さんが美由さんを殺害した後、自分で閉めたのかもしれませんよ」
今度はナナちゃんが質問を繰り出す。剱さんは一考して、答える。
「そうですね……仮に赤木さんが自殺したと仮定したら、決定的におかしい部分はあります」
「えっ？」
誰からともなく声が漏れた。
「おかしい、ってどういうこと？」
碓氷さんが聞く。
「赤木さんは橋立さんをガスで殺してしばらくした後に自殺した、ということだよ。なぜ赤木さんは橋立さんを殺したその場で自殺しなかったんだろうね？」
……どういうことだ？
「橋立さんは建屋内に充満したガスによって死亡しました。仮に赤木さんが犯人だとすれば、橋立さん以外の人が入らないようにその場で注意しているでしょうね。そして、橋立さんが死亡したことを確認したらどうするか？　その場でガスマスクを外せば一発で死ねます。それなのになぜわざわざ自殺するタイミングをずらしたのでしょう？」
簡単に自殺できる状況で自殺しなかった、というのは確かに変な話だ。
「橋立さんが亡くなったと考えられる時間帯は雪崩で閉じ込められる前ですし、橋立さんの死体が見つかってから逃げられると踏んでたのが、全て雪崩によって狂ったという理由ではないんですか？　もう逃げ場はないと諦めて自殺した、みたいな」
ソニック君の意見も筋が通らないわけではない。だが、釜田さんが反論した。
「そんな奴が自殺する前の日に呑気に飯を食うとは思えねえな。昨夜は普通に食ってたぞ」
二人の論戦が終わるのを待ってから剱さんがまとめる。
「この赤木さんの自殺説について、違和感を覚える部分をまとめてみましょうか。ワープロ打ちの遺書。昨夜まで普通に食事をしていたこと。遺書に書かれた『返り討ち』という文言。そして極めつけに、橋立さんを殺害したその場で自殺をすることが可能だったこと。これらはそれぞれを個別に取り上げると些細なことかもしれませ

ん。しかし、こうも不審な点がぼろぼろ出てくると、赤木さん他殺説を推したくなりますね」
　剱さんはお茶を口に運んだ。
「橋立さんを殺したことに罪悪感は覚えなかったものの、先輩を殺してしまったことに良心の呵責を覚え、自殺した。そのように考えることはできませんか？」
　榊原君も問う。
「ですが、二人は初日夜に風呂場で言い争いをしていました。仮に美由さんを殺したことが計画外のことだったとしても、それで良心の呵責に耐え切れなくなる程の相手だったんでしょうか？」
　剱さんの考えにも一理ある。探偵はそのまま続けた。
「これが連続殺人だとした場合、二つ言えることがあります。まずは、もうこれ以上犠牲者は出ないだろうということです」
　それは朗報だが、根拠が分からない。
「遺書に書かれていた内容がその理由です。犯人は赤木さんを橋立さん殺害の犯人に見せかけたいために、赤木さんの自白を書きました。もしも犯人が第三の殺人を実行するとしたら、遺書に赤木さんの自白を書くことはないでしょう。犯人、赤木真鈴は自殺した、よって事件は全て終わった、そう思わせることで真犯人である自分は安全圏に逃れることができます」
　……辻褄は合っている。
「もう一つ考えられることは動機です。犯人は赤木さんと美由さんを口封じのために殺害したのではないか、と考えられます」
「口封じ？　なぜですか？」
　もっともな疑問だ。探偵は質問を発した深浦さんの方を見た。
「犯人が橋立さんと赤木さん、それに美由さんの三人を最初から狙っていた場合、三人をいっぺんに殺害するのが合理的です。わざわざ異なる方法で別々に殺害するとなれば、それだけ証拠も増えて、足がつきやすくなります。ボイラー室に二人を招き、ガスを吸わせる。後の捜査で橋立さんと赤木さんの不倫関係は明らかになるでしょうし、心中に偽装することも簡単です。なのに、橋立さんと赤木さんは別々に殺された。なぜか？　理由として真っ先に思い浮かぶのは、赤木さんと美由さんが犯人にとって不利益になる何かを知ってしまった、というものです」
「それで口封じか。納得できるな」
　釜田さんが頬杖をつきながら頷いた。
「でも、その『何か』って？」
　碓氷さんの表情は半信半疑といったところか。
「さあ……現時点では分からない。でも、あなた方なら何か心当たりがあるんじゃないですか？　押鳥さん？」
　気が付くと、剱さんの垂れ目が俺とナナちゃんを厳しく見据えていた。
「押鳥さん、赤木さんのパソコンの中から遺書を見つけ出したのはあなたでしたよね？」
「え、ええ」
　まさか、ここで疑いを向けられるとは。
「赤木さんや橋立さんと仕事上の面識はあったようですが、赤の他人のパソコンを開けて中身を確認するほどの関係ではないでしょう。しかし、現にあなたは赤木さんのパソコンを操作できた。ロックを解除して、中身を漁り、遺書を見つけ出しました」
「……」
　ナナちゃんと目配せする。そろそろ、本当のことを話すべきなのかもしれない。
「とても只者とは思えませんね。ひょっとして、犯人はあなた方なんじゃないですか？」
「そんな！」
「違います！」
　剱さんの鋭い眼光が俺達を射抜く。
「犯人ではない、と言うんですね？　では伺いますが……押鳥栄斗さん、押鳥夏奈さん、あなた方は一体何者なんですか？　お聞かせ願いましょうか」
　依頼主の赤木さんは亡くなってしまったから守秘義務も消滅した。それ以上にここで本当のことを話さないと大変なことになる。
　嫁と目線を交わす。
　行くしかない。
「……さすが、いくつもの事件を解いてきただけありますね」
　正体を明かす前に、一呼吸置く。
「俺達は、本当はこういう者です」
　揃って名刺を出す。亀井衛生工業ではない、本当の職業が印字された名刺だ。
「亀井麗音探偵事務所……？」
　剱さんの怪訝な声に俺とナナちゃんは頷く。
「我々は、探偵をやっているんです」
＊　　＊
　僕は耳を疑った。犯人ではないとしても、よりにもよって探偵とは。
「そんな人を食ったような答えがあるか！」
　釜田さんがテーブルを乱暴に叩いて怒鳴った。

「嘘ではありません、本当です」
「こんなタイミングで、すぐにばれるような嘘はつきませんよ」
夫婦は落ち着いた声で釜田さんをいなす。
「なら聞かせてもらうが、どうしてこの事件を解決しねえんだ？　探偵さんよぉ？」
釜田さんは細い目から剣呑な視線を注いでいる。
「それは、俺達がそういう役割ではないからです。まあまずは聞いて下さい、順を追って説明しますから」
説明、ねぇ。僕もじっとりと胡散臭げな目線を堪え切れない。
「まずは、今まで職業を偽っていたことをお詫びします。ですが、守秘義務があることや、そもそもの職業上の都合もあって簡単に身分を明かせない立場だったことはご理解頂けたらと思います」
口を開いたのは夫の方だ。
「我々が所属している探偵事務所では、各人の能力に応じて仕事を振り分けています。推理を得意とする者もいれば、情報屋みたいな仕事をする者もいます。我々はその中でも、潜入調査が主な担当です。だから推理力は皆無なんですよ。パソコンを開いての資料収集は得意ですが、推理となると夫婦揃ってからっきしです」
分かったような分からないような。
「潜入調査って、それは探偵というよりもスパイって言うんじゃ……？」
「仕事は選びます。産業スパイであることを心配していらっしゃるのでしょうけど、その辺はご安心下さい」
「どう安心しろって言うのよ」
ようやく口を開く気力が出たのか、おばさんが重苦しく口を開いた。
「それで、あなた方をここに呼んだのは誰なんですか？　娘が殺されたんです。守秘義務により答えられない、というふざけた内容はお控え下さいね」
おばさんが今までになく冷たい声で釘を刺す。
「依頼主が亡くなられたので守秘義務も消滅しました。我々は赤木さんに雇われました。赤木さんの依頼を遂行し、そのお礼としてここに呼ばれたんです」
「じゃあ、ここには仕事で来たのではないんですか？」
碓氷さんが目を丸くした。拍子で青いアンダーリムの楕円眼鏡がずり落ちた。
「はい。全くの休暇でこちらを訪れました」
にわかには信じられない話だ。
「赤木さんから依頼を受けた、と言いましたね？　彼女が独断で雇ったのか、それとも夫が秘書である彼女に言って雇わせたのか、どちらなんですか？」
「大元は橋立さんの依頼でしたが、実際の指示は全て赤木さんを通したものでした。なので、橋立さんが亡くなった後も契約関係は変わらず、守秘義務があったんです」
「依頼内容は？」
深浦さんが矢継ぎ早に質問する。
「スペーシア製薬がかつて、リバティ薬科工業と合併したことはご存じですか？　深浦さん、あなたは特によくご存じのはずです。あなたは元々、リバティ側の人間でしたよね？」
初日の夜に深浦さんとお風呂で出くわした時、そんなことを本人の口から聞いたことを思い出した。
「探偵を名乗るだけあって、よく調べてありますね」
話を向けられた深浦さんは皮肉っぽく言った。
「4年前、リーマンショックが引き金となったスペーシア製薬とリバティ薬科工業の合併劇。しかし、事実上はスペーシア製薬による強引な買収だったことは、内実を知る者ならご存じのはずです」
僕は親友を見る。
「ソニック、知ってたか？」
「経済面には疎いけど、教授の雑談で少し聞いたことはあるな」
薬学科の人間には知られている話のようだ。
「事実、合併後の会社役員に旧リバティの上層部はほとんど入っていません。買収合併ならともかく、スペーシアとリバティの合併は表向きこそ対等な合併です。それなのになぜスペーシア側の人間ばかりが優遇されるのか？　当然、旧リバティ側の人間には不満が募ります」
スペーシア側ばかり……ん？　ちょっと待て。
「しかし押鳥さん、深浦さんは旧リバティ側の人間です。そのような出自の人を娘婿に選びますかね？」
剱さんがどぎつい言い方をした。でも、僕も引っかかったところだ。
「旧リバティ陣との結束を強める、という意味を込めての一種の政略的結婚でもあります」
先輩はこれについて感づいていたに違いない。職業探偵は意に介さず話を進める。
「話が大回りしましたが、我々が受けた依頼内容をお話しします。二点です。まず、旧リバティ陣営が不審な動きをしていないか。次に、深浦さんは信用に足る人物か。それぞれについて調査を依頼されたのは今年の夏、調査が終結したのは秋頃でした」
「で、結果は？」
深浦さんが威圧的な声を出した。殺された婚約者も関わる話をあけすけにされて怒っているのかもしれない。
「結論から言うと、深浦さんの動きに特に不審な点は見

られませんでした。継続的に調査を行いましたが、仕事面でこれからお話しする旧リバティの人間との同調した動きは見られませんでしたね。本人だけを調べてもあまり意味が無いので、調査対象は橋立さん、それに赤木さん本人にも広げての調査でしたが、結果は同じです。ただ、私生活まで踏み込んでの調査は行わなかったので、１００％確実だとは言い切れませんが。赤木さんと橋立さんの不倫関係なんて、昨日初めて知りましたしね」

調べられた側の深浦さんは渋い顔をしている。

「深浦さんについてはこのように収穫が無かったわけですが、旧リバティ側の動きについては色々と判明したことがあります。端的に言うと、社内抗争の動きですね」

何だか話が大きくなってきた。

「それは、ここで話していいものなんですか？」

そう尋ねるおばさんの声には、まだ硬い響きが色濃く残っている。

「リバティ薬科工業出身のメンバーは不満を募らせていました。これが吸収合併、買収などとなれば新天地でのポストがあまり良くなくてもある程度道理に適っています。しかし、両社は表向きは対等合併です。なぜスペーシア側が独占的に優位な立場を占めることができたのか？　我々はまずそこから探ることにしました」

押鳥さんはなぜか僕の方を見た。

「やがて、我々はある事実に行き当たりました。リバティ薬科工業が、複数の大学病院と癒着関係にあったというものです。リバティ薬科工業のメイン業務は医薬品の開発、製造ですが系列会社では医療機器の製造も行っています。そこの製品を優先的に採用するという内容でした。それを主導したメンバーは既にリバティにも、現在のスペーシア製薬にも籍を置いていませんが、歴代経営陣はそれを黙認していました」

それは探偵が調べるようなことなのか、という疑問もあったが、それを差し置いて気になる部分があった。

「その大学病院って、まさか……」

「察しがいいね、榊原君。残念ながら、君とソニック君がいる東京大和大学附属病院も癒着先の一つだと考えられている」

これには僕だけでなくソニックも驚いた。経済的な犯罪には疎いが、世間ばれしたら大騒ぎになるだろう。

「それが旧リバティ陣営メンバーの冷遇にどうつながるんですか？」

剱さんが話を進めようと水を向ける。

「スペーシア製薬の上層部も、この癒着関係を知ることになりました。医療機器メーカーと大学病院の癒着、これが一般に知れ渡ったら合併どころではありません。株主もそっぽを向くでしょう。しかし、合併して大規模化によるスケールメリットを享受しなければ、リーマンを発端とする恐慌に対応できないと両社の幹部は考えました。両社は癒着の隠蔽を選択したんです」

これだけ聞くと、リバティ陣営は命拾いしたように聞こえるが。

「しかし、スペーシア側は一枚上手でした」

夏奈さんが話を引き取り、ちらりと視線を館主の空席に送る。

「スペーシアの経営陣は旧リバティ経営陣に対して、癒着をゆすりのネタにして、合併後の全面的な経営権の独占を迫ります。互いに合併しか生き残りの道が無い中でしたし、旧リバティ側は呑むしかありませんでした。その後、癒着関係はそのまま現在のスペーシア経営陣に引き継がれています。リバティ側にすれば甘い汁を丸々横取りされたことになるんです」

それを主導したのって……もしかして？

「無論、橋立さんもそれを主導したメンバーの一人です。それだけに、旧リバティ側出身の深浦さんを家族の一員として迎え入れるには細心の注意を払っていました。一歩間違えれば、敵陣営のメンバーを自分の懐に入れることになりますからね」

「それを警戒して自分の身辺を洗わせたわけですか」

深浦さんはそう言い、座り直す。

「それで、社内抗争の動きというのは？」

「元々、旧リバティが始めた癒着関係。それを脅しに経営権を乗っ取った現スペーシア陣営。はっきり言って、同じ穴の狢です。しかし、旧リバティが癒着をしていたという証拠を全て消すことができたら？　あるいはスペーシア側が癒着を開始して、それを旧リバティ側に悟らせまいと合併後も経営権を独占している、そう誤魔化してすっぱ抜かせることができたら？　その不正を発端に現在のスペーシア経営陣をまとめて追い出すことも夢ではありません」

企業の内実とは、こうも闇が深いのだろうか。

「橋立さんが疑惑を抱いたのは、元々の癒着を始めた旧リバティの古参が相次いで自主退職したことや、経営合理化に伴う希望者リストラにあっさりと応じたことが始まりでした。癒着の発端を知る者が急速に数を減らし始めたんです」

「それが癒着の証拠を消すという動きだ、と橋立は踏んだわけか」

釜田さんは話についていけているようだが、僕にはお手上げだ。

「橋立さんは火消しに走るふりをすることにしました。

とりあえず旧リバティ側から人畜無害な人間を選んで、スペーシア側に引き込んで融和を演出しようとしたんです。その白羽の矢が立ったのが深浦さん、あなたです。旧リバティ側に歩み寄る姿勢を見せて、社内抗争を抑えよう、ゆくゆくは抗争の首謀者を会社から追い出そうと考えたんです。しかし、深浦さんが旧リバティ側の切り札だったら万事休す。そこで、我々に深浦さんの身元を洗わせる依頼を赤木さん経由で出したんです」

先輩は婚約者の浅黒い顔を見つめた。

「それで？　自分を調べて何か出てきましたか？」

深浦さんの射抜くような声に探偵夫婦はうなだれる。

「深浦さんが人畜無害なのは本当のようです。しかし、旧リバティ側は今も動きを続けています。こんなことを言うのはなんですが、あなたは捨て駒にされたんですよ、深浦さん」

窓ガラスが風でカタカタと鳴った。

「……捨て駒、ねえ」

深浦さんがぽつりと言う。

「まあ、橋立さんが亡くなって社内のパワーバランスがどう推移するのかは分かりませんが」

「押鳥さん」

深浦さんが声をかけた。

「あなた方のいる探偵事務所は現在も依頼を受けつけていますか？」

「え？　……ええ、どうかしましたか？」

「……橋立さんがどういう思惑で自分を選んだのかは、何となく察しました。不純な理由だとはいえ、橋立さんに選ばれた以上はスペーシア製薬を正常に引き継ぎ、運営していく責務が自分にはあります。そこで、あなた方に依頼します。警察が来たら、今の癒着の件を全て公表して下さい」

「えっ！？」

一同がそれぞれに驚きの声を上げた。

「スペーシア側もリバティ側も同じ穴の狢だって、さっき言ったじゃないですか。膿はまとめて出し切るしかないんです。スペーシア側からは人畜無害だと思われているようですし、リバティ側からは捨て駒にされました。両陣営とも自分が動くとは思ってもいないでしょう」

「でも、本当にいいんですか？」

そう聞いたのは押鳥さんではない。おばさんだった。

「あなたの夫の不実が露になるかもしれませんし、こんなことを依頼するのは心苦しいです。しかし、黙っているわけにもいきません」

おばさんは目を伏せたままだ。

「捨て駒の意地、見せてやりますよ」

深浦さんが気障なセリフを吐く。あまり似合っているとは言えなかった。

＊　＊

押鳥さんの正体、そして話してくれた事実は礼士さんにとって全くの予想外だったようだ。

「ええと、押鳥さん。少し確認したいんですが」

探偵と密偵、それぞれの目線が交錯する。

「深浦さんの身元を洗ったが、プライベートには踏み込んでいないと言いましたよね？　それは調査対象者だった赤木さんや橋立さんについても同じですか？」

「ええ。正直、社内情報を取り扱うので手一杯で、プライベートを探索するのは人手も時間も予算も足りなかったんです。そこまで必要があるとも判断できませんでしたしね。調査内容に含まれてもいませんでしたし、社内調査だけで十分なデータは得られたんです」

夏奈さんが答える。礼士さんは難しい顔をしていた。

「押鳥さんの正体は分かったけれど、事件の方の手掛かりはさっぱりだなぁ」

礼士さんの言葉が何となくうまくまとまった部屋の空気に冷や水を浴びせた。そうだ。企業の闇を照らす展開に持っていかれていたが、本題はここで起こった事件だ。

「推理は引き続き剱さんに任せる、ということでいいんですか？」

ソニック君が聞いた。

「他にできる人はいませんよ」

押鳥さんが礼士さんを推す。私を含め、他のメンバーも反応に濃淡はありつつも賛同した。

結局、昼食はこれ以上の進展は無くお開きになった。午後も赤木さんの捜索と除雪に充てられることになった。

「でも、剱さんの話だとこれ以上の犠牲者は出ないようですね。ほっとしました」

榊原君が椅子から立ち上がり、大きく伸びをしながら言った。

それから私達は午後の除雪に出向くことになった。なったのだけど。

「瑞穂さん」

恋人が私を呼び止めた。

「歩いて行こうよ」

……そういえば、今日はまだろくに二人の時間を持てていなかった。

他のメンバーが先に現場に向かうのを見届けて、私は礼士さんと歩き始めた。晴れ上がった空を思いのままに風が駆け抜け、時折私達を揺さぶる。

「寒い？」

礼士さんが声をかける。私は首を横に振った。

「大丈夫。手、あったかいでしょ？」
私は恋人の手を取り、歩みを揃える。裏起毛のもこもこした手袋越しにも、私のぬくもりは届いているだろうか。礼士さんのぬくもりを感じながら、ふと考える。
道はタイヤの跡が延々と続くばかりで、後はひたすらに踏み固められた雪に覆われている。榊原君もソニック君も、こんな道をかっ飛ばすなんて。命知らずにも程がある。
「少し疲れちゃってね、二人っきりになれる時間が欲しかったんだよ」
礼士さんは少し甘えたように言う。この人は甘えてくることもしばしばだが、付き合い始めてからは気が付くと私が甘えていることも多い。そんな自身の変化に私は戸惑いと気恥ずかしさを隠せずにいる。
黙って手を繋いだまま、私達は歩みを止めない。穏やかな沈黙に身を任せたまま、踏みしめられた雪の上にうっすらと二組の足跡をつけ続ける。
「……赤木さんを探さなくていいの？」
私はそっと尋ねる。
「うーん、見つけないとまずいのは分かってるんだけどね……正直、見つかってほしくないんだ」
予想だにしない返事に歩みが乱れた。
「どうして？」
「だって、誰かが亡くなる度に、悲しそうな顔をするから……瑞穂さんのそういう顔を見ても、僕には何もできないから」
死体。
それは、私達の未来の成れの果て。
永久の別れ。
私はそれを目の前に、何度も何度も身を震わせ、涙を流してきた。
「礼士さん」
私は握る手に力を込める。
「あなたは何もできないなんて……そんなことは、ない」
そうだ。この人は何度も何度も私の涙を拭ってくれた。
「私は、あなたに何ができるの？」
礼士さんの垂れ目が少し大きくなった。やや吊り気味で、少し無愛想な私の目とは違う。穏やかな目だ。
「私にできることは何？」
カーブを曲がり切り、下り坂。
「そうだな……」
私は恋人の横顔を見上げる。
「……もっと、色んな瑞穂さんを見せてほしい」
長い沈黙の後、次のカーブを曲がる頃になって礼士さんは言った。
「もっと、君と一緒にいたい」
風が止んだ。
「ずっと……」
「剱！」
雪山に探偵を呼ぶ声が響いた。
「赤木が見つかったぞ！　早く来てくれ！」
釜田さんが息を切らしながら駆け上がってきた。
「はぁ……はぁ……いや、別に急がなくても構わねえか」
見つからなければいい。恋人がそう言っていた女性がどうなったのか。その表情から悟ってもなお、釜田さんは次の言葉を続けた。
「どうせ手遅れだからな」
風は、絶望の言葉を掻き消さなかった。
「……そうですか。向かいます」
礼士さんはそう言いつつも、私の手を離そうとしなかった。私も離す気はさらさら無かった。

＊　＊

赤木さんの死体は雪崩現場からそう遠くない、車の中からだと死角になる場所にあった。崖の下で半ば雪に埋もれていて、崖上からだとあまりよく見えない。
「第一発見者は？」
礼士さんの問いに手を挙げたのは釜田さんだった。
「除雪は他の奴らに任せて、とりあえず歩いて探すことにしたんだ。霧降荘の辺りはお前らがやってくれてるから、俺は反対側から探そうと思ってな」
「なるほど。しかし、あそこまでどうやって降りますか？　ロッククライミングは嫌ですし」
礼士さんが弱り果てた顔で言う。
「この雪崩を伝って降りられませんか？　スキーをすると思えば」
ソニック君が雪崩を指差す。崖下までの高さは１０メートルくらいだが、その最下層まで雪崩が続いている。
「降りるくらいなら何とかできるでしょうけど、問題はその帰りです。ここまで登るのは無理ですよ。こんな急傾斜、どうやって人力で登れって言うんですか」
「リフトなんてねえしなぁ」
叶ちゃんと釜田さんも思案顔をするが、夏奈さんが声を上げた。
「降りる人の体にロープを結わえ付けて、車で引き上げるのはどうですか？　星美さん、ロープはありますか？」
しかし、聞かれた側は首を小さく傾げるだけだった。代わりに深浦さんが答える。
「倉庫を探せば何かあるかもしれません。見てきます。釜田さん、乗せて行ってもらえますか？」
釜田さんが深浦さんと一緒に霧降荘に戻っている間、

赤木さんを引き上げる段取りを決めることになった。
「俺が降ります」
真っ先に手を挙げたのはカメラ好きの密偵だった。
「ハチくんが行くなら私も」
妻も手を挙げる。
「押鳥さんには写真を撮ってもらうつもりだったので好都合です。二人とも、スキーはできるんですか？」
「ええ。ここまで急な傾斜は経験がありませんが、大丈夫でしょう」
それから釜田さんと深浦さんが戻るまで、押鳥さんは崖上から赤木さんの写真を撮っていた。私は手持無沙汰だったが、かといって除雪をする気にもなれず、除雪車の周りをほっつき歩いていた。一人乗りの小型除雪車だが、その太いタイヤといい頑丈なショベルといい、とても小型と呼ぶにはふさわしくない大きさだ。ショベルなんて大人が一人入れるくらいの大きさだ。
こんなに大きな除雪車でも、雪崩を前にするとまるで歯が立たない。それほどまでに自然の力とは強大で、私達人間はそれに必死にしがみついて自然の一部と名乗っているに過ぎない。自然を支配する、自然を制御する、そんなものは妄信に過ぎない。この雪崩に限らず、私と礼士さんはそれを目の当たりにしてきた。
クラクションの音が聞こえ、釜田さんと深浦さんが戻ってきた。後部座席とトランクに山のように荷物を積んでいる。
「手分けして探したんだが、ロープは無かった。消火栓用の耐火ホースがあったからこれで何とかするしかねえな。３０メートルある」
そう言って白いホースを引っ張り出す。
「本当に大丈夫なんですか？」
「ちょっとハチくん、フラグ立てないでよ」
「お前らが降りるのか。超高層ビルからバンジージャンプするんじゃねえんだから平気だろ。今更やめますなんて言わねえよな、探偵さんよ？」
押鳥夫妻は怖気づいたのか少し顔を青くしているが、釜田さんはお構いなしだ。身分を偽っていたことが相当気に喰わなかったらしい。
「あと、スキー道具とそりを持ってきました。これで赤木さんを運べるでしょう」
深浦さんはトランクからスキー板を出す。
「まあ、引き上げられるまでの間、俺達は休憩しようぜ。熱いお茶を入れてきたからよ」
釜田さんは準備をする降下組を尻目にそう言い、愛車の中から湯飲みとポットを出した。
＊　＊
スキー板を履くのは2年ぶりだ。以前は夫婦水入らずで楽しんだし今回もそうするつもりだったのだが、まさかこんな形でスキーをする羽目になるとは。
腰にホースをがっちりと結び、反対側は釜田さんの車に結ばれた。突き破られたガードレールから雪崩伝いに滑り降りると、急傾斜にも関わらず意外とすんなりと崖下まで降りることができた。ナナちゃんも一緒だ。
「あそこだ」
スキーストックに力を込めて、雪上を行く。程なくして赤木さんの所に辿り着いたが、俺とナナちゃんは思わず目を背けた。酷い形相をしている。
「……あんな高い所から落ちたら、こんな顔になってもおかしくはないか」
上を見上げると、のっぺりとした崖の上に雪山の頂が見え、その白さは冬らしくない青空に一層映えていた。胸一杯に息を吸うと、雪山の張りつめた空気で肺が冷えるのが分かった。
ナナちゃんは言葉が見つからないのか押し黙ったまま、俺の愛機のシャッター音だけがこだまする。所々真っ白な雪にまみれている死体の写真を撮り終えるのにそこまでの時間はかからなかった。
「よし、ナナちゃん。死体をそりに載せるから手伝って」
「……」
「どうした？　何か見つけたか？」
「ううん、何か違和感があるんだけど……ごめん、分かんない」
「まあいいよ。とにかく今は上に戻ろう。帰りの車の中でじっくり考えたらいい」
二人ともスキー板を履いているのではどうにもならないため、俺は一度板を脱いだ。自分の脚だけで立つとズサズサと膝小僧辺りまで沈んでしまった。そりにまだ少し柔らかさを保っている死体を仰向けのまま乗せると、下敷きになっていた白い雪が出てきた。
撮る物を大方撮り終え、俺とナナちゃんは上に合図をした。
「いいか、ゆっくり引き上げるからな！　しっかり掴まってろよ！」
釜田さんの怒鳴り声に手を振り、約３０秒後には俺とナナちゃんは引きずられ始めた。
「ナナちゃん、大丈夫か？」
「平気。ハチくんは？」
「大丈夫。しっかりそりを持っていてくれよ」
３分くらいかかっただろうか。俺達は無事に死体を引き上げることができた。剱さんと医学生コンビが赤木さんの遺体を載せたそりに駆け寄る。

「二人ともありがとうございました。榊原君、ソニック君、検死をお願いします」
「怪我はねえか、お前ら？」
俺達を引き上げてくれた釜田さんに黙って手を振ると、彼の表情がわずかながら緩んだ気がした。
「お疲れ、ハチくん」
大仕事をやり終えた時に特有の表情で嫁が声をかけた。
＊　＊
赤木さんの死体を間近に見て、僕は少し目を背けたくなった。その表情だ。凍り付いたように目を見開き、皺で顔が酷く歪んでいる。苦悶か、それとも恐怖か。
「死因はこれだな。髪の毛で分かりにくいけれど、後頭部に裂傷がある。転落時に頭から落ちたか、それとも何か鈍器で殴られたか。即死だったかもしれない」
「本当だ……うわ、骨まで割れてるじゃないか」
ソニックが見つけた裂傷を前に、剱さんも口を真一文字に結んでいた。吐き気を堪えたのだろう。
「でも、転落した時にこんな傷を負うか？　下は雪だろ？　クッションになりそうな気もするけど」
「そうは言っても、ここから崖下まで１０メートルくらいあるんだぞ？　雪が積もっていたところでこれくらいの傷は負いそうな気もするぞ。それに、雪がクッションになると言っても、積雪によって違ってくるだろ」
僕とソニックの会話を聞いて剱さんが降下班を呼んだ。
「押鳥さん、下の雪はどれくらい積もっていましたか？」
「えーと、膝下くらいまで積もっていましたね」
なかなかの積雪量だが、クッションには不十分だろう。剱さんも同意見のようだ。
「写真を見せて下さい」
剱さんが押鳥さんから一眼レフを借り、写真をチェックする。
「変だな、下敷きになっていた雪にほとんど血がついていない」
そのまま肉眼で崖の下も覗き込む。
「榊原君、こんな裂傷を負って血が出ないということはありますか？」
「論外です。そんなことはまずあり得ません」
「そうですよね」
剱さんはそのまま黙り込んでしまう。
「まっち、死亡推定時刻を見よう。雪に埋もれていたんだから体温は当てにならないけど、他に何か無いか？」
「角膜はどうだろう？　おじさんの死体、先輩の死体と違って目を開けたままだから、参考になるかもしれない。夏場なら1日で濁り切って、瞳孔が見えなくなるんだ」
目を見ると、まだそこまで白濁化は進行していないようだった。冬場だということを差し引いても死後半日くらいだろう。生気を完全に失った瞳は辛うじて青空を映し出している。
「念のため、体温での死亡推定時刻調べてみたらどうですか？」
深浦さんが言ったが、正直気乗りしなかった。冬場の死亡推定時刻の割り出し方法もあるにはあるが、さすがに雪の中となるとお手上げだ。当てにならない旨を説明する。剱さんも省略に賛同した。
「死斑はどうする？」
「見てみよう」
ソニックも三回目となると慣れてきたのか、僕よりも先に死斑を見ようと言い出した。服を脱がし、下着姿にする。特に乱暴をされた痕跡は無かった。
「うーん、全体的にうっすらとしか出てなくて判定しようがないな。ほら、正面にも背面にもうっすらと出てる」
「色は？」
「薄くて分かりにくいけど、これはたぶん赤紫色だ。あの裂傷が死因だと考えるとそうおかしくないと思う」
「あの、死斑が全身に出ることってあるんですか？」
剱さんが口を開いた。
「ええ。死斑は重力により体の下になっている部分に血液が滞留して起きるものなので、死後に遺体を動かしたりして体内の血液を動かせば死斑は出にくくなります」
「つまりこの死体は、何者かが死後に動かした形跡があるってことですか？」
「そこまでは断言できませんが、そう考えても矛盾するような点は思い浮かびませんね」
考え込む剱さんの背後から大和さんが覗き込んだ。
「仮にそうだとすれば、赤木さんの遺書はどうなるんでしょう？」
「真犯人の偽造である可能性が高いですね、大和さん」
「剱さん！　服の中からこんなものが」
探偵と大和さんとの会話をぶった切るようにしてソニックが探偵を呼んだ。
「鍵です」
「ふむ。恐らく、赤木さんの部屋の鍵ですね。犯人はあくまでも自殺に見せかけたかったようです」
剱さんは他殺だと断言しているが、どうにも僕は腑に落ちない。確かに『自殺に見せかけるため』という理由はもっともだが、額面通りに自殺だと受け取ることに決定的な矛盾が示されているわけでもないからだ。
「死因は後頭部の裂傷。死亡推定時刻は不明ですが、半日くらいは経過しています。現在時刻が午後3時過ぎですから、昨夜3時頃に死亡した可能性が高いです」

僕がまとめると、剱さんは頭を下げた。
「ありがとう、頼りになります」
そのまま彼は全員を集め、アリバイを調べた。そういや、先程の昼食時にはアリバイを調べていなかった。今回は誰もろくなアリバイを持っていなかった。先輩との取っ組み合いの音を聞いた人もいなかった。事件さえ無かったら、平和で静かな夜だったのだろう。
＊　＊
アリバイ調べが終わっても除雪は続いた。昨日から私が使っているショベルはだいぶ年季が入っているようで、雪を掻き分ける度に錆びた黒塗装が剥げ、雪に散った。
「まさか、この雪崩も犯人の仕業じゃねえだろうな？もしそうだったら叩きのめしてやる」
釜田さんがぶつくさ言いながらせっせと雪を掻き分ける。私が使っているような鉄製のショベルではないためか、動きが軽々としている。
「万一のために犯人は退路を断つ真似はしないでしょう。この雪崩は偶然ですよ、きっと」
叶ちゃんがなだめる。礼士さんの口からこれ以上の犠牲者が出ないと言われて気が緩んだのか、いつもの饒舌さを取り戻しつつあった。でも、お喋りをしながらも手を休めないあたり、まだ通常運転ではなさそうだ。
掻き分けた雪は崖下に捨てる。崖下を覗き込むと、あの日のことが鮮明に思い出されて、目を背けたくなる。
あの日、あの人の手を掴んだ私の判断は正しかったのだろうか。
黙々と作業を続けること、約3時間。聞き慣れない声が耳に入ってきた。
「おーい！」
私は動きを止めた。他に気付いた複数の人も、声の主を探してあちこち振り向く。
「おーい！」
「あそこだ！　おーい！」
ソニック君が大きく手を振り、白い吐息が躍る。
「救助隊だ！　救助隊が来ましたよ！」
曲がりくねり、雪に閉ざされた道の向こうに人影が見えた。
「いたぞ！　あそこだ！」
オレンジ色の防寒服に身を包んだ一団が、遠くに小さく見えた。
「どうやら助かりそうですね」
久々の朗報に星美さんの表情は明るかった。ようやく顔に輝きが戻った。
その後、救助隊と大声でやり取りを行った。夜を徹して除雪を行えば、明日の昼には道が開通するだろう、とのことだった。
釜田さんと叶ちゃんは先に夕食の準備のために館に戻り、私は引き続き除雪に当たった。しきりに塩が無い塩が無いとぼやいていた釜田さんだが、あの人のことだから何とかするだろう。陽が暮れて、押鳥さんのレンタカーに礼士さんと共に乗せてもらうことになった。
「お疲れ様」
「ええ。礼士さんこそ」
恋人の労いの言葉が沁みる。体の芯まで冷えていた。温泉が待ち遠しい。
「瑞穂さん、それに押鳥さん」
「何？」
「どうかしましたか？」
車中、礼士さんが口を開いた。
「少し手伝ってほしいことがあるんです。夏奈さん……あなた、空手が得意だって言っていましたよね？」
「え？　はい。よく覚えていますね。それがどうかしましたか？」
夏奈さんが大ぶりな体で助手席から振り向いた。礼士さんが放った一言に、押鳥さんは急ブレーキをかけた。
「今夜、僕と一緒に寝て下さい」
＊　＊
食事と検死以外は日がな一日雪かきを続け、僕の体はあちこちがぎしぎしと痛んだ。他のメンバーもめいめいに、食事の前に風呂を済ませることにしたようだった。大浴場に張られたお湯が、僕とソニックを優しく包み込む……と期待したが、それにしては少々熱すぎた。
「熱い！　これは無理だ、まっち！」
ソニックが足先を白濁湯に入れて飛び上がった。
「ずっと外にいたからそう感じるだけだろ。体が冷えきっているし、このままだと風邪ひくぞ……熱っ！」
僕も慌てて足を引っ込める。掛け湯はしたが、それにしても熱すぎないだろうか？
「まさか、また犯人がボイラーをいじったとかじゃ無いだろうな？」
「さあ……入っていれば慣れるだろ。とにかく入ろう」
ソニックは僕を置いて、意を決したように湯に体を沈める。僕も後に続いた。
「慣れてしまえば熱めのお湯ってだけで、何だかんだ気持ちいいな」
僕は頷き、頭に乗せたタオルを直す。体を伸ばすと筋肉がほぐれて気持ちがいい。
「それはそうと、硫黄の匂いも何だか強くないか？」
「ずっと除雪現場にいたからそう感じるだけじゃないか？　あそこは硫黄の匂いが全然しないし、鼻が慣れて

いないだけだろ」
　ソニックはそう言うだけで、まるで気にしていないようだ。改めて鼻に神経を集中させてみる。やっぱり硫黄の匂いがきついような気がした。
「それにしても、結局雪山レースどころじゃなかったな」
「また機会があるよ。今度は先輩に招待してもらうなんて横着じゃなく、ちゃんとした雪の宿を取ろう」
「そうだな、どこにしようか……」
　それからしばらく雪山の話題に興じ、最後にはすっかりのぼせてしまった。ぼんやりとする頭で温泉を出て広間に向かうと、何やらただならぬ雰囲気だ。
「本当なんですか、剱さん！？」
　大和さんが大声を上げていた。探偵は黙って頷く。
「今言った通りです。犯人が分かりました。犯人は、後で僕のいる別館に来て下さい。鍵は開けておきます。そこで証拠を見せましょう」
　何が起きたのか瞬時には分からなかったが、一つはっきりと理解できたことがある。
　これは宣戦布告だ。探偵から犯人に向けた一騎打ちだ。

第九章

　静かに夜が更けていく。もうすぐ朝になる。その静寂を破るかのように、小さく玄関の戸が開く音がした。
　私は物陰に隠れ、じっと身を潜めていた。靴下を履いているのか、足音は聞こえない。僅かに服の布擦れの音がするだけだ。
　犯人が来た。
　礼士さんが言った通り、あの人だ。
　迷うことのない足取りで、礼士さんが待つ居間へと向かっていく。
　戸を開けると、そこは暗闇。犯人が当惑したように歩みを止めた、その一瞬。
　ばちり、と、ブレーカーを入れる音。一気に別館中の電気が点く。犯人を、私達を照らし出す。
　戸惑う犯人。逃げようと玄関に駆ける。
「でやぁっ！」
　夏奈さんの空手が炸裂して、犯人が礼士さんの足元まで転がる。尻ポケットからくるくると包丁が飛び出し、床を滑った。釜田さんが犯人の手が届かないように蹴り飛ばす。
「やっぱり、犯人はあなたでしたか」
　朝４時半。眩い照明が、深浦さんの浅黒い顔を浮かび上がらせていた。

＊　　＊

　私達が泊る別館金星の客間には、霧降荘に集い、そして生き残ったほぼ全員がひしめいていた。なぜか叶ちゃんの姿だけが見えない。消火用のホースでぐるりと縛られた深浦さんを取り囲むように座り、それぞれが鋭い視線を向けている。
「いきなりこんな真似をして、ひどいじゃないですか」
　深浦さんが蹴り飛ばされた頬を膨らませながら文句を言った。台所から盗んできたのだろう、包丁は釜田さんに取り上げられた。
「寝込みを襲おうとしたあなたに言われる筋合いはありませんね。僕としても犯人がこうやってノコノコやってくるかどうかは賭けでしたが、こうも上手くいくとは。少し拍子抜けしましたね」
「犯人犯人って、さっきからうるさいですね。自分が犯人だって言うならば、証拠を見せて下さいよ」
「物証ですか。それができたらこんな凝った真似はしませんよ。警察の科学捜査が行われたら山のように出てくると思いますが」
　礼士さんはさらりと言ったが、私は耳を疑った。
「証拠が無いのに、よくこの人が犯人だって分かったわね。というか、証拠を見せるって言ってたじゃないの」
「あれははったりだよ。まあ、物証が無いってだけで、この人が犯人だという証拠はある」
　それって探偵としてどうなんだろう。でも、犯人を捕まえるという大局に立って考えると、別にいいのかもしれない。
「では、聞かせてもらえますか。剱さん」
　星美さんのドスの効いた声に礼士さんは深く頷いた。
　謎解きだ。

＊　　＊

「さて、今回の事件では残念ながら物証がありません。正確に言うと、あったとしても僕達にはそれを探し出す術がありません。雪崩で道が閉ざされ、警察が捜査できないからです。警察の科学捜査によって物証が出るのを待つしかないでしょう」
「でも、お前はこいつが犯人だって分かったんだろ？どうして分かったんだ？」
　釜田さんの細い目が礼士さんと、それから深浦さんを往復する。
「では、まずはそこから話しましょうか。皆さん、初日の夜の行動を思い出して下さい」
　初日の夜。もう遠い昔のようだが、まだたった二日前の話だ。あの頃はまだみんな元気だった。

「あの場を思い返すと、犯行がまず不可能な人が一人います。それは押鳥夏奈さんでした」
いきなり名前を呼ばれた本人は当惑したように太い体をぴくりとさせ、夫と目線を交わした。
「あなたはあの夜、したたかに酔っていましたからね。物理的に犯行は困難です。今回の事件でも最初から犯人ではないだろうと考えていました」
「酔っていたと言っても、そういう演技をしていたのではありませんか？」
「僕もそう邪推はしましたが、失礼ながら押鳥さんはだいぶ酒臭かったです。演技で酒臭さまでは出せませんから、本当に酔っているだろうと判断しました」
大勢の前で酒臭いと言われて容疑者圏外にされた当の本人は顔を真っ赤にしている。夫はだめだこりゃ、と言わんばかりに隣で額を押さえている。
「なので、深浦さんを捕まえる時も真っ先に彼女に協力を求めました。犯人ではなく、空手の腕がある。仕事にしているくらいですから、探偵としての矜持も持ち合わせていることでしょう。護衛にうってつけでした」
礼士さんが車中で頼んだことは私と礼士さんの護衛だった。最初、「今夜、僕と一緒に寝て下さい」と言った時には目をひん剥いたが。
「本題はここからです。この写真を見て下さい」
礼士さんはスマホを引っ張り出し、フォルダを開く。見せてくれたのは本館の写真だった。
「これ、初日の夜に俺が撮った写真ですよね？　これがどうかしたんですか？」
撮影者である押鳥さんが怪訝な顔をする。
「この写真が撮影されたのは2時０４分でした。一方、深浦さんが『犯人の人影を見た』と言ったのは1時４７分です。そうでしたね？」
確かにそうだったはずだ。
「この灯りが点いている部屋を見て下さい。ここが深浦さんの部屋です。明かりが点いていることから、部屋の主である深浦さんは在室していただろう、そう考えたのが誤りでした。どうしてもおかしい点があるんです」
礼士さんは立ち上がり、カーテンが閉められた窓に向かう。
「深浦さんのその部屋、カーテンが閉められていませんよね？」
「ええ。部屋の灯りがはっきり見えているので確実です。それにカーテンが閉まっていたら、窓の外なんて見えないじゃないですか」
榊原君がスマホ画面に顔を寄せ、反論する。
「それですよ。カーテンが閉まっていたら窓の外は見えない。では、カーテンが開いていたら？」
礼士さんはそう言い、客間のカーテンを開けた。
「これでもまだ、外が見えたと言い張りますか？」
窓ガラスに映っているのは、外の景色ではなかった。真っ暗な窓ガラスにはっきりと映し出されたのは、部屋の中にいる私達の姿だった。
「何も、見えない……」
私は小さく呟く。礼士さんは窓を開けた。冷気と一緒に姿を現したのは叶ちゃんだった。
「大和……お前、そこにいたのか！？」
釜田さんが息を呑んだ。
「どうでした、剱さん？」
「ばっちりですよ、大和さん。誰一人、窓の外にあなたが立っていることに気付きませんでした」
「うう、寒い寒い。早く中に入れて下さいよ」
叶ちゃんはぶるりと震えながら客間に入る。
そうだ。今まで何度も、鏡に化けた暗闇の窓を目にしてきた。深浦さんが雪下ろしをしている時もそうだった。台所の窓に映っているのは私の姿だけだった。
「迂闊でした。もっと早くこの矛盾に気付くべきでした。深浦さん、いかがですか？　これでもまだ犯人の姿と橋立さんの姿を見たと言い張りますか？」
「そりゃ言い張りますよ。自分が見た時、部屋の灯りを落としていたんですから」
「アホ言うな、俺が撮ったこの写真ではあなたの部屋の灯りが点いている。時間は多少ずれているが、わざわざ人影を見た時だけ灯りを落とす理由が無いでしょう」
押鳥さんが声を荒げて反論する。
「……月明かりですよ。それで何となく見えたんです」
「いい加減、見え透いた嘘は止めた方が身のためですよ。あの夜は雪が降っていました。月は雲に隠れていたはずです。月明かり？　笑わせますね」
「というか、今も月が出てますよ。それでも私の姿は見えなかったんですよね？」
叶ちゃんが付け足す。話を聞いて考えているうちに私はあることに思い至った。
「礼士さん、この人の証言が全部嘘だったとすると、死亡推定時刻やアリバイはどうなるの？　橋立さんが亡くなったと考えられる時間帯では、深浦さんは海外の取引先と遠隔会議をしていたはずでしょ？　履歴もあったし、これは偽装できないと思うけど」
「それもちゃんと説明するよ。押鳥さん、釜田さん、あなた方が深浦さんと共に橋立さんの遺体を発見したんですよね？」

呼びかけられた男二人は共に頷いた。
「その時の三人の行動を、もう一度話してもらえませんか？　建屋に入ったところからで構いません」
求めに応じて口を開いたのは押鳥さんの方だった。
「あの時は鍵が掛かっておらず、そのまま入りました。まずボイラーを調べると換気扇と警報装置が止まっていたので、深浦さんがそれを点けて、それから……」
「ストップ。もういいですよ、押鳥さん。換気扇を点けたんですね？」
「ええ。……何かおかしいですかね？　ガスが充満して危険ですし、何もおかしな点は無いと思いますが」
「建屋に入った時、何かおかしなことに気付きませんでしたか？」
押鳥さんは首を捻るばかりだ。釜田さんが口を開いた。
「……そういや、暑くなかったか？」
深浦さんが釜田さんを見た。
「あ、そうそう！　確かに暑かったです。剱さんを案内した時にはすっかり普通の室温になっていたので、すっかり忘れていました」
押鳥さんがぱちんと手を打った。
「室温が通常よりも高かった、と言いたいんですか？」
星美さんの言葉に礼士さんは頷く。
「あのボイラーはガスを鉱泉に溶かして温泉にする装置で、溶け切らなかったガスが建屋内に充満、橋立さんはそれを吸い込んで亡くなったことは既にご存じの通りです。しかし、ここで気付くべきでした。溶け切らなかったガスが充満したなら、それだけ熱も発生して建屋内に充満しているはずだと」
私は礼士さんが抱いていた違和感の正体に気付き始めていた。建屋での実験上がりに感じていた違和感、あれは室温の変化だったのだろう。
医学生があっと声を上げた。
「榊原君は気付いたようですね、犯人の狙いに」
「もしかして、犯人は被害者の死亡推定時刻をずらして自分のアリバイにしたかったんですか？」
その言葉が私の頭に雷を落とした。
同じだ、お父さんと同じだ……。
「そう。死亡推定時刻は死体の置かれた場所の温度で大きく変化します。あの時、榊原君は通常の室温で死亡推定時刻を割り出しました。しかし、通常の室温ではなく、通常よりも高い室温で死亡推定時刻を割り出すべきだったんです」
「すると、死亡推定時刻は……過去にさかのぼりますね。少なくとも数時間は」
「ええ。これで、深浦さんのアリバイは崩れます。あなたはボイラーに細工をして、そして橋立さんをボイラー室に向かわせた。いや、一緒に行ったのかもしれませんね。橋立さんがガスマスクをして行ったら全ておじゃんですし。そしてガスを吸わせ、殺した」
深浦さんは流石にこれ以上抵抗しようとはせず、黙って聞いているだけだった。
「雪崩を発端にボイラーの様子を見に行こうと言われたときは焦ったでしょうね。死体の温度を高めに維持して、死亡推定時刻をずらすにはある程度の時間がかかりますから。そして、その室温トリックを悟られるわけにはいかなかった。だからあなたはボイラーを見に行く役割を買って出たんです。ボイラーに異常は無い、と言って誤魔化すために。ですが釜田さんと押鳥さん、お邪魔虫が二人もついてきてしまいました。このままでは橋立さんの死体が見つかってしまう。そのため方針を転換します。換気扇を点けて、室温を下げるという方針に」
私は何も言うことができない。黙って犯人の横顔を見つめていた。
「室温を下げることによってせめてアリバイ工作の証拠を隠滅しようとしたんです。僕が現場に入った時には、既に室温は通常くらいに下がっていました。まんまと騙されましたよ」
「建屋の鍵が開けっ放しだったのはどうしてだ？」
「検死の結果が正しければ、橋立さんは建屋内のガスを吸って即死したはずです。脱出される心配が無かったので、わざわざ外から鍵をかける必要が無かったのかもしれませんね」
「では、美由さんと赤木さんを殺害したのもこの人なんですか？」
押鳥さんの問いに礼士さんは頷く。
「ですが、どうやって美由さんに毒を盛ったんですか？」
夏奈さんが口を開いた。礼士さんは夫婦の二段攻撃にも静かな顔だ。
「だって、美由さんの死亡推定時刻に合わせて深浦さんに毒を盛るチャンスはありませんでした。美由さんと深浦さんは隣同士の席なので毒を盛ることはできるでしょう。ですが、料理に毒を盛るとすぐに効き目が出るはずです。そうなると、美由さんは食事の席で死亡していないとおかしいです」
「いえ、押鳥さん。粉末状の毒薬でも表面をコーティングしたらある程度の時間差で効き目を出すことは十分可能です。ただ、それを飲み物に溶かしたら時間差を持た

せることは基本的に困難です。昨日の料理はきりたんぽ鍋という汁物なので同じ理屈ですね」
　ソニック君が補足説明を加える。でも、飲み物もアウト、食べ物もアウトとなれば、どうやって毒を盛ったのだろう？
「というか剱、お前も言ってたじゃねえか。どうせ殺すなら標的をいっぺんに同じ方法で殺すのがいいって。赤木の遺書の時だったか？　赤木の場合も娘の場合も同じだろ、どうしてわざわざ別々の方法で殺したんだ？」
「簡単なことですよ。自分が犯人ではない、ということです」
　深浦さんが苛ついた声を上げる。
「あなたも往生際が悪いですね」
　礼士さんは辟易した表情を浮かべ、口をへの字に曲げた。
「釜田さんの疑問にも追って答えるので、とりあえず話を先に進めます。榊原君、美由さんの遺体の死斑はどうでしたか？」
「ええと、鮮紅色でした」
「そこから推察される死因には何がありますか？」
「代表的なものには一酸化炭素中毒、他には死因と考えられる青酸中毒、後は凍死……それくらいですね。今回は青酸中毒だろうと考えています」
　礼士さんはスマホをつつき、別の写真を探す。その間にも説明を続ける。
「死因と殺害方法については長くなるので、先に別の疑問点を洗いましょう。釜田さんが言った通り、美由さんを殺害するなら、一番手っ取り早いのは橋立さんと同様の方法です。既に死亡推定時刻をずらすことにも成功した方法なので、自分のアリバイを作ることも簡単にできます。ならば、なぜそうしなかったのか？　理由は押鳥さん、あなたです」
「俺ですか？」
　呼ばれた本人はきょとんとした。
「橋立さんと同様の方法となると、事前にボイラー室への細工が必要になります。そして赤木さんをそこに呼び出す。ですが、死人が出た場所です。みんな警戒して簡単に近付かないでしょう。ならば、眠らせるかどうにかして運び込むしかない。本館からボイラー建屋に向かうには押鳥夫妻が泊る別館北斗星の前を通るしかありません。そうですよね？」
　礼士さんは星美さんの顔を覗き込む。今は亡き館主の妻はこっくりと頷いた。
「しかし、深浦さんにはそれができなかった。あなたが初日の夜に写真を撮ったからですよ」
「写真って、さっきの本館の写真？」
　私が思い浮かべるのは、夜闇に浮かび上がる本館の姿だ。犯人はあの前の道を通っていくわけだから……。
「橋立さんを殺害しようと準備をした時はタイミングよく写真を撮られずに済みましたが、そんな運の良さが二度も三度も続くでしょうか？　カメラが趣味だと公言するくらいの押鳥さんのことです。何の気まぐれでまた夜の写真を撮るとも限らない。それどころか、一晩中監視用にカメラを回すとも限らない。そうなると、必然的に押鳥さんの別館の前を通らなければならないボイラー室での毒殺という手段は不可能です」
「カメラを壊せば良かったんじゃないですか？」
　叶ちゃんが言うが、釜田さんが反論する。
「当初、橋立さんは自殺か他殺かですら意見が割れていただろ？　剱が強硬に他殺説を言い張って、結果的にそれがビンゴだったわけだ。しかし、当時の状況でカメラが何者かに壊されたら？　一気に他殺説が濃厚になる。犯人としてはそれはやりにくいんじゃねえか？」
　なるほど。それはそうかもしれない。
「カメラの件は分かりましたが、先輩をどうやって殺したんですか？」
　ずっと考え込んでいた榊原君が匙を投げた。
「榊原君、それとソニック君にもう一つ質問です。あの死体、何かおかしな点はありませんでしたか？」
　そう言われても、と言わんばかりの顔で二人は考える。
「……そういえば、異常に体温が低かったですね。死後硬直や死斑から考えられる死亡推定時刻と、体温から考えられる死亡推定時刻にズレがあったのを覚えています」
「体温から推定した死亡推定時刻は5時半～8時半頃、深浦さんには6時頃から先の時間帯、つまり大部分の時間帯に除雪車を運転していたアリバイがあります。剱さんも一緒にいたでしょう？」
　礼士さんは頷いた。……それじゃ、深浦さんに殺害は無理なんじゃないの？
「つまり何が言いたいかというと、美由さんの場合も体温から判定した死亡推定時刻が間違っているということです。どの事件も、深浦さんは死亡推定時刻をずらすことによって自分のアリバイを作り、容疑者の圏外に逃れようとしたんです」
「だから、それをどうやってやったのかってさっきから聞いてるだろうが」
　しびれを切らした釜田さんが荒っぽい声を上げた。
「端的に言いましょう。美由さんは青酸で毒殺されたのではありません。凍死させられたんです」

礼士さんの声は、凍えそうなほどに冷たい。

＊　＊

「凍死……馬鹿な、風呂場でどうやって凍死させたって言うんですか？」

真っ先に反論したのはソニック君だ。風呂場で凍死、確かに状況としては相容れない。でも、礼士さんのことだから何か考えがあるのだろう。

「ここでは、深浦さんの犯行順に説明していきます。なので美由さんの説明については後回しにして、先に赤木さんの殺害について説明します」

「それってつまり、赤木さんの方が美由さんよりも先に殺されたってこと？」

私の問いに礼士さんは頷く。美由さんの死体の方が先に見つかったため、驚きを隠せない。

「赤木さんを殺害したシナリオはこうです。まず、深浦さんが除雪車の辺りに赤木さんを呼び出します。そこで赤木さんを殺害します」

「それってつまり、深浦さんは最初から赤木さんを殺すつもりだったということ？　それならどうして橋立さんと一緒にまとめて殺さなかったの？」

「赤木さんに橋立さんを殺害した罪を着せるためだよ。それに、橋立さんの事件には赤木さんも一枚噛んでいる。彼女は橋立さんの殺害方法を把握していたはずだから、同じ方法が通用しなかったんだろうね」

「……ということは、赤木さんは共犯者だったの！？」

「いや、そこまでの関係ではなかったと思う。正確なところは深浦さんに聞かないと分からないけれど、指示役か何かだったんじゃないかな？」

礼士さんにはどこまで事件の真相が見えているのだろう。私は分からないことだらけだ。

「凶器は何なんですか？」

押鳥さんが口を挟む。礼士さんは立ち上がり、別室に何かを取りに行った。戻ってくるまでに時間はかからなかった。

「これです」

礼士さんの大きな手に握られていたものを見て、私は引きつった声を上げた。

「雪かき用のショベルですよ。瑞穂さんが使ってたと思うけど、この黒い鉄製のショベルで殴り殺したんです」

……その重たいショベルで人を殴り殺したというのか。私の手のひらからぞわぞわと虫酸が走った。

「じゃあ、赤木さんの遺体の後頭部にあった裂傷はそのショベルで殴られた時のものなんですね？」

「そうです、榊原君。赤木さんの死体をどこに隠すか？　除雪車のショベルの中に入れて、雪を被せたんです」

医学生コンビが顔を見合わせた。

「二人とも心当たりがあるようですね。ええ、昨日の朝のことです。榊原君もソニック君も覚えていると思いますが、除雪車のショベルの中に雪が入っていましたよね？　あの中に赤木さんの死体が埋まっていたんです。深浦さんは除雪車で雪崩の現場に向かう途中でその死体を崖下に投げ捨てたんですよ。転落死に偽装することを見越してこのショベルで撲殺したんです」

「死体が雪にまみれていたのは雪の中に埋めてあったからか……ということは、赤木さんは転落死ではなかったということですか？」

「そうですよ、押鳥さん。だって、赤木さんが転落した場所の雪は白かったでしょう？　雪に血がほとんどついていなかったじゃないですか」

今度は夏奈さんがパンと手を打った。

「それです！　私も何かおかしいと思ったんですが、それですよ！　崖上から転落したのなら周囲に血が飛び散っているはずなのに、あそこの雪はほとんどが真っ白なままでした！」

「雪が降ったからじゃないですか？　血が付いた雪の上に雪が降り積もって覆いになったとか」

ソニック君の言葉を礼士さんは否定する。

「雪は降っていませんでしたよ。その証拠に、赤木さんの死体には雪が満遍なく積もっていませんでした」

天パの医学生は虚を突かれたような表情になった。礼士さんは押鳥さんからカメラを借り、駄目押しに写真を見せる。確かに、赤木さんの死体は雪にまみれてはいるが、満遍なく雪が積もっているとはとても言えない。

「でも、どうして赤木さんの死体を除雪車のショベルの中に隠したんですか？　そんなの、雪をどかされたら一発でばれてしまうじゃないですか」

今度は榊原君が疑問を呈する。言われてみればその通りだ。

「確かにその通りです。現に、僕も深浦さんにショベルの中に雪が入っていることを指摘しましたし、かなりリスクを伴う隠し方でした。ですが、深浦さんには事情がありました。まず、死体を運搬するのに除雪車のショベルが便利だったこと。そしてもう一つが雪で死体を冷やして死亡推定時刻をずらして、自分のアリバイを作ることです」

私は赤木さんの死亡推定時刻を思い出した。午前3時頃……あれ？

「でも礼士さん、赤木さんが亡くなった時刻に深浦さんにはアリバイが無いんじゃない？」
「死体が雪の中にあったから、榊原君とソニック君が体温での死亡推定時刻の割り出しを諦めて、角膜での判定に切り替えたからね。体温を調整して死亡推定時刻を偽造するトリックは不発に終わったんだ」
「僕達学生の腕では、雪の中にある死体の死亡推定時刻なんて体温からでは割り出せませんよ。最初の橋立さんの死体でもまんまと一杯食わされたくらいなんですから。確か、赤木さんの遺体を引き上げた時にも深浦さんは体温測定による死亡推定時刻の割り出しを提案していましたね」
　医学生コンビが少し渋い顔をする。
「それにしても、赤木さんの死体にまともな死斑が出なかったのも頷けるな。赤木さんは殺されてから除雪車のショベルの中に移されて、さらにそこから崖下に落とされた。二回も死体の位置、体勢を変えられたら死斑も出にくくなる」
「そう考えると、雪で死体を冷やしたのにはもう一つの理由があったかもな。雪で冷やすことで死後硬直の進み具合を遅らせて、死体を運びやすくしたのかもしれない」
　礼士さんに引き続き、榊原君とソニック君も推理力を発揮し始めた。
「凶器が碓氷の使っていたショベルって証拠はどこにあるんだ？」
「証拠は二つありますが、まず片方だけ教えます。ショベルの錆ですよ」
　錆……そういえば、赤木さんの死体を見つけた時に雪かきをしていると、錆で塗装がボロボロ剥げていた。
「瑞穂さん。二つ確認したいんだけど、この黒いショベルは鉄製だよね？」
「え？　ええ。重くて大変だった」
「雪崩が起きた当日は錆びてた？」
　記憶の糸を手繰る。
「……いいえ、錆なんて全然無かったわ」
　つまり、錆ができたのは今日になってからだ。
「ショベルの錆？　それがどうかしたんですか？」
　叶ちゃんの言葉に礼士さんはショベルを裏返し、錆が浮いた先端を指差した。
「ショベルの鉄が赤木さんの血で錆びたんですよ。このショベルは真っ黒な塗装ですから、血の洗い残しがあっても気付かなかったんでしょう。血は凝固するとかなり暗い色になりますからね」
　暗い色……かさぶたをイメージしてみると合点がいった。それを聞いた深浦さんは明らかに狼狽の表情を見せ、ショベルに視線を走らせた。
「警察で調べたら例のショベルから血液反応が出るはずですよ」
　人の命を奪った道具を知らず知らずのうちに使っていた……それについて私は何も言えない。
「剱、もう一つの証拠は何だ？　このショベルが凶器だという証拠は二つあるって言ったろ？」
「ああ、釜田さん。今から説明します。深浦さんが赤木さんを殺害していた時、予想外の事態が起こります。美由さんが深浦さんの凶行を見てしまったんです」
　星美さんの表情が凍り付いた。
「美由さんは深浦さんの後をつけていたのかもしれません。食事の席でいきなり除雪車を運転するって言いだして、不審に思ったのかもしれませんね。それか、僕よりも先に窓ガラスの矛盾に思い至ったのか」
　確かに。気が付いてしまえばあの窓ガラスの矛盾は簡単だ。そういや、深浦さんが犯人だということはロングヘアの女性の目撃証言も、橋立さんの目撃証言も全部嘘だったことになる。
「美由さんが深浦さんに対してどういう態度を取ったのかは分かりません。逃げようとしたのか、それとも自首を促したのか。ですが、深浦さんは赤木さんと同様に彼女を殴り殺そうと考え、そして実行しました」
　剱さんが言葉を切る。
「ですが、ここで深浦さんも気付かなかった更なる誤算が生じます。美由さんは殴られた段階ではまだ生きていたんです。それを深浦さんは死んだと勘違いした」
「殴られたのって、もしかして後頭部の打撲痕のことですか？」
　榊原君の問いに礼士さんは首を縦に振る。
「深浦さんは悩んだでしょう。赤木さんはともかく、美由さんを殺すのは計画外です。そこで一計を案じます。『赤木さんが美由さんを返り討ちにし、それを苦にして崖下に身投げした』というシナリオを偽造することにしたんです。美由さんと赤木さんの不仲は瑞穂さんと大和さんが女湯で目撃していますし、動機は十分です。どうせ赤木さんの遺体は除雪車で崖下に捨てる算段です。ですがそのためシナリオ偽造のためには辻褄を合わせなくてはならない部分がありました。美由さんの死亡推定時刻が赤木さんの死亡推定時刻よりも前になるようにする必要があったんです」
「遺書にあった『返り討ち』ってのは、深浦さんが美由さんを殴り殺したと早とちりしたからそういう書き方になったわけか」

釜田さんが合点のいったように深く頷く。
「ええと、礼士さん。つまり深浦さんは、美由さんが赤木さんよりも先に死んだと見せかけたかったの？」
私が聞き、礼士さんが頷く。今まで何度も繰り返されてきたやり取り。
「結局、榊原君とソニック君が赤木さんの死亡推定時刻を体温から割り出さなかったからこれも不発に終わったけどね。ですが、赤木さんの死体を雪で冷やすことは絶対条件でした。自分のアリバイも疎かにできませんからね。死亡推定時刻を前倒しにするには死体を冷やすことが必要になりますが、既に赤木さんの死体を雪で冷やしています。美由さんの死体も同様に雪で冷やしても、死亡推定時刻を前倒しすることはできるでしょう。ですが、赤木さんの死亡推定時刻を追い越すことはできません」
「美由さんの死亡推定時刻が赤木さんの死亡推定時刻を追い越すには雪以上に強力な冷却手段が必要になったんですね？」
押鳥さんが確認する。
「で、その冷却過程で凍死してしまった、と」
榊原君が付け足す。
「そうです。死斑の色と現場の状況から青酸カリによる毒殺が疑われましたが、実際は凍死だったんです。毒殺に関しては、深浦さんと隣同士の席だったことから最初から疑問視していました。そこで毒を飲ませるのが一番楽なのに、そうしなかったんですから」
段々と霧が晴れてきた感覚だが、まだ分からないことが多い。礼士さんは止まらずに道を照らしていく。
「では、雪以上に強力な冷却手段とは何なのか？　犯人はどうやって風呂場で美由さんの死体を冷却したのか？疑問点はそこに集約します。深浦さん、あなたは昨日、本館の雪下ろしをやってくれましたね？」
礼士さんは犯人の顔を見る。浅黒い唇は開くことはなく、沈黙を貫く。この人が雪下ろしを買って出てくれたのは本当だ。
「まあ、いいです。本館の屋根はどういう形状だったか、皆さんも覚えているでしょう。片方はガレージの方に、もう片方はその反対側に傾斜している屋根です。雪下ろしは屋根の傾斜に沿って雪を滑り落とすものですから、当然のことながら雪はガレージの方、それと反対側の方の二か所に落ちます。ここまではいいですね？」
私を筆頭に一同は頷く。
「では、この写真を見て下さい」
礼士さんが出したのは、赤木さんの部屋の写真だった。
「この写真の中、ここを見て下さい。窓の向こう側、バルコニーの部分です」
礼士さんが該当箇所を指で差す。何の変哲もないバルコニーだ。背後に見えるのは雪山、その手前に除雪車のオレンジ色の屋根が覗いているだけで、何もおかしな部分は見当たらない。
「この写真を撮影したのは朝9時頃、赤木さんの部屋にみんなで入った時ですね。ここ、除雪車の屋根が見えますよね？　このオレンジ色の奴です。これを使って美由さんを凍死させたんです」
沈黙。
「……ええと、礼士さん。どういう意味？」
「深浦さんは本館屋根の雪下ろしをした、ここまではいいよね？　その雪はどこに落ちる？」
「え、下に落ちるんじゃないの？」
「うん。そうだね。じゃあ、下には何がある？」
「……除雪車？」
私は礼士さんが何を言いたいのかようやく理解できた。
「犯人は、屋根から雪を除雪車の上に落として、それを赤木さんの部屋の浴槽に運んで美由さんを氷漬けにしたって言いたいの？」
そんなことが……できそうだ。私は改めて写真を見る。バルコニーの柵を跨いで除雪車の屋根に移ることはそこまで難しくなさそうに見える。
「元々、深浦さんは赤木さんの死体を雪で隠すために必要な雪を確保するために屋根の雪下ろしをしたんだ。雪を他の場所から持ってくると除雪の痕がついて不自然になってしまうかもしれないからね。でも、雪下ろしによって屋根から落下した雪ならそうやって怪しまれる心配も低い。既に人為的に降らされた雪なんだから」
「馬鹿馬鹿しい。確かに、雪下ろしをしたのは自分です。ですが、そんな方法で赤木さんと美由を殺害した証拠はあるんですか、証拠は？　こんなのただの言いがかりですよ。だって、この写真で除雪車に雪が乗っていないのは当たり前です。既に自分が操縦して、朝の除雪作業から帰還した後の写真なんですから」
「そうですか？」
深浦さんの喚き声は、礼士さんの冷徹な声で止んだ。
「深浦さん、あなた、初日は誰も運転しなかった除雪車を二日目になって急に運転し始めましたよね？　初日には既に雪崩が発生していたのに。なぜですか？」
深浦さんは何も答えない。
「答えは簡単。赤木さんの死体を雪に埋めたまま運搬するためです。ですが、美由さんの殺害によってもう一つ

の理由ができました。除雪車はずっと放り出されて雪を被っていました。タイヤにも、排気口周りにも。当然、運転席の屋根の上にもね」
　私は今朝の光景を思い出す。あの時、ガレージの向こう側に除雪車のオレンジ色の屋根が覗いていた。あの上に積もっていたはずの雪が凶器だったのだ。
「本来、深浦さんが除雪車の運転を買って出たのは、赤木さんの死体を雪で覆ったまま運搬するためでした。ですが、美由さんを殺害した後はもう一つの理由が付け加わりました。屋根の上に雪が無くても不自然ではないように、する必要があったんです」
　榊原君が何かを思い出したかのように声を上げ、自分のスマホを取り出した。
「そういえば、除雪車の写真を撮ったんですよ。ほら」
　一同の視線が彼のスマホに集まる。雪を被って真っ白になった除雪車だが、なぜかオレンジ色の屋根が丸見えで、そこにはひとかけらの雪も積もっていない。それを見た深浦さんは目をひん剥いた。
「これは今朝、ちょうど剱さんと合流した時の写真です。まだ深浦さんが除雪を始める前ですね」
「決定的証拠ですね。榊原君、ファインプレーです」
　礼士さんは話を続ける。
「この写真を見ると、ガレージ前の道路が除雪されてありますね。ここは融雪装置が設置されていないので、誰かが除雪したと考えるのが妥当です」
「深浦さんが除雪しておいたって言っていました。雪下ろしで落とした雪をまとめて寄せた、って」
　ソニック君が回想して指摘する。
「なるほど。やはりここも深浦さんですか。赤木さんを殺害した時に飛び散った血を誤魔化す目的、赤木さんの死体を除雪車のショベルの中に隠して覆う雪を確保する目的、この二つがあったと思われます」
　礼士さんはそのまま話を続ける。
「もう一つ指摘しておきましょうか。この写真をご覧下さい。赤木さんの部屋のバルコニーから押鳥さんが撮影してくれた除雪車の屋根の写真です」
　オレンジ色の屋根だ。
「深浦さんはこの上に積もった雪を浴室に運び、冷却手段として使いました。その時に使ったのも、赤木さんと美由さんを殴ったショベルです。瑞穂さん、あのショベル、錆以外に何か変わったことに気付かなかった？」
「変わったこと？　……そういや、先っぽに何か付いていたような」
「オレンジ色の何か、じゃなかった？」
　私は電撃を打たれた気分になった。
「瑞穂さんからあのショベルを借りた時に気付いたんだ。皆さんも近くで見てみて下さい。ほら、ここです」
　ぞろぞろとショベルににじり寄る。先端部に目を凝らすと、僅かながらオレンジ色の塗料みたいなものが付いている。
「瑞穂さんが雪かきに使っていたからまだ残っているか不安だったけど、大丈夫だったみたいだね。さて、ここで除雪車の屋根の写真を拡大してみましょう」
　礼士さんは押鳥さんに頼んで、画像を拡大してもらう。
「……この屋根、傷だらけじゃねえか」
　画面を覗き込んだ釜田さんが叫んだ。
「ええ。雪をショベルで寄せる時にショベルの先端で屋根をこすって、塗装が剥げてしまったんですよ。その時に剥げたオレンジ色の塗料がショベルの先端にくっついてしまったんです。警察で解析してもらえば同じ塗料だと判明するはずですよ」
「ですが、その傷はガレージに入れる時に天井の梁にこすったものなんじゃないですか？」
　榊原君が疑義を挟む。
「確かに、最初に榊原君の意見を聞いた時にはそれで納得しました。でも、瑞穂さんは見たんじゃないかな？　除雪車の屋根がガレージの屋根を越えて覗いていたんだけど、覚えてる？」
　少し考えてからはっきりと思い出した。そうだ、深浦さんが除雪車を動かす直前のことだ。除雪車のオレンジ色の屋根がガレージの奥から覗いていた。
「つまり、除雪車は最初からガレージに入らないサイズなんですね。車高が高すぎるから。それじゃ天井の梁にぶつける以前の話じゃないですか」
　叶ちゃんの言葉に合点がいった。礼士さんは機関銃のように推理を喋り続ける。その機関銃の照準ははっきりと犯人の浅黒い顔を捕捉している。
「しかし、深浦さんにとっては美由さんを凍死させるだけでは不十分でした。美由さんの死体の体温を少しでも早く下げることによって死亡推定時刻を偽装し、赤木さんの死亡推定時刻と順番を合わせようとしたんです。そこで、彼は雪よりももっと強力に死体を冷却する方法を考えました。それが塩です」
「塩？　あの無くなった1．5キロの塩ですか？」
　叶ちゃんが素っ頓狂な声を発した。
「ええ。皆さん、氷水に塩を入れるとどうなるかご存じですか？　遅くとも中学校の理科で習う知識です」

そう言われても、２０代も折り返し地点をとうに過ぎた私にはさっぱり思い出せない。
「……凝固点降下か！」
ソニック君が手を叩き、大声を出した。
「ええ。氷水に塩を入れるとその液体はおよそ零下２０度まで温度が下がる。それが凝固点降下です。この原理を使えば、雪のみで凍死させ、さらに雪のみを使って死体を冷却するよりもさらに強力な効果が出ます。釜田さんと大和さんは今朝から塩が無いと騒いでいたようですが、当然です。塩も全部凶器として使用されていたんですから」
「なるほどな、ったくこの野郎は……」
釜田さんが深浦さんを睨みつけた。
「死体を温めたり冷やしたりして死亡推定時刻をずらすという点において橋立さんの時と発想は同じですが、赤木さんと美由さんの事件では方向性が真逆だったわけです。朝っぱらから除雪車を運転したのは、赤木殺しに関して自分のアリバイを作るためでもありました。橋立さんの時は完全に成功を収めましたしね」
礼士さんは少し話し疲れたのか、ここで言葉を切った。
「青酸中毒による死亡ではなく凍死となると、体温で判別する死亡推定時刻は実際よりも大幅にずれますね」
「一杯食わされたな、まっち」
「いや、ソニック。おじさんの分も含めて二杯だ」
榊原君とソニック君もこれには渋い顔だ。
「死斑って、死後に死体を動かしたら消えたり薄くなったりするって、榊原君が言ってましたね。そう考えると美由さんの体に死斑が出ていたのはどういうことなんでしょうか？」
「先程も言った通り、美由さんは浴槽の中で凍死しました。浴槽の中で絶命したんです。そのまま氷漬けになっただけで、美由さんの死後に彼女の体を動かしたりはしていません。なので死斑もはっきり出たんでしょうね」
榊原君が押鳥さんの疑問に答えた。
「でも、凍死させるならそこら辺の雪山に埋めておけばいいんじゃないですか？」
「それは難しくねえか？　足跡が残るだろ」
叶ちゃんの思いつきの発言を釜田さんが粉砕した。
「深浦さんが一連の事件の犯人だということは分かりました。でも、動機は何なんですか？」
夏奈さんが口を開く。
「多少の見当はついています。橋立さんを殺せば、現スペーシア製薬を手中に収めることができます。それを赤木さんに唆されて実行。そして邪魔者の赤木さんを殺害した。こんなところでしょうが、そろそろ本人に喋らせてあげませんか？　どうです、深浦さん？」
礼士さんの垂れ目が犯人を射抜く。
「……ここまで見抜かれてしまっては、どうしようもありませんね。最初から話します」
そう言う犯人は、心なしか穏やかな表情に見えた。観念したというよりも、憑き物が落ちた、とでも言えばいいのだろうか。人を殺しておいて、とても正気を保った結果の表情だとは思えなかった。

＊　　＊

犯人はまず、押鳥夫妻の顔を見た。
「あなた方が会社の内部事情を調査し、報告していたんですよね？　報告先は誰でしたか？」
「赤木さんからの依頼でしたので、調査結果は全て赤木さんに報告していました」
押鳥さんが答えた。質問の意図が読めず、不思議そうな顔をしている。
「ええ、その通りです。その結果は全て自分に報告されていました」
これには礼士さんも驚きの表情を浮かべた。
「資料は全て彼女のパソコンにメールで送られてきました。そのため、彼女はよくパソコンを見せてくれたんです。なのでパスワードを知り、彼女の遺書を作ることも容易でした」
「……裏であなたと赤木さんが繋がっていたとはね」
星美さんが額に青筋を立てている。
「ですが、橋立さんの指示で調査を開始したというのは本当です。赤木さんはそれを疑問に思い、独自に自分に接触してきたんです」
深浦さんの浅黒い顔に自嘲めいた笑みが浮かぶ。
「それまで、自分はうだつの上がらない存在でした。合併前のリバティではそれなりのポストにいましたが、合併してからは根無し草。リバティ出身ということもあってろくな将来にならないだろう、と諦めをつけていたんです。そこに現れたのが彼女でした。初めはなぜ自分に、という疑問が浮かびましたが、とにかくこれはまたとないチャンスです。がむしゃらに飛びつきました」
犯人は誰とも目を合わせようとしない。手の届かなかった栄光に酔いしれているのだろうか。
「自分にとって、赤木さんは女神みたいなものでした。希望と、チャンスを与えてくれた存在、自分は彼女に惹かれ、そして彼女もそれに応えてくれました。そうやって身も心も関係を深めるうちに、彼女は少しずつ訴え始めたんです。『橋立にいいように扱われている、協力するから何とかしてほしい』と」

「それは、橋立さんと赤木さんの不倫関係のことですか？」
　礼士さんが質問を挟む。深浦さんは小さく頷こうとしてから、そして首を横に振った。
「そう思っていました。つい昨日までは。赤木さんは自分に事あるごとに頼みました。橋立さんを何とかしてくれ、と。それがどういう意味か？　……文字通りの意味だと悟ったのは最近になってからです」
　彼はそう言い、橋立さんが眠る給湯施設の方を見た。
「当然、自分は困りました。橋立さんは美由さんと自分を引き合わせてくれましたし、殺人なんて大それたことをするのは簡単ではありません。ですが、赤木さんは脅しもかけてきました。『探偵事務所からの報告なんて、秘書職である私にはいくらでも捏造できる』、そう言ってきたんです。そうなると自分は身の破滅です。勝ち組のスペーシア側に入る機会をせっかく掴みかけたのに、それを棒に振ることになります」
「全て赤木さんに唆されてやった、と言うんですか？」
「全てとは言いませんが、橋立さん殺害についてはその通りです。そうすれば、権力の空白も生まれます。そこに居座れるように全力でサポートするとも言われました。でも、全て嘘だったんです。彼女に騙されたんですよ！」
　深浦さんが突如として大声を上げた。私は思わず身を縮こませ、後退りした。礼士さんの手が優しく私の肩を叩き、撫でる。少し落ち着いた。
「赤木が橋立さんから言い寄られていたというのも嘘、自分をサポートするというのも嘘、彼女は一転して自分を脅してきたんです！　このまま自分を傀儡にして、会社の陰の実権を握る算段だったんですよ。彼女は真相を知っていますからね。殺そうにも、橋立さんと同じ方法が通用するわけがありませんでした。彼女は当然、自分を警戒していたので自らのこのこ給湯施設に出向くわけもありません。なので、自分は一計を案じました。『初日の夜にロングヘアの女性を見た』という偽の証言です。窓ガラスの矛盾にはもっと早く気付くべきでしたね」
「待って、夫が不倫関係にあった、というのは嘘なの？」
「少なくとも赤木とはそうだったんじゃないですか、他に女がいたかどうかは知りませんよ」
　星美さんの悲痛な声に犯人は投げやりに返す。押鳥夫妻にもこの辺の真偽は分からないだろう、プライベートまで含めた調査はしていないのだから。
「この霧降荘にロングヘアの女性は二人しかいません。星美さんと赤木です。本来、犯人の目撃証言では『ショートヘアの女を見た』とか、『ポニーテールの女を見た』とか、とにかく自分、それに赤木が疑われるような証言はしない段取りでした。それをいきなりひっくり返されたものだから、彼女は激怒していましたよ」
　ショートヘアの女って……私しかいないじゃないの。冗談じゃない。深浦さんは一度言葉を切り、間を置く。
「橋立さんを誘い出すのは簡単でした。美由のことで大事な話がある、二人きりで話がしたい。そう言うと簡単についてきましたよ。給湯施設までの道には融雪装置があって足跡がつきませんし、殺すには適していました。ここまでは赤木も把握していた計画です」
　犯人はずっと縛られて腕が疲れたのだろうか、もぞもぞと身を動かした。一同に緊張が走るが、当の本人はそれ以上何もせずに話を続ける。
「給湯施設の建屋に鍵を掛けなかったのは当初の計画通りです。橋立さんを自殺したように見せかけることが目的でした。最初から鍵を掛けてしまうと他殺だとばれてしまうため、あまり好ましくありませんでした。あの建屋は内側から鍵がかかりませんからね。赤木らしき女性を見た、という嘘の証言で彼女をおびき出すには夜間がベストです。橋立さんの死体が昼間に見つかって、それがすぐに他殺だと看破されないようにあえて鍵を掛けなかったんです」
　他殺とばれて、赤木さんをおびき出すための時間稼ぎだったわけか。ぎりぎりの匙加減だ。
「夕食後、彼女は説明を求めました。それで自分は彼女を呼び出しました。除雪車の所に。そこで、ええ、剱さんが言った通りです。その黒いショベルで撲殺しました。ですが、ここで誤算が起きます」
「美由がその一部始終を見てしまったのね」
　低く冷たい声が星美さんの口から漏れた。
「彼女を殺すつもりは最初から無かったんです。ですが、見られてしまいました。彼女は自分の行動を見て、父親殺しの犯人を悟りました。その敵討ちのつもりでしょうか、ショベルを奪って自分を殺そうとしてきたんです」
「自分の事しか考えず、口封じのために殺した。そんなあんたに美由さんを悪者のように言う権利は無いわ」
　そう言う私の言葉は氷柱のように鋭く、冷たい。怒りの震えが声に滲む。犯人は肩をすくめた。
「信じてもらわなくても結構ですが、自分はそのまま彼女の首辺りをショベルで殴りつけました。彼女はそれで倒れて微動だにしなかったので、そのまま死んだと思ってしまいました。剱さんの推理を聞く限りではまだ生きていたようですね。死因が青酸中毒と推定された時は混乱しましたが、経緯を聞くと納得です」
　他人事のような口調に星美さんの手がわなわなと震えている。目つきが刃物のように鋭利になる。

「後は剱さんの推理通りです。遺書を赤木が書いたように偽装したのも、彼女に全ての罪を着せるため。そうすればもう自分に邪魔者はいません。ショベルは浴室で洗ったんですが、洗い残しがあったようですね。錆は赤木の血のみならず、美由の死体を冷やす時に使った塩が悪かったのかもしれません」
「風呂場で凶器を洗ったからあのタイルは濡れていたのか……ということは、調べたら風呂場からも血液反応が出るでしょうね」
榊原君が納得の表情を浮かべた。その眼前で告白を終えて座り込むのは、今までとはまるで別人のような男だった。しなびているだけだ。
「不正を全て明らかにしろ、と押鳥さんに言ったのはどういう意図だったんですか？」
「橋立さんが死に、赤木が死んで裏を知る人はいなくなりました。美由が死んでしまったことにより婚約は意味を成さなくなりましたが、自分にとってはスペーシア側に回ってから初めて自由に動ける立場になったんです。ならばどうするか？　自分を捨て駒にした連中を片っ端から追い出して、全部自分のものにできます。不正に手を染めた人間を追い出すことになるので、自分の株も上がりますしね」
礼士さんの問いにぺらぺらと答える。人を殺しておいて何をほざいているのか。
「霧降荘の中に限って言えば、自分はこんな不正に目をつむらない善人だというせめてものアピールでもありました。善人があんな連続殺人に手を染めるはずがない、そう考えることを期待していたんです。剱さん、あなたがここにいることが一番の誤算でしたよ。あなたにもう少し早く出会っていれば、もう少し早く赤木の魂胆を見抜いてもらえていたら……自分は助かったんでしょうか」
それに答えたのは押鳥さんだった。
「それは違う。あなたは自分の意思で助からなかった。頼ろうと思えば、俺達の同僚に頼ることもできました。俺達はこれでも探偵なんですから」
何かが切れたかのように、深浦さんはそれを聞いて笑い出した。しかしそれは一瞬にして終わりにさせられた。ロングヘアが波打ち、その残像が俊敏に犯人に迫り、そしてその浅黒い顔面を殴り飛ばした。
「どわっ！　おい橋立、お前……」
吹っ飛んだ犯人をもろに喰らった釜田さんが大声を上げる。
「うるさい！　お前が……お前さえいなければ美由は死なずに済んだ！　夫も死なずに済んだ！」
星美さんが追撃を繰り広げる。拳だったはずの彼女の手がショベルを振り回す。犯人の顔にめり込む。
「殺してやる……殺してやる！　美由の分まで、夫の分まで、何度でもあんたを殺してやる！　二人を生きて返してくれるまで、何度でも！」
私達が総出で星美さんを押さえつけるまで、深浦さんは笑いながらも殴られるがままだった。身動きを封じられても星美さんは呪詛の言葉で声帯を裂き続けた。
「捨て駒、かぁ……」
犯人が呟く。窓の外はまだ真っ暗で、外の景色ではなく私達の姿を映しているだけだった。

＊　＊

深浦さんは笑いを止め、殴られて歪んだ輪郭の顔を礼士さんに向けた。ぼたぼたと血が畳に垂れている。
「探偵さん、あなたには一つ誤算がありますよ」
「誤算？」
顔が潰されて呂律が回らなくなった犯人の声に、礼士さんは不審げな声を上げる。
「ここで橋立さんを殺すことを提案したのは、自分なんです。どうしてだと思いますか？」
「特定の人しかいない環境で殺人をするとなると、誰かしらに濡れ衣を着せるためだった、とかですか？　あなたの場合、赤木さんの遺書がそれにあたりますが」
薄笑いを返される。
「それもそうですが、それだけではありません」
そこから私は目を疑った。ホースが解かれ、深浦さんがばっと立ち上がったのだ。
「い、いつの間に！？」
「あっ、俺の包丁！」
さっきの取っ組み合いの時にどさくさに紛れて釜田さんから包丁を奪い、ホースの結び目を切ったようだ。この期に及んでとんでもない男だ。
「ここだと、証拠を全て消すことができるんですよ」
深浦さんはそう言うと包丁を投げ捨て、逃げ出した。
「あっ！　こら、待て！」
榊原君がそう叫ぶ頃には、犯人は既に玄関を出ていた。みんな揃って後を追うが、再び降り始めた大粒の雪で視界が利かない。
「あそこだ！」
ソニック君が指差す方向にはボイラー建屋があった。犯人はそこに一目散に走っていく。追う。怨念を抱えた鬼神と化した星美さんが段違いに速く、深浦さんとの距離をみるみるうちに縮めていく。
「証拠を消すって……まさか！？　みんな、近寄るな！　戻れ！」
礼士さんが叫ぶのと、深浦さんが給湯建屋の扉を開け

放つのがほぼ同時だった。星美さんは聞く耳を持たず建屋の中へと突っ込み、一瞬にして崩れ落ちた。
「瑞穂さん、伏せて！」
礼士さんの怒声、そして。
閃光と轟音。
青い輪郭の炎のうねりが一瞬にしてボイラー建屋を消し飛ばし、その流れはアスファルトを砕きながら融雪装置、別館、本館へ伝播し、全てを一瞬にして粉々にした。
＊　＊
「……瑞穂さん、大丈夫？」
「れ、礼士さん……重い！」
「え？　ああ、ごめんごめん！」
恋人が身を盾にして守ってくれたおかげで、私は無傷だった。礼士さんも含め他の人も服に焦げ穴ができたくらいで済んだ。
「証拠……消えちゃったわね」
礼士さんは呆然自失としたせいか、燃え盛る本館の前で膝をついた。炎は血のように赤く、時折思い出したように硫化水素が燃えて青い炎が弾ける。
「あの馬鹿……死んだって、何の償いにもならないだろ……！」
その言葉に、私は礼士さんから顔を背ける。
「……お湯が熱いと思ったのも、硫黄の匂いが濃い気がしたのも、気のせいじゃなかったんだな、まっち」
「ああ、ソニック。橋立さんの時と同じ操作をして、ガスを溜めたのか……そういや、硫化水素は可燃性だったな。あの人、ライターを持ってたっけ」
「……おい、橋立はどこだ！？」
釜田さんが立ち上がり、辺りをきょろきょろと見回す。
「ガスマスクもしないまま建屋に入って、そのまま……」
夏奈さんが言葉を切り、首を横に振ってうなだれる。
「そうか……あいつには悪いことをしたな。赤木を引き上げるロープを探していた時、お茶なんて入れずに深浦と一緒にいればよかった。手分けして探す、なんて鵜呑みにした俺が馬鹿だった。こんな細工をしていたなんてなぁ……」
その時、何かが私の心臓を鷲掴みにした。
「……何の音だ？」
押鳥さんが張り詰めた声を出す。
まただ。
礼士さんにきつくしがみつく。
恋人の大きな体の向こう側で、今の爆発で引き起こされた新たな雪崩が道を塞ぐのが見えた。
燃え盛る建物の崩壊音は、雪崩の地響きは、過去に襲われた私の悲鳴で全て掻き消された。

エピローグ

ガレージは爆風で歪み、延焼が始まるのにそう時間はかからなかった。しかし、そうなる前に車を出せたこと、それ以前に車がほぼ無傷のままだったのは奇跡に近かった。夜が明けるまで、めいめいに車中で暖を取った。
爆発の影響は凄まじく、複数の雪崩で退路が断たれた。後で聞いた話だが、夜を徹して除雪に当たっていた救助隊には被害が無かったようで、それがせめてもの救いだった。
夜は長かった。水も食料も無い。全て燃えてしまった。建物を燃やし尽くす炎は夜が明けてからも衰えることはなかった。徐々に、しかし確実に、館の輪郭を侵し、崩していった。燃え尽きる頃には、５人の遺体はもはや遺体の体を成していないかもしれない。
警察の救助ヘリが来たのは、すっかり日が昇ってからだった。悪夢をヘリのローター音が裁ち切った。ロープで吊り上げられ、空へ。
「車は雪崩が全て片付いたら、順次麓の街まで下ろしてくれるって」
「ありがたい。秋田県警に感謝しないとな」
僕は窓の外を見た。眼下には黒煙を上げて燃え続ける霧降荘の姿が見える。山火事を防止するためだろう、消防のヘリが消火用の薬剤を撒いている。
「でも、車以外の荷物はみんな駄目になっちゃったな。俺達がほぼ無傷で助かっただけマシか、まっち」
「命あっての物種、だな」
同乗するソニックの言葉に、僕は半ば上の空で応えた。霧降荘に来た時には、こんな事件に巻き込まれるとは、こんな帰り方をするとは夢にも思わなかった。
麓の街では警察から事情聴取を受け、二日ほど足止めされた。事情聴取が終わる頃には車も手元に戻り、僕とソニックは家路につくことができた。
家に着いたら、とりあえず修理と洗車をしないとな……そう思いながら、僕は煤にまみれた愛車のアクセルを踏み込んだ。
余談だが、大学が始まってから僕が法医学を受講することは無かった。さぼったのではない。仏谷教授がスペーシア製薬との裏取引に関わっていたとして告発され、大学をクビになって授業が閉講に追い込まれたためだ。
＊　＊
深浦さんからの依頼をどうするか。口頭で頼まれただ

けで正式な契約ではない。それでも、俺とナナちゃんは探偵社の方に電話をして協議した結果、全て警察に話すことにした。どの道剱さんや榊原君も話すだろう。口をつぐむ必要はない。

事情聴取が終わり、秋田を離れる日が来た。帰りの新幹線の車窓から、霧降荘があったと思しき山が見えた気がしたが、トンネルで見えなくなってしまった。

「ハチくん、あれ」

ナナちゃんがドア上の電光テロップを指差す。『スペーシア製薬、複数の大学病院との癒着関係が発覚。今後捜査へ』と、オレンジ色の文字が流れていった。

「全てのごたごたにケリがついたら、スペーシア製薬には是非とも、馬鹿に付ける薬を開発してほしいよ。全く」

俺の皮肉にナナちゃんは軽く苦笑を浮かべた。

「あ、そうだ、あれをやっておこう」

俺はふと思い出して、例のサイトを開く。探偵の情報交換サイトだ。初日に回答を中断したっきりだった。

「えーと、碓氷、碓氷……あった、ここだ」

既に相手の興信所から詳細を求める知らせが来ていた。俺は未だ慣れないフリック入力に悪戦苦闘しながら、少しづつ質問事項に答えていった。

「あ、ハチくん。これ貰った」

ナナちゃんがポケットから差し出したのは『居酒屋かま田』と印字された名刺だった。

「へえ。釜田さんの店か」

「うん。いつか、ゆっくり飲みに行こうね」

ナナちゃんはにっこりと笑い、名刺に目を落とす。俺はそんな嫁をよそに、最後の質問を入力する。

『碓氷瑞穂の最も大切な人は？』

剱礼士……碓氷瑞穂の一番大切であろう人。

こんなことを質問してどうするつもりなんだろうか。

いや、それよりも。

何者なんだろうか、あの二人は？

列車は降りしきる雪の中、じりじりと山越えに挑んでいく。

＊　　＊

事情聴取を終え、やがて日常が戻ってきた。

『居酒屋　かま田』は忘年会シーズンを迎え、私は日々きりきり舞いだ。礼士さんも年の瀬の帰省ラッシュを迎え、日々忙しく列車を走らせている。榊原君たちや押鳥さんたち、橋立家のその後がどうなったのかは知らない。スペーシア製薬が大変なことになっていることはニュースなどで小耳に挟んだ。あの事件は過去になり、少しずつ色褪せていった。

そんな、ある日の夜。私は仕事を終え、自宅に戻る。安普請のアパートの一室。鍵を開け、中に入る。

「――――――！！」

何が起きたのか分からなかった。気が付くと後頭部に鈍い痛みを覚え、口に強い圧迫感。誰かに口を押えられ、床に押さえつけられていた。

何？

誰！？

「久しぶりだな」

この声……おぞましく汚された過去。

「会いに来たぜ、碓氷瑞穂」

無理やり引きはがされたはずの過去が、なぜか目の前にいる。

「忘れたか？　笠原だよ、井上と一緒にヤった仲だろ？　あの野郎、殺されたんだって？　知らないとは言わせない」

声が出せない。殺された。殺されたって、まさか。抵抗できない。なぜか。目の前に見覚えのある顔があるから。

「おっと、声を出してみろ。こいつがどうなっても知らないぞ」

スマホの画面に映し出される人影。ラブホの出口で隠し撮りしたのだろう。でも、どうしてこの人が。

「剱って言うのか、この男。お前のこんなあられもない姿を見たら、本当のお前を見たら、何て言うだろうなぁ？」

服が乱暴にむしり取られ、胸がはだける。この男に、そして井上に喰われた傷跡がむき出しになる。

「俺のことを黙っていたら、この男を悪いようにはしない」

それから。

私は激痛にいたぶられ、白い邪悪が体の中を這いずり回る、あの日々の再来を味わされることになった。

私は笠原と一つにさせられた。

痛い。

怖い。

気持ち悪い。

でも、どうすることもできない。

結局、これが私。

礼士さんには見せられない。

あの人を巻き込むわけにはいかない。

さよならの時は近い。

〈第七話につづく〉

＊次回『Nの悲劇（仮題）』は三文文集２０２０年秋号に掲載予定です。ご期待下さい。